

96

30

# 得度友話

曹洞宗管長西有穆山禪師垂示 恐山 兼谷全庵

圓覺寺派管長釋宗演禪師題字 峨岑 小林良參編

東京 佛教社發行



96-301

# 禪 友 話

曹洞宗管長西有穆山禪師垂示 恐山 熊谷全應述  
圓覺寺派管長釋宗演禪師題字 峨岑 小林良參編



東京 佛教社發行



解 灼  
二 日





於茲の府に  
 出づる理を  
 法後之と演



垂誠一則

西有穆山 禪師

佛法の將來も、モウ駄目だ、今の坊主共が、イクラ騒いだつて、何の効もありやあ  
 しまい、寺は澤山ある、坊主は大勢居るが、肝腎の道心なんと云ふものは、全然念  
 頭がないのだ、葬式や法事は始めから商賣の様に考へ、たゞ寺があるから、寺に住  
 んで居るだけで、何の仕事も爲やうと思はない、信仰が如何の、宗教が何うのと、  
 禪屈はいくらでも云ふが、眞實の道心に至つては、全く塵程もないのだから仕方  
 が無い、佛教の第一は無常を観ずることで、無常を観じて佛法に入り、眞實の道心を  
 勵まして、出家得道の本意を貫くのが昔の坊主だ、今の坊主は、何が道心だか、何  
 が佛法だか知りやあしない、斯様などでは、佛法が繼いで往かう筈がないのだ、  
 昔の坊主だつて、ナニニ碌な坊主ばかり居たのではない随分馬鹿坊主もあつた、佛  
 とも法とも知らない坊主共も澤山あつたには相違ないが、今の坊主のやうに無道心  
 の奴は、あんまり無かつた、「志が篤い」と云ふとは、坊主仲間の特色であつたのだ



が、今の坊主は、肝腎の道心などは全く關はらず、無闇に學問ばかり爲たがつて居る學問も結構だが、無道心の寄合ひでは、佛法の前途が案じられるばかりだ、昔の坊主は、名譽を望んで頭を剃つたり、修行するさへ、俗僧だと云つて非難したものだ昔の坊主は、欲を絶ち、名利を棄て、修行に掛るのだから、何と云うて樂みもないまあ、名譽でも貪るぐらゐるが、一番の道樂であつたのだ、昔から高僧となつた者には、大分名譽を得たいばかりに坊主になつた者もあつた、其れも、昔は、人間に位付けが喧かつたので、坊主の外の者では、兎ても立身が出来なかつた、武士にしても平民にしても、公卿様や、上つ方の人々と話さへ出来ぬ、實に情無い有様であつたから、人の上に立つには、坊主になるのが一番捷徑だと思つて、わざ／＼坊主になつたのだらう、然し、其様云ふ坊主のとは、大抵名聞坊主と悪く云はれて、あまり人は褒めなかつたものだ、處が、今の坊主は何様だ、名聞を好むぐらゐるはまたしも名譽などを望むなどと高いとは云ふ暇がない、俗人にも劣る眞似をして、たまに衣をはれた處が、狼に衣を着せたやうなもので、一枚脱がせたら、直に無道心の正

體が現はれて了ふのだ、まづ／＼佛法が、此の坊主どもに維持されるやうでは到底駄目だナ

此間も或人に話したとがある、多分是からの坊主は、昔の修験者の様になるだらう修験者は、平常は、俗服を着て、百姓もする、商でもする、さて御祈禱となると、直に威嚴のあるやうなものを着て祈禱に取掛る、ドッセ、之からの坊主は、コンナものだらうよ、魚も食ふ、女房も持つ、それで、讀經の時だけは法衣を着る、此邊が上等の處さ、道心も無道心もあつたものぢやない、ツマリ坊主は商賣になつて、信仰も歸依も一層薄くなり、佛だか法だか分らなくなるに極つて居るのだ、けれども、世の中は妙なもので、また、其の腐り切つた坊主の中にも、時々エライ人間が出来るかも知れんから、ヌツカリ手も足も出なくなるやうになつたら、また、佛法興隆の精神でも持つて働く者が出来て来るかも知れぬ、人壽十歳にまで促つて来ると忽ち一念發起する者があつて、遂に八萬歳の壽命を保つに至ると云ふことが御經に説いてあるから、佛法の墮落も、ドン底まで往つたらまた盛り返して来るかも知



知れぬが、まわ今の處では、佛法は無くなつて儀式が残つて居るばかり、佛法は儀式の中に生命を持つて居るのだが、今の若い連中は其儀式まで輕んじて居るから、其儀式が衰へた日には、もう佛教なんぞは、無くなるに定つて居る、  
だが、まづ、是れはズット遠い話で、何も今直に佛法が衰へて了ふでもあるまいが何より先きに心配になるのは、寺院の無住になるとだ、澤山ある寺院が、残らず金持ちと云ふ譯でもないから、随分貧寺もある、スルト、其貧寺へ住職する者は誰だと云へば、ヤハリ若い坊主ぢやが、今の若い坊主は、ドシ／＼學問が仕込まれると懐は何様でも、氣ばかり高くなつて、眼ばかり上の方へ付けて居るから、兎ても田舎の小寺などへ蹲まつて、檀家の相手などを爲て居られなくなる小學校の教員になつても小寺の住職より都合が佳いと云ふ精神になるから、三十や四十の檀家を相手にする住職は、全く無くなつて来る、中學林や、大學林を卒業した者に小寺の住職を勤めさせるは、實は無理なやうなものぢや、そこで、無住の寺が殖える、まづ、當分の内隣寺の和尚に兼務して貰ふ、少し兼務の味を覺えると、檀家も、面倒は無

し、其の和尚も捨てたくないから、何時までも兼務をする、自然住職も居ぬから、寺は荒れる、コレでは佛教の隆盛は出来ぬから、仕方が無ければ、あまり利口でない坊主を拵へるが可いかも知れぬ、何にしても困つたものなのだが、ね前等も其の無道心な、馬鹿な坊主の中に立つて、道心ある坊主となるやうに心掛けるが肝要だ、華嚴經の中にだつたか、船が覆かへつて皆衆が助からずに水死したが、其中唯だ一人、靜に舟の中に居て、大勢の死骸が浮き上るのを見て、其死骸に取り付き、途々岸に着いたと云ふ譬が出て居た、今も其通りで、世間の坊主共は無道心の死骸ばかりだから、其中唯だ一人眞實の佛法を護持して往かうと云ふ精神のある者があれば其の馬鹿坊主を踏臺にして思ふやうなことが仕遂げられぬ限もない、併し、何にしても、心配などだ、世の諺に「古佛去れ」新佛來れ」と云ふが、古佛はドシ／＼去つて往くけれど、新佛は來ない、來た處だ其新ブツは佛ではない、新物だ新しい物が出來て来るまでだらうよ、  
ワシも、もう八十二になつて随分體は弱つた、越後の方でサン／＼困んだから、東



京で、斯うして居るのは、イクラか樂だが、何様も、今度曹洞宗で管長巡化規則などを設けて、此老僧を、ヤレ授戒だ、ヤレ説戒だと引き回ばされることになつて居るが、此様な馬鹿などは無い、説教や、授戒は、若い者にさせるが普通のことぢや、此年になつて、爺や婆を相手にして説教したと何の甲斐があるものか、祖録の提唱をするとか、本山の僧堂の雲衲の世話とかさせると云ふなら、まだ結構ぢやか、本山に出る前は、自由に辨道の助けか出来て、さて年老つて本山へ出ると、授戒屋となつて、全國に引き回される、とは、甚だ可かんとだ、それも規則となつては猶更ら可けぬ、全體今の管長と云ふ者や、本山貫首と云ふ者を、無闇に年老つた者に限ると云ふ風のあるのが大變な誤ひだ、管長や、貫首は年老りに限るとしてあるから自然飾り物となつて了ふのだ、之は一つ改良するが可い、今の若い連中も其中に管長になるともあらうから、今の中に其制度を改良して置かんと大きに困るぞ

### 禪床夜話に序す

禪と云ひ禪を云ふ、豈今の所謂禪を云はむや、今の所謂禪宗なるものは、世界の各宗教の中の佛教と云へる成立宗教中に、一分派をなせる一個の宗教派たるに過ぎざるなり、宗派たる固より不可なしと雖も、今の所謂禪宗に籍せるもの、行動云爲を以て、直に禪の本面目なりとし、佛陀の福音を傳ふる禪林の響なりとせば、是れ甚しき佛祖の怨家なり、佛祖は未だ曾て禪なる一分派を成立せんとしたることなし、禪なる名稱をさへ、極力排斥せられし道元禪師の如きあり、廓然無聖と喝破せられし達磨大師の如きあり、以て其の眞意の那邊に在るかを察すべし、已に不立文字なり、其の釋尊の説くと説かざるとに關せざるなり、十字架上に



も禪の光りを認むべく、シナイ山上にも禪の響を聞くべし、尖電  
たるマホメットの劔にも佛身を現すべく、ユーランの經卷、衲僧  
自由底なり、ソクラテス我が爲めに禪を説き、プラトール我が爲め  
に經を講ず、論語豈孔子の説のみならんや、六經は我が注脚のみ  
ニーチエの一喝に道學先生氣死し、カントの三十棒に、全歐の學  
者色青し、此間の消息を通じ、此間の眞意を會するものは、即ち  
千古の謎を解し得たるものなり、東坡が溪聲山色に夜來八万四  
千の偈を聽き得て後、一代の文章皆如是經の展轉たりしにあら  
ずや、セキスピイヤの精髓、ダンデの神往如何と稽查し來れ、其  
處に禪林の響あらむ、ニュウトンの發明、ユロンプスの發見、其  
の心の底にひゞくは何か、神の福音と云ふも可なり、佛の光明と

稱々んも悪しからず、湊川原の関せきの聲、泉岳寺畔の松の響き、親  
鸞の唱名の聲、日蓮の題目の響き、何れか不立文字の眞音ならざ  
る、嗚呼、憤々たる成立宗派の徒、與に語るに足らず  
嗚呼日本佛教が、十八宗數十派、七萬有餘の寺院を有し、十萬の  
僧侶を有しつゝ、風俗月に頽廢し、人心日に危殆に傾くも、毫も  
之を救濟するの力なく、儀式、祭祀の宗教的行事の形式にのみ拘  
泥し、其の活信仰活生命の存せざる所以のもの、活ける佛陀の福  
音を傳ふる禪林の響、天下に響さわたらざるに由らずんばあら  
ず、本書は今や其の機を縦つて大に鳴らんとするもの、是れ余が  
喜んで序する所以なり、立案者熊谷全應師には、未だ相見せされ  
ども、東北の名師として、大名風に天下に聞え、髣髴として其の



人となりを欽仰する日久し、編纂執筆者小林良參君は、曾て北海道新聞に遊び、雑誌『佛教』に「一夜流星神威に落ち、ちよあり夢に珠を呑む」と歌はれし、求信敬虔の士なり、飄然として歸來し本書編みて、予に序言を徴す、知己の言辭すべからず、自ら禪を知らざるを顧みず、敢て遺響を北風に托し、餘音を鴻雁に寄す

明治三十六年七月

仙臺客寓に於て

閉川 飯坂圓收誌

序 言

一、本書は、熊谷全應師が、東奥恐山に閑居して座下の禪和子に物語られたる雑談を筆記編輯したるものにて、同師の經歷爲人は、極めて八面玲瓏の性質なれば、語端毫も墻壁を設くるとなく、傍若無人に説破せられ、まゝ其全般を寫し得ざる所あり、且つ禪家の問話は、其談話の内容如何を問はず、寧ろ其の語勢を聴取して、初めて本領を解得するものなるに、筆者の筆路之に従はず、僅に胡蘆を描くの感あるは、深く自ら憾みとする所なり

一、本書は、熊谷師の校閲を乞ふ筈なりしも故ありて果さず、老師亦深く、斯種の文字の世に出づるを厭ひ、固辭再三に及ばれしも、東奥の禪伯を社會に紹介するの念切なるに依り、強ひて其許諾を得、剗劇に附したるものなり、讀者乞ふ幸に魯魚の誤を以て、罪を老師に嫁せざらんことを

一、熊谷師の談話は、常に在來の禪定家と異なり、禪旨を説示するに、最近科學の語を應用して、吾人を啓發せらるゝ所多し、悟道を以て理想となし、禪定を以て、



一種の心理學上の作用となすが如き、聊か奇異の觀なきに非ずと雖も、老師は、數十年來打成し來れる禪旨を會するに、最近の術語を以てせんとせる者、若し幸に此の一書に依つて、禪門の妙旨を、學解深き人士に聽取せしむる一助とならば其幸ひや、蓋し尠少ならざるべし

一巻頭に揚げたる西有老師の訓戒は、熊谷師の禪風の由つて來る所を知らしむる爲め、其嘗て師事せられたる老師が最近の垂戒を摘録して、聊か讀者の參考に供へたるもの也

一、本書出版に際し、道友飯阪閉川君は、種々の注意を賜はり、佛敎社主來馬琢道氏は校訂の勞を執られ、土岐善靜上人は本書の表紙に特に揮毫せられたり、本書の刻成するに當り厚く其芳志を謝す

東京淺草佛敎社編輯局にて

編者 小林峩岑識

### 禪床夜話目次

憂	宗	鎖	談	(一)
憂	宗	鎖	談	(二)
憂	宗	鎖	談	(三)
禪	朝鮮の禪史	宗		
朝	鮮の禪史	宗		
日	本の禪史	宗		
臨	濟	宗		
其	曹洞	宗		
其	黃蘗	宗		
其	普化	宗		
禪宗	歷史	上	に於ける偉大の居士	



印度に於ける宗禪の居士  
支那に於ける禪宗の居士  
日本に於ける禪宗の居士  
新聞紙と禪學  
禪とは何ぞ  
未證已證の時代は如何

附 錄

三百則 (披率提唱)  
萬法不侶因縁の話  
南泉磨磚打車の話  
裴休相國應諾の話  
青原答西來意の話  
南泉平常是道の話  
長沙莫忘想の話  
結 言

禪 床 夜 話

恐山道人 熊 谷 全 應 述

小 林 良 參 編

憂宗瑣談 (上)

維新以來佛教の衰頹した事は、誠に慨嘆に堪へぬことで、常に五六の有志者と、何とかして挽回せなければ佛教は日本から葬られる、で、お互に協力して之れが救済の良方法を講じやうぢや無いかと談して居たが、先づ今日以後佛教の命脈は一にお前方の力に待つ所が多いのだから、其天職を自覺して、上四恩を報じ下三有を資けん事を寸時も忘れぬ様に忠實に働いて貰ひたいものぢや、斯様なことを談すと、又支那人流の過去追慕談を出すかと思ふか知らぬが、元々宗教といふものは、如何なる世と如何なる時代とを問はず、社會人心を感化して、社會に先さんじ世論を挫き、



能く社會を指導するのが本面目で、決して社會から指導せらる可き筈の者ぢや無い、然るに今の日本を一瞥すると、觀るも涙の種に爲る事計り多くて、佛徒と云はず基督教徒と言はず、皆悉く社會の爲す所行ふ所に逐ひまくられて居て、對等の働きをして社會と拮抗する事が出来ない、實に困つた談ぢや無いか、其中でも耶蘇はまゝ可なり働いて居るから、神に詰責されても、一か八かの申譯も建たうが、サテ佛教徒の方だテ、若しも釋尊からお咎めに逢つたら、何んと言ひ逃れが出来る、所有罪を一々積み重ねたら、如何に慈悲と忍辱とを根本理想とする釋迦様でも、あつと計りに仰天せぬでは居られまい、然かし夫れは教祖のお咎めだから、懺悔して至心に正法護持の誓願さへ表せば、直に御勅許にもならうが、只一ツ我慢も容赦も出来ぬのは、今の世の曲學阿世の漢ぢやて、其等の輩は如何なる事を言つて居る、貧道は毎日々々耳にもし眼にもして、降魔の劔でも雨らしたい程苦々敷思つて居る、何んで有るか佛教徒の無下に毆らるゝ、惡罵の聲と、嘲笑の筆のよ、其惡罵の聲を耳にして、其嘲笑の筆を眼にして、十萬有餘の縊素は果して痛痒を感

するか、頗る疑問である、尤も、少し位は感じて居らうが、甚くは感せぬやうである、其證據には社會から面白半分に、揶揄はれたり愚弄されても、一人として之れに與ふる降魔の論が出ぬ、中には、忌々しく思つて居る學者や高僧が無いでも有るまいが、餘り皮相上の攻撃だから、困つたものぢやと苦笑するばかりだ、其小智識假面徳者になると、所謂甚深微妙の法を罵詈するものは、死して無間地獄に墮ちるから其儘打棄て、置けば可いなどゝ、妙な所へ理屈を附會け、自分が澤山に有つて居る弱點や缺處に氣が附かぬ、で、愈々世間は馬鹿とか鈍とか云つて之れを貶するぢや、此頃も或る新聞記者は此様な失禮の事を吐て居た、近時の社會問題として頗る面白からうと思はるゝ者は、僧侶問題である、昔は法師とか禪師とか、和尚とか律師とか阿闍梨とかいふと、隨分幅のさいたもので、ことによると神佛の様に尊敬されたが、釋迦の豫言した澆季の世と爲つた今日では、僧侶は天下の遊民であると輕蔑される、坊主とか僧侶とか方丈とか住持とか院主とか俠僧とか言ふ名稱を聞く、世間の人は大抵嘔吐を催しさうな感じがするのは、蓋し深い原因があるので



加藤博士の『佛教改革談』や、井圓博士の『僧弊改良論』位で、逆も救ひ得べき御易いものではなからうと思ふ、彼も此も併し乍ら、皆佛教根本の教義、否從來の僧侶が佛教と思つて居る似而非原理が、最早衆生濟度に適せないからの事で、坊主が信仰が無いから、布教や傳道の出来やう筈がなく、若し布教して居る者があつても、それは時代後れの老僧か、さなくば自分の鼻の下建立に醜態して居る偽善者、賣僧である、要するに僧侶の宗教的意識が變遷して舊來の佛教に満足が出来ず、さればとて新信仰も確立せず、衣食住には讀經や法談より、良分別もつかないといふ、過渡期、亂調子の境遇に陥つて居るのだから、僧侶を人類社會の一部分、日本の國民と云ふ邊から見ると、強ち打棄て、置く譯にもならないなど、勝手次第の熱を吹いて、各宗の腐敗臭氣の醜態期は眼の前に顯れて居ますと語つた、之れを聞いてね前方はどう思ふ、其記者の云ふ事が一々尤もでも無いが、僧侶の信仰問題を擔ぎ出されると、否ともいへぬ恐れが澤山にある、十萬の僧侶が有して居る信仰を試に解剖して見たら、言ひ惜い事だが殆んどゼロだらう、佛教の振はざる、僧徒の墮落したる、

誠に當然の結果ぢやないか、自ら有難いと云ふ、火よりも熱い信念が油起せなければ假令身は佛門に投じたりとて、世の惑亂者を感化することは出来ぬ、で、古來から能く高僧諸師がいはる、事だが、自信教人信でなければ不可ぬ、故に各宗の祖師方を見よ、何れも皆鐵石の如き堅い自信と、鉄腸をも溶かす如き熱き信仰があつたから、人心の救濟をする事が出来たのだ、昔から今に暨んで毫も其等諸高僧の理想は變遷興亡がないぢや無いか、乃で自信を強からしむる根本は何んであるか、先づ特色堅持の四字が自信の基礎とならうかと、貧道は思ふが如何ぢやな、さあ其特色堅持だて、眞宗には眞宗の特色があり、日蓮宗には日蓮宗の特色があり又禪宗には禪宗の特色があるから、其特色さへ堅持して、如何なる場合と如何なる境遇とを論せず特色即ち天職を正直に守つて出れば、成し遂げられぬ事は決してない、まづ手近い所で云ふと、軍人には軍人の天職があり、官吏には官吏の天職があり、商人には商人の天職があり、農夫には農夫の天職があり、男子には男子の天職があり、女子には女子の天職があり、親には親の天職があり、子には子の天職があり、兄弟姉



妹の間又自ら天職があるから、其天職さへ眞面目に盡して一生涯を渡れば、軍人でも官吏でも商人でも、農夫でも男子でも女子でも、親でも子でも、兄弟姉妹でも、決して人道の軌を逸脱れる事は無いのぢや、然るに世間の人は其天職に不忠實で、自分の特色を堅持すると云ふ自信を飲くから、不遇零落の苦淵に淪んだり、人知れぬ不平や不幸を嘆くやうな結果を來すのぢや、現に佛教界の有様がどうで、教徒の平素がどうであるかを眺たら、貧道の喋々する迄も無く明らかだらう、既に盡すべき天職を忘れて居るから、祖先傳來的檀徒の外、眞に正法護持を以て任ずる信者の出ぬのも當然の事である、さうして我が禪門は、古來から超然脱俗、高く塵囿を遠ざけ、直指人心見性成佛の證果を得る宗旨として、理論に憚らぬ者や經義の研究に飽き氣を生じた者が、どつしり尻を据えて所謂實參實究した特色の有る宗門ぢや、然るに昨今に於ける宗門の状態は如何、自分達が飯喰ひ種の盡きて了ふ事を忘れて居るではないか、軍人にして國家を守らず、農夫にして耕さず、工者にして造らざる詩人にして歌はず、學者にして教へず、教家にして説かざれば、其本分を知らざる

は勿論のこと、又其人々の價值は無いものと云はねばなるまい、軍人が豪いとか學者が尊いとか、詩人が善いとか、宗教家が有難いとか云ふのは、各其特色を働か出す事を云ふのだ、然るに身は同じく禪門の僧籍に置いて、矢張道元禪師の流を汲んで居ながら、悟道とは如何なるもので、坐禪とは何を指したのか、まるつきり知らない者が僧侶に入分五厘、俗人に九分九厘である、實に驚かざるを得まい、斯の如き哀れな處に禪と云ふ、名のみが存じて居るのだから、吾が宗風の萎微振はないのも當然である、と、云つて然らば自分も口説いた計りで、矢張打棄つて置く了簡かと、皆に嘲笑されては遺憾だ、まづ前に天職とか特色とか思はず口を止らしたから、是から自分の天職を語り出すとしやう……………

前きに云つたやうな次第だから、今や禪は僅かに臨濟宗の一部分に、微光を放ち居るのみである、是れ果して喜ぶべきの現象であらうか、否誠に殘念至極の事で、第一宗門衰頹の原因と成るのぢやから、此際和尚も長老も小僧も沙彌も、一齊に起つて此死禪宗を一番活禪宗に復すやうに、お前方も心掛けが肝要ぢや、然し如何した



ら死禪が活禪となるか、少し考へものだが、なほに其様に工夫を費す程のものではない、貧道の考へから談せば、極く手輕い方法なのだ、其れは斯う爲れば可い、從來禪門の僧侶が口に膾炙して來た即ち何々録を提唱するとか、何々公案を拈提するとか、何々の事を工夫するとか云ふ姑息極まつた俗氣受けの善くない僧侶獨占めのとを廢して、所謂提唱を講義といひ、公案を符牒と改め、工夫を研究と換へ、而して俗人が禪學を修める上に、一大便宜と一新生面を興へて見なさい、夫れこそ今の小學者や自稱禪學家は如何に満足して來集するか、恰も雲霞の如くに簇り來るに違ひないぞ、斯う云つたら舊思想に依つて養成された、自稱善知識や半熟御悟り家は、定めし、喝、汝は外道を學ぶ野狐禪かなあ、自己の妄見を以て教義を改造する積りか、然らば汝は死して三惡道に落ち、百千万劫を過ぐるとも生天する事は出來ぬなんと、大聲罵倒もするであらうが、遮莫、予は自己の妄見から教義の改造を計らうと企てるのでは無い、勿論遠磨以上六祖以上の力量が有つたらイザ知らず、常識以下の我々で、どうして教義の改造が出來やうぞへ、元より佛道の原理即ち眞理は、横

は十方に亘り、縦は三世を通貫して、毫も變易ある筈のものぢや無いから、國の文野を論せず時の治亂に關せず、文明の世では文明の人を感化し、野蠻の世では野蠻の人を濟度し、賢者にも愚者にも、西洋人にも東洋人にも、自由自在七通八達、應病與藥臨機應變其人の有つて居る知識と信仰の度とに依つて、無礙無障に與へ得る事の出来るのが、所謂宇內的宗教の大王たる佛教ぢやから、改造とか改繕とか其様な馬鹿なことが出来るものぢやない、が、然し乍ら如何なる明教良法たりとも、社會の趨勢と相共に推し遷り、國土の習慣や民心希望と相伴ふて出る明が無けりやあ、其國の人々を釋迦如來濟度下の善男善女たらしむる事は出來ぬ、で、予が今茲に改めねば不可ぬといふのは、教義の宣傳布教の方法を一新せよと云ふのだ、惟ふに従來の禪風舉揚の方法なる者を見るに、頗る迂遠な一種氣狂じみたやり口で、參禪に厚き志を抱いて一生懸命に思念を凝らす人も、其師範となる和尚方が、妙な變な手品使ひか、さなくば一種風變りの劇を演ずるから、遂には其信者に修道の念を薄くする事は、吾々が常に見聞して甚だ遺憾とする處で、近頃こそ其様な事は餘り耳に



せぬが、昔は皆そんな状態であつた、それ故に日蓮上人は瓦石の雨を降らして、禪天魔な姿叫んで極力禪宗退治にかかられた事もあるが、また其時代の禪宗は今日のやうに微弱の僧侶はアンマリ無かつた、仲には建長寺の大覺禪師のやうな、大徳の禪定家も居られたのだ、が、近頃の禪宗はどうか、奕堂逝き獨園遷り峩山化して、いまだ以上の諸師に亞ぐ禪定家は出ぬぢや無いか、之れ予が前にも述べた如く、餘り舊習古風に拘泥して居て、時代精神に適合せぬ教へ方を繼げて居るから、常識以下の愚夫愚婦には無論の事、理性とか科學とかで腦を丸めて居る者には、誠に適さない、否その言句に就いてさへ解釋が出来ぬ、解釋が出来ぬから信念も浮んで來ない、信念が浮ばなけりや自然馬鹿々々敷なる、馬鹿々々敷なればそんなに骨を折つたり時間を費したりして解らぬ所に力を盡すよりも、寧ろ常識で研究の出來る學問を取るが得策ぢやと、折角修し始めた坐禪も廢すやうになる、夫では布教の効が現はれぬから、誰でも容易に研究が出來る様の方策を取らねばなるまい、乃で古來から禪門には一種の病があつて、それが絶えず繼續されて來たから、禪は其人だけには

可いけれど、一般に普及することは出來ぬと、此様な陝隘の處に禪を葬つて置いたのは大層な誤解であらう、而して其一種の病とは何んであるか、『禪は修すべく説く可らず、參すべく講すべからず、若し強ひて是れを説き是れを講せば、早既に第二第三なり』と云つて、無闇矢鱈に痛い足を無理に折らし、そうして坐相が悪いとか居眠りをしたとかで、ドン／＼肩を打ち毆る、其毆られる數が年を重ねると、豁然大悟が出來ると云ふ様な狂氣じみた事を修禪者に施して居たから、所謂死禪死宗と爲つたのぢや、まあ能く考へて御覽、警策棒を持つて叩き廻はる者も、又其棒で叩かれる者も、双方とも何等の感情も思惟もない、ホンの形式的で打つ打たれるにしか止まらぬから、彼も此も同一の無意識作用である、無意識作用で悟道覺證が得られるとすれば、結構の事で、誰も彼もお悟りが得られる、殊に人が四肢を睡眠中に動かす時などは、最も無意作用の然らしむる處で、悟道は其中にされ様から、痛い結跏など組まなくも宜からうが、悟道は決して其様な窮屈な、形式のお祭騒ぎぢや得易からぬものぢや、異様の星の光や猫の走るのを見て、大悟底の人となる事が



出來得るなら、三世の諸佛歴代の祖師は、悲愴慘澹魂飛び魄躍るが如き御艱難は遊ばされぬ是が何より確かな證據である、然るに徳川時代から今日に至る迄の禪宗の師家方が、其道俗を接得する方法を見るに、甚だ失當の事計り演じて、いろはのいの字も見へない小僧共を、理由もなく酷めつけて虻蜂取らすの武田人形として了ふのは、宗師家の罪である、それも境界と知識とがそこまで進んで居て、其芝居や手品を見ぬく丈の能力ある者を相手なら、高祖大師も普勸坐禪儀の中に仰せられた如く、『指竿針錐を拈するの轉機、拂拳棒喝を擧するの證契も、未だ是思慮分別の能く解する所に非ず、豈神通修證の能く知る所とせんや』とあるから、ヒョツとしたら其芝居の作用が解るか知らぬけれど、一文不通一字不知の稚兒等が、如何して其轉機頓用の活作略が知れやうぞ、だから今の一寺院に任職たる所謂和尚とか方丈とかいふ者を見るに、多くは自分も分らぬ人も分らぬやうな駄法螺計り吹いて居て、着實の勉強をする人に乏しい、お悟りを丸呑みにしたかの如き大氣焰を吐くから、試みに一針頭を下して見れば案外五月の鯉で、腸は皆空々あはれの事には、ハガキ一

枚一席の法話すら爲し得る者の少ないのは、強ち其者計りを責むべきでなく、それ等の輩を養成した師家其者の罪も澤山にあらうと思はれる、其未熟なものが和尚だとか寺持ちだとか威張つたとて誰が心服するか、心ある人士は皆蔭で噴飯する、噴飯されても愚弄されてもまだ自分の缺點が氣附ぬ者を、名づけて馬鹿といふのである、扱て憐む可き半熟半可通者を、日進月歩の勢で押し寄せる幾多世間の波に、同伴も對抗も出來なくて、一生涯寺番で了せる不幸の青年僧侶を、二十世紀の世界に造つたのは、實に吾が禪宗の大失態で、千載洗はれぬ大耻辱である、是は全躰何處に原因するか、論ずる迄もなく從來の自稱善智識假而被德者が得意に教田を荒して来て、教外別傳不立文字の意義を思ふ存分に誤釋曲解したからである、教外別傳の意義を密傳相承と取るは、必らずしも深く咎むべき要も暫らくはないが、不立文字を不要文字と誤解するに至つては、誠に悲むべき極みである、斯かる誤想が三百五十年から曹洞宗を支配して來たから、禪宗の今日が孤城落日の嘆を呈して、洞門幾多の愛宗家が苦みつゝ在るのだ、全体教外別傳といふ事は、秘密にものを傳へるこ



の意味では無く、換言すれば釋尊から迦葉、迦葉から阿難、阿難から禪を東方即ち今の清國へ植傳された達磨大師に至り、更らに清國で慧可二祖となり之れを僧璨、道信、弘忍、慧能等の四高僧が繼承し、青原に及んで一禪二分して南宗北宗と岐れ、南派は曹洞となり北派臨濟となり、亞いで天童の如淨に傳はり、如淨之を道元(曹洞宗開祖)に譲つて、日本に曹洞の禪が移されたのちやが、其相承とか傳授とか繼承とかいへばとて、世人が誤想する様な秘密の品物とか巻物とかでは決して無い、釋尊の理想其ものを博識英邁の高弟に傳へたと思へば、毛頭過ちがないのである、然るに教外別傳ちやから、言論談議の及ばぬ奇々妙々の手品でも傳へるかの如くに其意を取り、不立文字だから眼に一丁字なくとも悟道が出来るなど談ずるのは、甚だ當を得ぬ愚論である、乃で一言注意して置きたいのは、教外別傳不立文字といふ事だが、全体其八字の出處は何れからで、又達磨が唱へられたのか、道元禪師が云はれたのか、誰も此事に關して明晰な立證を擧げた人がないから幸ひのこと序に咄すとしやう、教外別傳も不立文字も決して達磨大師や高祖道元の唱へられたので無

く、後世參禪有道の人が、禪の頗る高尚の妙味が有るといふ所から、絶言絶慮の佛性を暫らく形容して、禪と云ふものは仲々高遠深邃の教だから、迎も言句や文字や知解では、學び得らるゝ道ではない、乃ち言説以外文字以外に、別に靈々昭々として味ますべからざる光明が存するから、眞實法を求め道を修めて、出離生死を願ふ者はまづ暫らく言説に泥せず文字を避け、而て此事如何と工夫せねば、所謂言句や文字に計り逐はれて、阿僧祇劫を経て悟道はされぬぞといふ處からして斯く教外別傳不立文字の語が出たので、達磨や道元その御自身が爾唱へられたのちや決してないと云ふ事を主張して予は憚らぬのである、之に反し若し強ひて右の八字が達磨とか道元とかの口から出たものと固定する人があれば、予は謹んで識者の示教を仰ぐに吝ならずで、何處々々までも自分の揣摩臆測を逞うする考へは無いのである、然れども予は教外別傳不立文字なる語に就き、此の如くに解し得たから、斯様言つたのだ、が、天下の大善智識假面被徳者は如何なる卓抜の明論珍議があるか、夫れ迄想像するの暇がないから此事は此處で一段落を結んで、それから、もう一つ談さ



にや成らぬ事がある、釋尊が六年端坐の蹤跡と、達磨大師が九年面壁の御修道だて、後世の僧徒が是に對する説明は如何ぢや、甚だ奇怪至極の事を言つて居る爲め、現代の學者達は何れも皆嘲罵して居て、眞面目に傾聽する者は多くない、何故なればといふに釋尊が六年の端坐を説いては、一切の穀物を喰はずして一日中に木の實三個をしか食はぬと云ひ、達磨の九年面壁を談じては、地上に九年間坐禪して瞬目もなさらなかつた爲め、葦や萱が膝の肉を透して身邊忽ち藪と爲つたなど途方途徹もない事を語つて得意がつて居る、それは誠に教祖を誤る大間違で、如何な神通自在果滿圓成の釋迦如來だからとて豈か人間以外の佛でもあるまいから、木實三個を食つて六年端坐の長時間を過ぐされたとは決して受取れぬ荒誕無稽の昔譚である、要するに末流の法孫が餘りに難有味をつけ過ぎた結果であらう、予の拜察する所を語れば釋尊は總て我等と同等否人間の生活を檀特山といふ清淨の山中で送り給ひ、阿若憍陳如等を始めとし、其他幾多の有志者と或る學匠を師とし、其當時の印度の人心を救はんが爲め、一心不亂不惜身命の不動の念に住し玉ひて、孜孜研究遊ばされ

たる心酸苦痛を後人が推察し奉り、遂に斯の如き妄見誤解に陥つたのであると斷言する、又達磨大師の面壁も其通りで、石の様に堅く爲つて九年間坐禪されたと見るは誤解で、九年間一心不動の王三昧に住された事をいふたのだ、客が來たとか僧が訪うたとかいふ場合は、吾等の日々爲すが如き送迎の禮もされたのである、用のある時は用を辨じ、日が暮れば寢、夜が明ければ起き、飢來れば食し、眠催せば眼を閉ぢ、風の吹く時は風が吹くわいと感じ、雨の降る時は雨が降るわいと覺えて、日用光中一舉一動が吾等と毫も變つた所がなかつたのである、只唯變つて居たのは我々の様に意馬心猿に驅らるゝ事なくして、本地の風光換言すれば超然脱俗の高想が、日々是好日となつて如何なる理論で押し寄せられても、泰然動かざる事山の如く、煩惱の火燄が燃焼して來やうが、貪瞋の水が汎濫して來やうが、其様なものに決して浸されることのないのが即ち九年面壁の眞骨頭だ、此事は吾等の如き修養時代の黃吻兒には、未だ大に難しとする所だから到底摸擬が出來ぬ、畢竟達祖の面壁は以上所述の外に何等の妙不思議は無いのである、總て誤解程恐しいものはなからう、禪



の多く弊害百出して振はなく成つたのも、實に故ある哉で致方がない、されば教外別傳不立文字の誤解も、禪は嘗むべく説くべからずの誤解も比々皆然りぢや、

### 瑣談 (下)

禪は果して説く可らざるものか、否、「若し果して説き得ざる者とせば、禪學程無用の教はない」といふ事になる、「説かれぬものなりや何も寺院を建て、布教するの必要もないぢやないか」、是れ社會から受くべき當然の質問である、此質問を受けて多くの僧侶は能く閉口緘黙するであらうか、否仲々緘黙所の談ではない、必らず其れに對して述べ得らるゝ限り應答を試むるは火を賭るよりも明らかであるから、取りも直さず應機の説法ぢや、既に應機の説法が直指人心見性成佛とか、又以心傳心止惡作善とかいふ語より辨解されるとせば、強ち言句文字の上に現されぬ者とも斷言は出來まい、否説く可らざる者なりとも強ひられぬて、乃で予は又已見を以て所謂説く可らずてふことを、徹底説き得べしと主張するが惡からうか、若し誤つたら識者

の教を仰かんのみだ、何故に予は然かいふか、まづ左記の言に就き、讀者の熟考を請ひたい、高祖大師が『普勸坐禪儀』の中に、「矧や彼の祇園の生知たる、端坐六年の蹤跡見つべし、少林の心印を傳ふる、面壁九歳の聲名尙ほ聞ゆ、古聖既に然り、今人蓋ぞ辨せざる、所以に須らく言を尋ね語を逐ふの解行を休すべし、須らく回光返照の退歩を學すべし、身心自然に脱落して、本來の面目現前せん、恁麼の事を得んと欲せば、急に恁麼の事を務めよ」云々と、仰せられたのを謹んで拜解するに、文中自ら二段となり、「矧や」より「蓋ぞ辨せざる」に至る迄は、釋尊と達祖の勝躅を示されて、古教照心を怠るべからずと戒められたので、亦「所以に須らく」より「急に恁麼の事を務めよ」迄は言論談議に慊焉たる輩を來いよ々々と促された教訓である、依是觀之、普通智識を有せる者よりも、より以上の學者達は言文の詮議を離れて、端坐靜慮の工夫が肝腎である、併しながら自身は濫りに法の押賣りはせぬぞ、唯恁麼の事（發心求法の參禪者）を得たいとおもふ者は、急に退一步して須らく如上の研究を務むべしぢやと示し下された意義から、深く考へて見れば、馬鹿でも



愚圖でもそれは聞はない、皆悉く文字を要せず言説に滞らず、經疏を見ず、教理を研究せず、只木石の如くに坐つて居れば可いと云ふ思召しで無い事は明白で、所謂不要文字の輩や一文不通の痴兒などは殆んど眼中に置き玉はぬのである、高祖の「言を尋ね詰を逐ふの解行を休すべし」と仰せられたのは、參すべく説くべからずとの意義でなく、説いても々々聞いても々々々々、際限がない族に向つて、説く事も聞く事もまづ々々暫らく止めて、本來の面目如何と一工夫を凝らす可い、これこそ指竿針錐を拈する際にも觀佛性が出來、拂拳棒喝を擧するの際にも、先天内容の聲を聞く事を得べしと云ふのだ、其外一法の語るべく説くべきものはないと、向上の垂訓を與へられたから、後人其聖意を曲解して、禪を不言の啞者たらしめたのは、蓋し淺からの罪であるのだ、扱て前上方以上の所述を首肯するを得ば、予の禪は説き得らるべしとの斷案も、確實な立證として是を公にしたからとて別に深く咎める必要もなからう、之れ予が識者の叱責を犯して、敢て自信の片石を公告した所

以である、眞論か偽説か將妄議かは、聞かると人々の見解に一任して質問があらば妨げず、應答に躊躇せぬ、元來禪學と云ふ者は人の議論説法で、直指人心見性成佛と悟り得られる様のものとは異つて、まづ自ら修め自ら證して而して又自らの見解に任ずるもの故、自分が修め得た結果を公にしたとて、誰か又不可ぬと遮ざる者があらうぞ、例へば彼の村上專精氏が『佛教大綱論』を著した如く、鳥尾小彌太氏が『無神論』を著した如きは、皆夫々研究の結果を表白したものである、假令言葉が變つて居らうと、論述が俗向きに成つて居らうと、其様な事は毛頭咎むべき必要はない、夫れが不可ぬ非なりと騒ぎ廻はる輩は、未だ以て語るに足るべき器ぢや無い、故に予が今訥辨を呵して禪學談を試むるのは、世の多くに稱されたい、拍手で歡迎を受けたいと云ふ野心よりでは無く、唯予の語る趣旨を幾分にも聞いて被下る人さへあらば、予は夫れにて大満足である、必らずしも自分の豪いと云ふ慢心を談するのぢや勿論ありません



## 禪宗

禪を談ずるに當つて、禪宗の歴史を述ぶるは順序であるから、茲に禪の由來を示し併せて、禪宗の印度支那朝鮮日本等に行はれて居る、其概況を談すとするか、禪とは印度で禪那と云つて、支那では定と譯して有る、宗旨とする所は靜坐凝念心源を究明するを云ふので、各宗派の經義に拘泥したり又は修行に齷齪して居る様な、其様な迂遠の成佛の仕方ぢや無い、一超直入如來地と頓悟頓證するのであるから、説法を聞いて成佛するとか、法を傳へて成佛させるとか云ふ、小面倒の窮屈な教でもなければ、又阿彌陀の本願を頼み他力を仰いで極樂往生を遂げるなど、其様な横着極まつた懶惰宗ぢや無い、極めて眞面目に吾人が心靈の在所を、實參實究して自ら覺り自ら佛に爲つて、一切衆生を引導して出る宗旨であるから、是れが善だの之れが悪だのと數へ廻はらなくも、所謂直指人心見性成佛とさへ悟つたら、有情も非情も同時に成道の本面目を得たのである、然るに餘宗の説く所を靜に傾聴して見ると、頭

が痛くなる程小六ヶ敷くて、上根上機の人には到底荒唐無稽の昔譚か、さ無くば牽強附會の味増理屈とか聞くより外に仕方がない、故に愚夫愚婦には至極適當であるけれど、今日の如き種々雑多の學問が盛になり、殊に哲學とか心理學とかに熟して居る者には、各宗旨の教義は誠に不適當で、如何程盡力しても感化の効は擧がるまい、其心理學とか哲學とか唱へて、佛教は厭世教である、耶穌も厭世教である、宗教は總て厭世教である、故に樂天的生活に此世を樂しく送る者には無要である、殊に佛教の如きは地獄極樂を説き、六道輪廻を説いて人を迷はせるから信するに足らぬ、諸惡莫作衆善奉行位の事は宗教の感化に依らなくも、法律一方で勸善懲惡の實を擧げて出られるから、特に宗教の力を借りなけりや國民心の統一が出来ぬなどのとぢやないなど、勝手次第の非歴史的愚論を鳴らしつゝ有る今日は、是非とも禪宗の悟道を説くのが、極めて必要で有る、洋の東西を問はず、國の古今を論せず、必ず盛衰興亡と云ふものが循環して來るから、佛教の教義も亦時代に伴うて一衰一興あるは、數の免れざる自然の事である、故に知識の發達せざる未開の時代には、念



佛宗も題目宗も非常の難有連を得たは、掩ふべからざる事實であるけれど、第二十二世紀の今日では、それ等の宗旨は僅かに老爺老婆の間に、漸く其命を維げる計りで、學理の研究に懊惱して宇宙萬象の外に逍遙したいと、種々に論議の格闘に餘念もない今人を濟度するに適せる宗旨は、予は憚りなく斷言する、禪宗最も可ならんのだ、斯く云へばとて、予は各宗旨を悪く云ふのぢやないぞ、聞き違へられるとトンだ迷惑をして、或ひは各宗の和尚さん方の怨恨を貰ふかも知れぬ、勿論何事にまれ一主義を以て、大は社會を小は國家を經營されるものぢやない、必ず種々の異主義を唱へる者があつて、始めて社會國家の平和を永遠に保てるのぢやから、人心の要求が異なる如く、佛教の應病與藥法も亦異ならざるを得ずで、天台宗あり、眞言宗あり、淨土口蓮等幾多の宗旨が各其要求の深淺厚薄によつて、佛陀の福音を鳴らすあらば、所謂佛教といふ大建物を堅牢に持續されるから、決して宗派を非難するなど其様な考へはないのである、

に有つて居ても、さう輒く許可する宗旨ぢや無い事は、達磨大師と弟子の慧可和尚の間に於ける問答を見ても明かなる事であらう、其話は後に出すが實に難中の難たる行事を勤めるのが禪の特色だ、釋尊會て靈山會上に法幢を翻へし給ひたる時、華を拈じて幾萬の弟子達に示し給うた、然れ共多くの弟子達は其如何なる事であるか、釋尊の拈華示衆を解する者なく、默然として盤の如く啞の如く、誰一人あつて發聲する者が無かつたとある、然るに其茫然顔まんげんと顔を見合はして居た幾萬の衆中に、唯金色の頭陀大迦葉尊者獨ひとりクスと破顔微笑して釋尊の容顏を瞻仰したのである、所が釋尊曰く、『吾に正法眼藏涅槃妙心あり、今汝に附屬す汝當に護持すべし』と、親ら僧伽梨を解いて迦葉尊者に賜うて、信を表せられた、是れが禪旨の源流であるから、師資の相承嚴密である事は明らかで、一點の疑ひを挿む事は出来ぬ、既に此靈山會上が禪の生れ地であるから、同時に迦葉尊者が禪宗の第一祖で有る事も豫め記憶して貰ひたい、織田得能師が『三國佛教略史』には、『拈華の事諸經見る所なし』云々とあれど、コハ以心傳心の法門であるから、經義に依つて教を垂れ又宗旨



を開いた宗門に比すれば、稍本據を失せる感が無いでもないが、殆んど三千年間拈華微笑の事實及び其理想が、發して禪宗となり沈んで靜慮となり、幾億無數の靈性を感化して今日以後とても、「此道の研究者や或ひは參禪者が到る處に渴仰して居るから、暫らく拈華微笑の靈山會上を動すべからざる事實として、之を禪宗歴史開卷第一頁としたとて必らずしも混沌の「氣分かれて陰陽の二と爲るな」と云ふ儒者の唱へる臆想談にもなるまい、で、近頃重野博士を學ぶ抹殺論者たらぬ様、眞面目な着實な研究態度を取つて貰ひたいものである、此れも彼の經に無いから中世の偽物製造ぢや、彼れも歴史に徴すべき確乎の證據が無いから拵らへ物だと、片ツ端から抹殺して了つたら歴史としての働きを留める事は出来まい、殊に或る律師さんとかが、何とかいふ月刊雜誌に「遠摩大師を抹殺するの止むを得ざる論」と題し、十ヶ條の疑議を證として滔々辨じたとか云ふ話ぢやけれど、コハ當時の教勢、及び佛教の傳播を見る丈の明なき愚論である、遷化の年月日の相違や又は不明を以て人造理想の遠磨である、信を措くに足らぬ者など騒ぐ様な輩は、恐れ多くも釋迦牟尼如来をも抹殺し兼ねまい、働して當に哭すべきである、何故かと云ふに、世尊入滅の年月日、其他出家成道等の異説は區々一定して居らぬ、或は神武天皇紀元前二百八十九年と云ふ者もあれば、或は同百七十一年と云ふ者もある、「遁宮御出家の事も十九歳なりと唱へる人もあれば、或へは二十五歳なりと論ずる史家も有る、是等を材料として穴探しをすれば、釋尊と雖も、寓意小説の描き物として、忽ち葬り去る事が出来る、實にわけもない無造作の事である、況んや其降誕當時に「天上天下唯我獨尊」と獅子吼せられた如き、迦葉尊者が葬送に際し金棺の中から、光明を輝き給ひて、迦葉に握手されたる如き、「皆之れ抹殺の種ならぬやはある、惟ふに抹殺と云ふ言葉は決して穩當の事ぢやない、それでも釋尊當時達祖當時の事實を能く目撃した其人が、今日までも生きて居て、是非眞偽を説き示すなら元より其説に服さなければ不可ぬけれど、寡聞少見にして僅かに歴史の傳へたる證明で、當時の状態如何を知る位な者では、到底抹殺など云ふ眞面目な議論がドウして成立しやうぞ、自分丈では鬼の膽でも奪た様な心持ちで、獨り得意がつて居るか知らぬぞ、多少史に研

來をも抹殺し兼ねまい、働して當に哭すべきである、何故かと云ふに、世尊入滅の年月日、其他出家成道等の異説は區々一定して居らぬ、或は神武天皇紀元前二百八十九年と云ふ者もあれば、或は同百七十一年と云ふ者もある、「遁宮御出家の事も十九歳なりと唱へる人もあれば、或へは二十五歳なりと論ずる史家も有る、是等を材料として穴探しをすれば、釋尊と雖も、寓意小説の描き物として、忽ち葬り去る事が出来る、實にわけもない無造作の事である、況んや其降誕當時に「天上天下唯我獨尊」と獅子吼せられた如き、迦葉尊者が葬送に際し金棺の中から、光明を輝き給ひて、迦葉に握手されたる如き、「皆之れ抹殺の種ならぬやはある、惟ふに抹殺と云ふ言葉は決して穩當の事ぢやない、それでも釋尊當時達祖當時の事實を能く目撃した其人が、今日までも生きて居て、是非眞偽を説き示すなら元より其説に服さなければ不可ぬけれど、寡聞少見にして僅かに歴史の傳へたる證明で、當時の状態如何を知る位な者では、到底抹殺など云ふ眞面目な議論がドウして成立しやうぞ、自分丈では鬼の膽でも奪た様な心持ちで、獨り得意がつて居るか知らぬぞ、多少史に研



究を凝した人達は、齒をひき出して笑ふかも知らぬ、殊に學者を以て社會に立ち、  
文士を名として社會に説く者などは、餘程深く注意せなければならぬ、後世に愚を  
笑はれては大なる慚晒した、が、其律師も仲々間拔けの人である、達磨獨りを抹殺  
して何故禪の源流たる、世尊拈華迦葉微笑の一段を抹殺せなかつたらう、不思議の至  
りぢやないか、達磨大師は支那禪宗の第一祖だから、當人の考へでは、コイツ何でも  
達磨を抹殺したらば、東洋の禪宗は悉く死んで了つて、南無阿彌陀佛宗計りが勢力を  
得んと早計したのだらうが、可惜、律師が淺見拙さよ、肝腎の靈山會上を抹殺せな  
ければ、律師位の抹殺論では、ナンぼう無一物を標榜する禪宗ぢやとて、さうく  
容易く、東洋各國からね拂箱を負はせられた上に、無一物宗更らに空無とは消えぬ  
故、其様な心配して辨疏せなくとも可いのだ、さり乍ら氣の毒なのは其律師であ  
る、苟も戒法を護持して倫道の模範者と成る人が、自ら自己の本分に戻る様の抹殺  
論など吐き出すとは、實に以ての外の罪人である、無智蒙昧なる和尚達は兎もする  
と其抹殺を信じないでもあるまい、さすれば中々の罪人である、律師亦遺憾ない筈

である、故に一言述べ置くのだ

### 禪宗の起原及び禪宗支那に入る

扱て禪宗は迦葉尊者を以て開祖とすべきは、誰も長く異議の無い事と思ふが、爰に  
聊か注意を要するものは、迦葉尊者は禪の首唱者であつて、云はゞ家屋の柱立てだ  
けをした人で、未だ是非議すべからざる本尊に過ぎぬ、其能く禪たる宗旨の家屋を  
完成し、一大建物として之れを世に示めされたは、迦葉尊者から二十七代を過ぎて  
達磨大師と云ふ高僧の方である、乃で迦葉より阿難に傳へ、阿難から次第傳受して  
菩提達磨に及び、此間は衣法の二を以て師資相傳へられた、是を天竺の付法相承と  
申すのである、故に其間は矢張釋尊拈華の式を形ち取つて、夫れを相傳相承して居  
たものと思へば、毫も誤る所はないかと思ふ、語一轉、大通元年達磨大師が今の南  
印度から支那の廣州へ渡られて、禪旨の傳播に従事された、或る時梁の武帝、磨大  
師が渡來の事と、及び不思議の生活を營むとの事を聞き、天竺の一異僧彼何物ぞ、



試みに問ふ處あるべしとて、早速群臣を隨へて磨大師を訪はれた、一説には磨大師自ら帝を尋ね、帝又喜んで迎へたとあれども今は其説を取らぬ、帝問うて曰く「朕即位以來、寺を造り經を寫し僧を度する事勝げて數ふべからず、何の功德かある」、磨曰く「並に功德なし」、帝曰く「何をか眞の功德と謂ふ」、磨曰く「聖諦第一義」と、是は漢文の和譯だが、今諸氏の爲めに解し易く語れば、朕即位してから寺を多く諸方に造つたり、釋尊の説かれた經文を多く寫したり、又無數の僧侶を請して供養したりした事は、實に數へ切れぬ程であるが、其果報としてはドンな功德がありまじやうと、少し自慢氣で達磨大師に問はれたのである、處が磨大師の高想なる、悟道の中には皇帝も何も無い、大聲疾呼、功德などは毛程ありません、帝も今度は胸中大に不愉快である、朕が如上列記の事を問は、必ず生天の樂を得て永く出離生死の本懷を遂げられるであらうと思ひの外、無功德とやられたので聊か憤色を浮べ、然らば何が眞の功德でありますか、磨曰く聖諦第一義、まづ吾人本來の眞性を諦めるに在ると答へられた、けれ共帝未だ其器に非すと見え、達磨が無功德と云つたを

旨を領會する事が出来なかつた、乃で磨大師も大に感ずる處があり、まだ吾れの教を布くに機熟せぬとて、遂に江を渡り嵩山の少林寺に錫を留め、凡そ九年間修禪三昧に入つて、時機の到るを待たれたとの事である、後魏の孝明帝磨大師の高風を欽慕し、使を遣はして三度召されたけれど、磨、頭を掉つて曰く、來る者には妨げず山色の青さを觀せしめん、焉んぞ自ら到つて法を賣るの要あらんやと、トウ、帝の使命を奉せず、大同元年十月五日遷化された、之を支那禪宗の第一祖と稱する次第である、磨の身を潜めて現さずと雖も、馥郁たる異香は遂に掩はれぬと同様で、磨大師の神光は深山の奥の少林寺から、四百餘州を照破して障礙はない、故に到つて法を求めたのは慧可大師である、其際の間答又大に記憶すべき者あれど、暫らく此に略すとしやう、慧可大師は達磨の衣鉢を受けて支那禪宗の第二祖となられ、慧可之れを僧璨に傳へ、僧璨之れを道信に傳へ、道信之れを弘忍に傳へて、此間は純一無雜更らに分岐線は無かつたのだ、が、弘忍から始めて南宗北宗の二派に分れ、大鑑惠能と云ふ和尚が南宗の開祖となり、大通神秀と云ふ和尚が北宗の開祖となり、



蘭菊各其香を競うたのである、南北二宗とは大鑑惠能の禪一流は専ら南地に行はれて隆盛を極め、大通神秀の禪一流は一ら北方に行はれて其勢を擅にした事を云ふのである、北宗の神秀派は後世に分岐なく、一直線に支那朝鮮日本の三國に傳はつたが、之れに反して南宗は非常に隆盛を極めただけ、其れだけ又四分五裂の餘儀なき結果を呈した、何であるか、五家七宗の別である、所謂五家とは、一に臨濟宗、二に滄仰宗、三に曹洞宗、四に雲門宗、五に法眼宗是である、七宗とは其五家に楊岐宗と黃龍宗の二宗を加へて七宗と云ふのです、今略して分派の次第を談せば、五祖大滿弘忍禪師は支那でも空前絶後の大善知識であつて、四方八方より集つた雲水僧が七百人程留錫して居たとの事である、コハ決して無根の駄法螺を吹くのでは無い、支那高僧傳や各宗史要等にも詳述してある、乃で、惠能の居士も禪師の高風を追慕して弘忍の下へ至つた、弘忍熟々惠能の顔色を眺めて居たが、何か思ふ所あつたと見え、惠能に諭すに碓坊の春を以てしたさうぢや、惠能も弘忍の意を領じて、命ぜられた如く碓坊に入つて春く、入寺八ヶ月を経て、弘忍禪師七百の衆僧を聚め、

各々一詩を作らん事を命けられ、若し語意共に吾の理想に冥符したら、其時こそは衣法の二つを傳授して、證悟印可の信と爲すべしと諭されたので、七百の大衆各有らん限りの詩藝を絞つたが、未だ甚だ幼稚にて悟道の躰裁も具へぬ、時に神秀和尚は僧七百人の第一位を占めて居た、故に其境界も必らず或程度にまで進んで居たに相違なからう、神秀其事を聞き、今こそ吾が活機用を廻らす時であると密に打喜び、廊壁に特筆大書して曰く、

身是菩提樹 心如明鏡臺 時々勤拂拭 莫遣惹塵埃

若し此外に人物がなかつたなら、衣法は必らず神秀大師に授けられる事は、實に疑ふべからざる好機會である、其文其意其用、仲々侮り難きもの有つて存せり矣、然れ共神秀未だ器物ぢやないと嘲笑した惠能居士ありし爲め、惜いとは弘忍の理想に冥符しなかつた、惠能は碓坊に在つて此事を聞き、密に廊壁に到つて神秀の偈を見、からくと笑つて云ふには、神秀首座もさるもの、書きたるは大に好し述べたるは實に是なりである、されど了は未だ了ならずであると、今度は自らの偈を其



傍に記して

菩提 本非樹、明鏡又非臺、本來無一物、何處拂塵埃

弘忍禪師其偈を見て大に悦び、早速惠能を召して告げられるには、佛祖正法の眼藏展轉傳授して吾に至る、吾今汝に正法を授け袈裟を傳へて信を表するぞと、其時、早や大悟徹底の印證を受けたのである、惠能、弘忍禪師の足を拜して、其夜通夕、南方に往き數幾万の道俗を聚めて禪を弘通された、是が南宗の開祖である、惠能は斯くて一方の開祖と爲つたが、神秀も又弘忍の法を傳はり、北宗の開祖と爲つた、彼米頭の惠能に比すればや、稚き處ないでもないか、其勢力は互に相拮抗したのである、武后の朝より召されて内道場に入り、皇帝陛下、神秀を禮するに國師を以てし、彼れが説法の働きは宰相張をして、弟子の禮を取らしむるの止むを得ざるに至つたなど、實に神光秀出寒心すべきものがある、夫れから話頭を元に返し、六祖の惠能和尙に二人の雄物なる弟子があつて、各二流の特長を示した、一人を南岳懷讓和尙とし、一人を青原行思和尙と云つた、南岳は馬祖道一を得て一流の禪宗を開き、

青原は百丈懷海を得て一流の禪宗を開き、法戰場中の奪玉劇を演じた、此下から又二流に分れ、一を黃檗希運と云ひ、一を瀉山の靈祐と稱した、希運の弟子に臨濟義玄と云ふもの存つて、一種の禪風を擧揚し、此道に貢獻する所頗る多かつた、故に後人名を冠せるに臨濟開祖とした、是れが即ち臨濟宗の初祖である、瀉山の弟子にも仰山惠寂と云ふがあつて、特殊の禪風擧揚に勤め當時の支那一世を風靡した、此處で始めて瀉仰宗なる者が生れたのである、其理由は矢張後人の名づけて一の宗旨としたので、即ち瀉山の靈祐と仰山の惠寂との二師を併立して、其二師の名一字つゝ、を取り瀉仰宗と云つた迄の事だ、さうして青原は石頭希遷を生み、石頭希遷は天皇道悟と藥山惟儼のの二流を拵へ、兩者好一對の相撲であつたさうぢや、相撲と云へば可笑いがまづ法器だらう、藥山惟儼に雲巖曇晟と云ふ弟子があり、雲巖に洞山良价と云ふ弟子が出来た、洞山の弟子に又曹山本寂が現はれ、青原一流の禪を唱導したので、後人、洞山良价の洞の字と曹山本寂の曹の字との二字を取り、之れを曹洞宗と稱するに至つたのである、支那禪宗の旺盛なる、此時を以て第一とするも可か



らう、而して天皇道悟の後には、龍潭崇信徳山宣鑑雪峰義存の六高僧を始めとし、其他枚擧に遑ない程、人材が輩出した、此中の一名を今日に得たらば、教機連轉の活路を開通しやうに、望んで得難いは幻影の如き空想で、是非も無い、夫れから次第相承け相傳へて義存となり、義存の後には雲門文偃の二高僧が現はれて、又一方に異流を翻した、之を雲門宗の開祖と云ふのである、夫れより又玄沙師備と云ふ人が出、師備の法孫に法眼文益が現はれて、爰に始めて法眼宗が出来た次第である、此の如く無一物宗が數多の分派を爲したけれども、其根底に立ち至れば所謂一味の禪たるに止まらぬゆゑ、各々門戸こそ張つたれ、修道者は何れにも掛籍する事が出来て、彼此共に交通往來して居たのである、例せば臨濟の學人が曹洞宗に來り、曹洞宗の學人が黃檗宗に、行かんと欲する所に行き留まらんと欲する所に留まつたから、學人の往來交通には毫も障礙はなかつた、今日でも其例は濟洞二門に存じて在つて、曹洞より臨濟に、臨濟より曹洞に、何れも往き來して居る、誠に喜ばしい事ぢや、乃で揚岐黃龍の二宗は宋朝に一家を爲して、其命脈を維持して出たが、コハ

共に臨濟の分流である。

以上述べたる如く、禪宗は當時の支那を以て第一隆盛の時代とし、又此時に於て一種の弘通教たる性格を造つたのである、内村鑑三氏は歐米の基督教が一千何百派に岐れて居るのを非常に残念がり、説教の都度々々其弊害を論ずるけれど、予は却つて教派の多く爲らん事を希望するのである、何故かと云へば禪宗が五家七宗と爲つたのは、疑ひもなく法が昌んであり、又人材が澤山に出て、而して其俗人の機根に適當せる一流を産んだのであるから、寧ろ教界の慶幸と萬歳連呼する價がある、見よ香もなく臭もなく一名活版摺的、定まり切つた徳川時代の佛教各宗を、大なる刺戟も迫害も受けなかつ代りに、大なる法益を社會否人心に與へなかつたぢや無いか、イヤ法益を與へぬのみぢや無く、明治佛教徒を無信仰にしたのは、實に徳川治政三百年間に胚胎したのである、故に今日の如き窮命を辛うじて戸籍上に於ける檀信徒の間に支へて居る様な状態なんだ、予は此點に於て歐米基督教の一千何百派の多く在るを、頗る徳として羨むのだ、無定見の排歴史家は、佛教をして釋迦宗たら



しめ、而して一大團結の勢力を以て社會指導の任に當らんなど叫ぶが、予は其様な  
決行し難い論には到底賛成が出来ぬ、扱て禪宗の宗旨は教外別傳不立文字を以て極  
致と爲し、見性成佛を以て安心の主要とするのであるから、日本現在各宗の如く區  
々たる名言や句義に拘泥して、生れるから死ぬまで佛とは如何なものぢや、大悲の  
願力とは如何なる範圍にまで亘るかなど騒ぎ廻はる様な宗旨と日を同うして語る事  
は出来ぬ、併し乍ら往古の北宗を代表せる今の臨濟宗などでは、まづ普通唱へる經  
部論部を讀まし、漸く進むに連れ、次には公案と稱して證道の謎を工夫せしめ、溯  
つて端坐修禪本來無一物の此事を研究させるのだから、餘り箸にも棒にもかゝらぬ  
様の愚者もなければ、將又無徹方極まつた野狐も少ないけれど、南宗を代表せる今  
の曹洞宗と來ては、不立文字の誤解も實に甚しいものだ、コハ漸々談す事であるが  
爰に少しく其弊害を述べやうか、予は不幸にして青年時代に諸所を遍歴し、多少名  
の有る所謂善知識なるものを訪ひ、機に契へば其處に錫を留めて、道念修養の料を  
得んとしたが、ドウも此れはと思つた知識や道心家はアンまり無かつた、それは舊

思想の最も全盛なる時代に養成され、加ふるに不立文字を曲解して居るのだから、  
食客否雲水たる吾等が多少勉強したいと思つても、仲々自分の勝手は許されぬ、強  
ひて横着を搦へ込み讀書などして居ると、忽ち下る鐵拳の雨か、左無くは吹き來る  
口宣の風である、吾宗は古來から不立文字を以て佛々祖々の皮肉骨髓とし、文字  
ぢや到底眞面目を穿つ事は出来ない、其様な青表紙を相手に修行するから、此事  
を領得する事は成らぬぞ、草取りも辨道糞桶擔ひも辨道、山僧が身を撫で足を揉  
むも是れ辨道である、若し夫れが出来なけりや下山せい、此横着道心奴……畜生  
奴……生倉奴、之が即ち曹洞宗の善知識が其學人に降す言葉とは、誰しも合點の  
參らぬ事だらう、下山とは寺から逐ひ出す、逐ひ出されるとの兩意義である、斯の  
如き風習が今尙亡くならぬから、雲水とか食客とか居候とか云へば、皆酷役する代  
名詞と爲り了はり、甘く其和尚の歡心を買ふには、學問するより道を尋ねるより、  
一生懸命下男下婢の如く働けば、あ、彼は道心家である、吾れに一人の娘あり、今  
將に汝に嫁せしむ、汝亦離縁を爲す勿れと、斯くて多少人材たり識見ある者は、横



着だ生意氣だと云ふ符牒附に爲つて、遂に還俗するか、或は不徳を働く罪人と化するのだ、承陽大師が『若し一步を誤らば當面に蹉過す』とのたまひたが、實に誤ると云ふ程恐しいものはない、予は如上の事を眼にし耳にすに度毎に、凄然として寒心するのである、是れ皆禪の教旨を誤つたからである、若しも夫れが誤つて居らぬ、間違つて居らぬと云ふ和尚さんがあらば、夫れは偽りの和尚である、世尊の思召しに戻つた賣僧である、諸子、學人を愚者たらしめ腐敗せしむる現象を見て、誠に結構なりと思ひ玉ふか、何か世に罪になるからと云うても、人を毒して所謂一生涯役に立たぬ者とするより大罪はないのぢや、談が横へこつて聊か意想外に轉じたが、五家七宗の出た隆盛な時代と、夫れに反對した今日の禪宗を比較する爲め、餘儀なく斯かる悪口も吹いたのぢや、元より予は私に教界の墮落を罵倒するのぢや無い、歴史的系統を述べるには善と惡との實例を示さなければ、盛衰興亡の時代を紹介する事か出来ない、故に止む無く内輪の非を發く様になつたが、其處は幾重にも大方の容赦を蒙らねばならぬ、支那に於ける禪宗は前述の如き好歴史を有し、又日本に

於ける禪宗も鎌倉時代迄は、光彩燦爛たる歴史で、云はゞ瓊瑤無しであつた、然れ共、今や禪學の俗士間に修め居る者多きを見れば或ひは亦五家七宗時代の様な教勢を得られぬでもない、が、只禪宗僧侶の勤不勤如何に依つて岐れる、既に印度に於ける禪と、支那に於ける兩者の消長に就て語つたから、之れより禪が朝鮮に渡り、又我が日本に來つた状態を語らう。

## 朝鮮の禪宗

國の小なるに似もやらで、攻伐撃鬪絶え間なく數百年の歴史を血腥くしたは朝鮮である、王建が起つて新羅を亡したは最早末である、支那には五代の兵亂が續發して佛教地を拂はんとし、僅かに殘光を有志の幾部分に留めて居た計り、誠に危険至極の場合であつた、吾國の徳川家康が深く佛教を信じた如く、既に國民は戦争に飽き何とかして救世主を得んと渴仰して居る時に、怨親平等の佛陀教を説いたから、朝鮮一國は靡然として佛教を信するに至つた、殊に吾等の記憶し置く可きは、彼の高



麗王である、此王は稍々徳川家康に似て佛教徒には多大の便宜を與へた、彼れが華嚴の經論を支那に求めた如きは、如何に佛教弘通上の好利益たりしかは、朝鮮佛教史を繙いた人は首肯せられやう、朝鮮が斯の如き佛教の勢力を呈して居たから、吳の越王までが、態々使臣を遣はして天台の章疏を朝鮮に求めたのであらう、夫れより時幾許もなく宋の太宗の末年、高麗王再び沙門三十餘人を支那に遣はし、杭州永明の智覺禪師の下へ留學せしめ、宗鏡錄と云ふ悟道の事を記した禪書を稟受して、國に歸つた、其三十餘名の僧に含めて、在來の佛教と同様或る一方に布かしたのが即ち朝鮮に禪宗の入つた始めださうである、并は南宗か北宗か記憶に存して居らぬが、自分の考へでは多分北宗かと思ふ、其後の禪宗は果して隆盛たりしか、或は沈湮したか、史に徴すべき證據が無いから、何とも話されぬ、が、昨年横濱に韓人と談した事がある、其時韓人が云ふには『私の國にリンジバイあり、又ソンドンバイあり、私し其リンジバイ信者であります』云々と、此言に依れば今尙ほ禪宗は有るに相違なからうけれど、禪宗ありと認める丈の勢力はないのだ、「リンジバイ」とは臨濟

宗で、「ソンドンバイ」とは曹洞宗である、サレど目下の朝鮮では佛教として認むるに足る者は二派に過ぎぬとさ、一は漸派又は教宗と稱して、其教旨とする所は戒法を堅持して二六時中、只讀經禮拜の功德を積み、其功德に依つて漸く佛因を種ゑ、而して成佛を願ふの義理である、二は頓派又は心宗と唱へて、晝夜の別なく一心に念佛を誦し、頓機一刹那の中に極樂往生を遂げるとの意義ださうぢや、故に朝鮮幾萬の僧侶は假令禪旨を奉じて居つても、必ず右の二派に従屬せぬければ成らぬ規定だといふ、朝鮮八道狹隘とせば狹隘の様なもの、若し廣いと見れば随分廣い國である、人戸四億萬を有せる支那大陸のメグ前にあるから、甚だ小國たるの感あれど、兎に角、獨立國として頭に皇帝陛下が在します、今や佛教地を拂はんとして道教儒教獨り盛んぢやさうだ、之れを救ふの義務あるは日本佛教徒である、佛教を日本へ渡來させた關係よりするも、將又國際上の關係よりするも、日本佛教徒に偉大の勳功あるは朝鮮である、若し夫れ日本の歴史に徴して見たならば、予の喋々する迄も無く極早解りだ、併し現今の韓土の民心に最も能く適合するは、淨土宗眞言宗等頗



る可からうと思ふ、て其方面の諸師に懇懇まで一口談した次第である。

## 日本の禪宗

本邦に禪宗が渡來した事を談すに當つて、此に聊か述べる必要あるは佛教の渡來で佛教が本邦に渡來した事は小學校の生徒も記憶して居れど、天職が布教傳道にあるのだから、贅言ではあれど少しく其概略を談しませう、釋尊滅後、一千五百零一年西洋紀元五百五十三年、吾國では人皇二十九代欽明帝の十三年冬十月頃とか、百濟國の聖明王が厚く佛教を信じたものだから、日本にはまだ斯かる教法が無いと云ふ事だ、日本帝王にも此佛教を紹介しやうとて、遙に使臣を派して佛像教卷に奉書を添へ、之れを信じられん事を本邦陛下に勸誘せられ、且つ上表して曰く、『是の法は諸の法中に於て最も殊勝爲り、周公孔子尙知る能はず、能く無量の福德を生じて、無上の菩提を成辨す』云々とあつたので、本邦陛下も非常に感激あらせられ、遂に群臣百僚に謀つて佛教を信じ玉うた、是が本邦佛教渡來の嚆矢である、從來幾多の

昇沈興亡を経て今日に及んだが、或る一説に依れば廿七代繼體帝の時に、韓より司馬達等が來朝して、其時既に佛像經卷等を持ち來たから、欽明帝以前に佛教の聲跡は本邦に印されたのちやとあるが、何れが眞なるか識者及び史家の定説を仰ぐ、乃で禪宗が始めて本邦へ渡來したのは人皇八十三代土御門帝の仁安三年、僧榮西が支那に到り天臺の新章疏三十餘部と文書若干卷を持ち歸つて、叡山の明雲に與へ、再び入宋して(文治三年)諸方の善知識を訪ひ、遂に黃龍第八世の法孫庵敬禪師に逢つて、臨濟一流の法脈を継ぎ建久二年に歸朝して大に禪風の宣揚に盡力せられ、時の將軍頼家公は榮西禪師の徳風を欽慕されて、大檀越となり、禪師が此道の弘布に少なからぬ勢を取られたとの事である、是ぞ即ち臨濟宗(本邦の)の開祖とし、又禪宗傳播の第一祖として永く吾人の腦裡に印せぬければならぬのである、之れより先、土御門帝の建仁元年源の頼家公時の年號を取つて建仁寺(京都にあり)を創立し、榮西師を請して開基と爲し、公も深く禪旨に造詣したさうぢや、僧榮西は岡山縣備中の生れで、年十四の時に剃髮して叡山に上り、専ら天台學を研究されたが、十九歳



の秋に伯耆の大山に潜んで、密乗部を傳受したと史に示してあれど、傳受した其人の名は遺憾ながら明らかに知らぬ、サテ禪宗は支那に於てこそ五家七宗などの分派があつたけれど、本邦に傳はつて今尙現存して居るのは、臨濟、曹洞、黃蘗の三派である、臨濟は前に談した通りであるから、之れより曹黃二派の渡來と及び臨濟宗の近況を一言しやう。

## 臨濟宗

榮西禪師を開祖として仰ぐ臨濟宗は、如何に本邦最初の渡來者とは云へ、其派の多く有る事も一驚を喫せねばならぬ、勿論派と云つた處が悟道上に於ける見解の派では無いが、各々本山と稱して宗政の區劃を異にする以上は、之れを俗上の一派と見做す可ならん哉だ、明治十三年政府に請うて十本山を製造し亦一本山に各一管長を置いて末寺を統轄して居る、今一々其本山なるものを紹介すれば、天龍寺、建仁寺、東福寺、相國寺、南禪寺、妙心寺、大徳寺、建長寺、圓覺寺、永源寺、是を十派本

山と稱するのである、而して此十派が總計して有する末寺數は、六千三百〇三ヶ寺（明治三十三年度調査に依る）ださうぢや、予等の考へから云へば餘り大なる宗門でもないから、議纏まるべくんば此十派本山を合一して、一本山とするの寧ろ優れる如く覺ゆれど、其宗門に籍を置かねば何とも計る事が出来ぬ。

## 其 二

寺數の割合に反して現今最も其勢力を上中二流の間に有し居るは臨濟である、試みに今日禪の修養を爲さんと工夫して居る學者や居士連を見るも、十人が九人迄は大概同宗の禪を學んで居るは顯著の事實である、彼の鳥尾將軍を始めとして、其他無數の參禪者は、皆悉く臨濟宗に依る者が多からうと思はれる、是れ畢竟何に原因するのだらうか、同じ禪宗の曹洞黃蘗が甚だ振はないのも、聊か不思議の感じがするけれど、要するに人物豊富と拂底の二點が最大主因なのだ、明治の維新と爲つて、同宗に現はれた人傑を見ても、賊に以て一世の師範たる器物が多い、就中荻野獨園



天龍の峩山、關無學由利滴水等の諸師は、臨濟十派中の雄物として衆人の皈依を得られたのである、今は即ち亡し矣だけれど、其等諸師の高風は、活ける歴史と爲つて現時代に漫遊して居る、今日に在つても未だ人材に乏しくはない、釋宗演、渡邊南隱、武田默雷等の傑師があり、數へ來れば人物が平均して其外澤山にある、同宗の獨り隆盛を擅にするのも實に所以なきに非ずだ、然れ共同宗は寺數が甚だ少數である故か、日本全國を並べては勢力の平均が取れぬ、之れ丈は甚だ遺憾に思はれるよ、何となれば同宗の本山がある地方には、寺院が非常にあつて勢力相一集し、之れに反して北海道西國北陸等には、僅かに指を折つて數へるに過ぎぬ状態である、故に未だ優勢とは斷言が出来ない。

### 曹 洞 宗

臨濟に亞き渡來したのは曹洞宗である、同宗は南派即ち六祖大鑑惠能禪師より青原一流の法脈を繼承して、其間分岐なく天童の如淨禪師に到る、如淨禪師は迦葉尊者

よりすれば五十代、支那禪宗の第一祖達磨大師よりすれば二十三代目である、天童とは山の名で、其寺の在所を云ふのだ、聞けば今も猶支那巨刹の大學林で、景德寺と稱して居るさうぢや、誠に結構の事と云はねばならぬ、由緒ある寺院が煙滅して分からぬなどは、教界の爲め決して喜ばしきことぢやない、日本曹洞宗の開祖は道元禪師で、其高德は今日でも人口に膾炙して居る、禪師は始め横川の首楞嚴院の住持、法眼良寛僧正に就て剃髮せられ、専心一意天台の學問を研尋されて、年僅か十八の時、業に兩三度迄も一大藏經を繕いて、經疏の蘊奧を得られたとの事である、然れ共讀めば讀む程疑議が湧出して安心がされぬ、迷ひにまようて居られた途端、經に本來本法性、天然自性身とある語を發見せられ、忽ち結んだは一大疑團である夫れは如何なる事かと云ふに、人間は生れ乍らにして本來本法性を有し、又天然自性身であるならば、殊に佛教の化道を受けて然る後に成道するの要は無い、然るに三世の諸佛や歴代の祖師方は、何故に修行功勳の力を借りて證得を圓滿されるのか甚だ合點の行かぬ事であると云ふ所から、當時三井寺の(今の天津に在り)住持公圓



僧正と云へば、當時賣り出しの善知識であると云ふとであるから、其僧正に此疑議を質さんとして、或日僧正を三井寺に訪はれ前談を持ち出された、サレど僧正は矢張同疑議中の一人であるゆへ、拙僧は到底満足なる應對が出来兼ね、で、其事は今支那から歸朝されて京都の建仁寺に、榮西と云ふ禪僧が在るから其處へ行けと勧められた乃で道元禪師も心竊に打ち喜び、早速京に上つて榮西を建仁寺に訪問し、公圓に質した事を舉げて話されたが、其時榮西禪師のお答へが面白い『三世の諸佛有る事を知らず、狸奴白狐却て在る事を知る』と、禪師大に感ずる處あり遂に錫を留めて、榮西が法中の人となられたのである、道元の禪旨を孕んだは實に榮西千光國師が前話にある、曹洞の流れを汲む者亦深く明知すべき筈なんだ、榮西禪師遷化の後は、就て道を問ふ人の無いのを遺憾としたのに、幸なる哉榮西の高弟明全和尚と云ふがあつて、入宋の道伴を勧めたので、禪師も千載一遇の好機會と、俱に従つて支那へ渡られたのは貞應二年である、斯くて渡清の初めより在清其半ばを過ぎる迄はこれと云ふ様の明師にも逢はず、從晝至夜其事のみに落膽して、失望の嘆聲を發して居られ

た、或日一僧に逢つて適ま今日で云ふ様な人物評が出た、時に一僧の語るに今天童山に如淨と稱する和尚が居る、其僧は南宗の法脈を繼承して頗る達禪家の聞か高い人だ、若し逢はんと欲したらば試みに登山して見ちや如何ですと云はれたので、禪師道元も「咲くや數なき優曇華よ、寶の山に尋ね來て、空しく元のふるさとに、歸るめらむと思ふ時、君が情の一瞥は、實に脆きの我身をば、辛くも枝に留めたるぞ恵みや高しヒマラヤの、峰をも凌ぐ心地せり、あはれ尋ねむ法の師を」非常に愉快の事と、直ちに山に登つて天童の如淨を訪はれた、處が如淨も前夜の靈夢果して虚ならぬを是とし、早速半坐を分ちて禮遇された、一會の大衆皆呆然として其意外に驚き、吾が師狂せりか將亂せりか、異國の一僧を遇するの甚だ厚き事をと、嫉妬の情燃ゆるが如き所から、遂に如淨に其事を質したのである、乃で如淨大に怒り且つ示して曰く『四河海に入つて亦本名なく、四姓出家して同じく釋氏と稱す、汝等が凡眼なる、法中に異國同國のある事を、山僧昨夜夢に洞山大師に見ゆ、是即ち希有の瑞祥として其人來らんを待てり、今日日本の道元訪ふあつて始めて其靈夢に契す、道元



は即ち洞山大師の化身ならん、吾宗彼に依つて世に大に興るべし、故に彼を遇するに上座を取る、汝等亦疑ふ勿れ」と、斯の如くにして師弟の禮を取り、二六時中相問ひ相答へて道情誠に親しかつた、其記録とも云ふべき道元禪師の『實慶記』は、師弟の情誼を察し得て餘りあるのである、修學兩三年、如淨、道元を膝下に呼び諭すに悟道印可と歸國弘法の二を以てした、道元別を悲しんで涕泣咽哭したさうぢや、さも有る可き筈である、禪師歸朝の際如淨が説示した數百言は、如何に道元の將來に美を加へたかは、史を見るもの、等しく承知して居らう、歸朝されたのは安貞元年で、時に廿八歳である、後京都の建仁寺に兩三星霜を送られたが、都と云ふものは何處も同様、小五月蠅いのに搗て加へて名門とか貴族とかの來訪頗る頻繁なので、如何しても眞實の正法を弘むる丈の道念修養に乏しい、乃で今度は宇治の僻陬に深草と云ふ所がある、其處に庵を結んで閑居されたが、夫れでも日を重ねるに隨つて、京都から種々の腐敗漢が來訪するので大師も非常に悶かれた、腐敗漢の來訪とは、傲慢心の甚しい者、正法を疑ふて非難するもの、大師を試験的に語る者、高位高官を

笠に被つて大師を輕視する者、此種の輩を指して腐敗漢と云ふのである、寛元々年道元年四十四の時、越前にあつて、波多野義重と云ふ豪族が大師の高風を欽慕し眞實誠心を以て大師に參し、頗る禪旨に造詣する所があつた、或日大師が山居の偈を見て其高想を領じ、大師に勸むるに越前志比の深山に一寺を創せん事を以てした、大師も其意を領じ一字を山頭に立て、地所共に寄附す、大師其所へ移つて眞實の發心求道者を一人でも二人でも感化して是宗とせられた、是今の永平寺ある所以で元は大佛寺と稱したのである。

之れより先北條時頼、禪師の徳風を欽仰して名藍に住持たらん事を請はれたけれど遂に容れずして孤節を持し給ふた、畏くも後嵯峨帝よりは紫衣を賜うたけれども一生涯身にし玉はなんだ、其高潔の道情六百世の下尙餘光ありである、外にもまだ多く記すべき勝蹟はあれど、今一々話さなくも禪師の傳記を讀んだら詳知されるであらう、禪師は人皇六十二代村上天皇八世の孫で、久我内大臣通親の三男である、母君は鎌足の血統で東西本願寺には近親であるのだ、十二歳の時母の逝去を悲み無常



觀が主因となり、其年出家したが始めは單純なる思想、即ち母の菩提に回向すると云ふ事であつたが、漸く信仰が轉化して遂に無常觀や有常觀を一掃され、無一物宗の悟道をされたのである、禪師が高潔、汚れなき如上の通りであるのに、今世の法孫其風に戻り、徒らに久我家を鼻に掛け、名門を誇つて居るは、大寂定中の道元を殺すも同様である、殊に六百五十遠忌に際し、勅額を拜して自ら揚々たる如きは、禪師の眞意を顧みざる不孝極つた、忌むべき沙汰の限りである。

## 其 二

都を避けて山奥深く遁れた道元和尙を頭に奉載する同宗が、思ひの外に其勢力を本邦に有するは、實に不思議極まつた異例ぢやないか、併し夫れには深き原因があるので、不思議と思つて居る人の爲めに語れば、まづ斯様である、道元の弟子に孤雲懷辨と云ふ者があり、孤雲の後に徹通義介と云ふ人があり、徹通の後に瑩山紹瑾と云ふ聰明にして道心堅固の人があつた、之を日本曹洞の第二祖として仰ぐべき人であ

る、勿論法脈から云へば第四祖であるけれども、禪學を興起して道元の骨髓を宣傳したは、實に第二祖たるの資格と徳風がある、彼の迦葉尊者と達磨大師との間に於ける如く、迦葉は達磨の生るるあつて禪宗の完成が出来、道元も又この紹瑾を得て曹洞宗の完成が出来たのであるから、正法の上では是非とも曹洞第二祖と云はねばならぬ、道元が山に入つて瑩山が山を出て、布教したのは、蓋し感應道交難思議とでも云ふか、何にしても此處の邊りは意味ありげである、同宗の勢力を見んとする者はまづ日本の津々浦々を一瞥すべきである、試みに地方へ出で、禪宗の寺はないかと問ふて見よ、然らば如何なる爺婆と雖も必らずありますと云ふに相違はない、其所謂ありますといふ寺を尋ねて見たら、亦疑ひもなく曹洞宗で有るてう事が門前に於て判明する、之れに反して此邊に臨濟宗なきや黃檗宗なきやと尋ても、それは決して判明するものぢやない、殊に同宗の本山とし云へば永平寺より外に無いと思つて居るのが頗る奇妙ぢやないか、諺にも大師は弘法に奪はれ木の芽は山椒に奪はるとやらで、禪宗三派の本山は永平寺に奪はれて居る様の感じがする、殊に同宗は如



何なる僻陬地でも、大概無い處は稀である、其中でも全國曹洞宗の最も多い所は、東北である、乃で一般の俗人は曹洞宗より外に禪宗はないとかう思つて居るらしい、此邊から見ても同宗の勢力あるは争はれぬ事實である、若し夫れ頭數を以て勢力あり、寺數を以て大宗門と云ふならば、日本佛教宗派の中で最も多大なる勢力ある宗門は曹洞宗第一とするも過言ぢやない、何故かと云へば同宗は彼の眞宗の如き別に派と云ふものが無く、一宗門として一管長を置くのであるから、各宗の到底及ばぬ大宗門である、現今一万四千〇六十六ヶ寺の末派と二万七千人の僧侶を有し、又六百五十七萬の檀信徒を有して眞宗と拮抗して居る、然れ共や、派と見做すべきは二本山と、法脈が五派ある所以であるが、永平寺は世人の常に知る如くで、別に談す迄でもなければ、總持寺に至つては俗人中に知る者稀である、で、餘事ながら爰に一口談すとしやう、總持寺は道元禪師より四代目の前記瑩山禪師の創立に係り、元は眞言律宗であつたけれど、定賢律師と云ふが禪師の德望を慕うて其寺を寄附したのである、本山と爲つたのは一説に依ると禪師迂化の後であるさうぢや、けれども

後醍醐天皇が特に出世道場の第一とし、并に本山の稱を御勅許あられたとの事は、同宗僧侶の記憶して居る所である、故に永平寺と相待つて曹洞宗大本山の稱ある所になんだ、如上談したる事によれば、其勢力の甚だ大なるに似たれど、コハ全く皮相上の事で優勢の二字は外表に依つて與へられるが、惜い事には内容を觀察したら外計り大きくて其實の虚なるにも驚かざるを得ぬ、恰も之れを人間に比すれば邊幅を美麗に裝飾して、外から見れば誠に小立派の様に映するけれど、サテはの段になると赤兒も同様であると同じ事、同宗の現今も斯の如き觀があるまいか、瑩山禪師が現はれた當時には、支那に五家七宗を産み出した様に、太原、通幻、無端、大徹、寶峰、明峰等の諸高僧が輩出して、法脈の五派を出したから兎に角勢力の勢力たる眞價があつたれど、教義の勢力上から臨濟に比較すれば、臨濟に及ばざる遠うして遠しの感がある、之れが原因は何であるかと云ふに、畢竟人物の拂底からならう、まづ曹洞宗が維新以來人物を産み出した事を挙げれば、寺院數の多き割合に人物の無いのも魂消て了ふよ、故人としては、諸嶽奕堂、久我環溪、畔上棊仙、濤聽



水等の英傑があつて宗風の宣揚に一異光を放たれたれど、其後の今日では其等諸師に代るべき人物が出ぬのは頗る憾みとするのである、現に同宗の人物として僅かに其一部に知られて居る者は、禪定家として、森田悟由、西有穆山、星見天海の三師有るのみで、其他は宗門の人物で無くて云はゞ俗士を操るに巧妙の手腕家計りである、同宗の振はざるも誠に以て怪むに足らざる現象といふか、

## 黄 檗 宗

同宗は同じ禪宗でも餘程遅く日本へ渡つたのである、故に録すべき記事も甚だ少ないが、まづ同宗渡來の起原を尋ぬるに、人皇百十代後西院天皇の御宇、僧隱元禪師が吾國に歸化したに始まり、隱元の來朝したのは承應三年である、明曆元年徳川家綱隱元の徳を慕ふて、山城國久世郡宇治郷に一字を建立して禪師を開基とした、夫が今の黄檗山萬福寺で、矢張其地にある、之れが日本に黄檗宗ある始めなんだ、歸化以來化導數十年にして延寶元年遷化せられた、隱元禪師は支那の福州の人で、字

は隆琦と云つて當時の支那では隨分名聲噴々の人であつたさうぢや、隱元の渡來皈化したのは偶然ならぬ斯の如き事情があるのだ、徳川家綱は有名な禪宗の一居士であつて、彼の足利氏の故事に倣はんとてか、臣を支那に遣はして名僧一名日本に皈化されん事を求めた、一説には長崎の興福寺の住持、逸然と云ふ人が其命を受けて渡清したとあるけれど、何れが眞なるか斷言は出来ぬ、乃で其使者が渡清して隱元禪師の許へ行き、種々に力を竭して前話の事を請ふたけれど、始めの中は仲々承知する氣ばいさへ見ないので、使者の一行は非常に心配して將軍の怒りに觸れん事を恐れ、再三再四懇請したので隱元も漸く應諾して皈化する事となつたさうぢや、故に徳川の敬崇も厚かつたのである、後水尾上皇隱元禪師の説法を聞き、特に大光普照國師と號を賜うて信を表されたとき、要するに其頃は禪學が稍衰へて、臨濟曹洞の二宗にも亦人物がなかつたらしい、夫れは永祿年間には基督教のウルカンパレンが來朝して南蠻寺と云ふ耶蘇の會堂を立てた位だから、禪學計りぢや無い、總ての宗旨は皆衰へて居たのであらう、然し夫はズツと前の事だが其因が徳川時代に果



と成つて現はれたから是非もない、乃で禪學は、上陸下より將軍列侯群臣に至る迄が、悉く信ずると云ふ事になつたので、禪は再び興起して佛日輝きを増す事となり臨曹二宗と相待つて黄檗の宗風も振ふたのである、同宗の由來及び其概要大畧は前記の外に記載するものは無い、

## 其 一

渡來未だ四百に満たざる新歴史を有する同宗丈に、之れをならべては甚だ氣の毒の感がある、教勢外勢兩ながら先づ空無に近からう、之れを曹洞宗に比すれば二十分の一にも及ばず、本山は昔も今も變りなく萬福寺である、若し其勢力を試みるなら手近い所で俗人に聞いて見よ、十人が九人迄は大抵知りませんと答へるに相違はない、末寺は僅かに六百〇五ヶ寺を有するのみで、何んとも致方が無いのである、故に亦同宗の人物と云つたら理趣分經の口調ぢや無いが畢竟空さ、管長とか執事とか云ふ者もあれど、开は教勢上に於ける統轄者でなくて、云は、六百ヶ寺の郵便受附か、さ

なくば殿堂修繕に就ての資本金取扱位にあるのだ、併し是れは決して無理ぢやない、元より無い種が如何して蒔かれやうぞ、若し人あつて黄檗宗の僧侶は振はぬなど云つたら、予は妨げず大聲叱責して目玉を刳つてやる……喝

## 普 化 宗

一風異つた宗旨で頗る面白味の有る同宗が、有るか無きかそれすら世に聞えぬのは甚だ遺憾とすべきである、僧侶間でも臨濟曹洞黄檗の三宗丈は能く記憶して居れど、同宗の有るを承知して居る者は澤山ないと思ふ、尤も今は其形だに消えなん(支那)として居る状態ぢやから、世の多くに知れ渡らぬも怪むに足らぬ、予禪宗の談をする度毎に、此事を想像して遺憾に思うて居た、幸ひ今禪三派の事が出たから、予の記憶丈を世に紹介しやうと思ふが、如何せん同宗の歴史的證據がなくて大に迷惑する、外の宗旨は精しく記録に存して居るが、同宗の歴史に就ては未だ誰も書いた人がない、往昔支那に普化禪師と云ふ高僧があつた、時代は慥曹洞の芙蓉道楷禪師の



現はれた頃かと思ふ、或時普化禪師が散歩がてら郊外に遊ばれた、時に山間よりソツと吹いて来た一陣の風が、師の手にし居られた竹杖に入つて、云ふに云はれぬ響きを出した時、豁然大悟されたので、其處で始めて普化宗の一流を出し、當時の支那四百州を風靡して遂に日本へも来た、其一流を汲む者は皆普化禪師の風を滅せざらんと勤め、笛を吹き鳴らして法式を行ふの例とした、今の虚無僧是である、併し世の隆替程可笑いものは無い、當時悟道の具として珍重された尺八が、今は乞食の具となつて現に行はれて居る、サレど人を感化するの一事から見ると、昔參禪の有志に尺八を鳴らさせて悟道させた、今困窮に陥つて居る者に尺八を吹かして命を繋がせると、其皮肉上の差こそあれ、矢張また普化宗が滅せない證據である、同宗が本邦へ渡來したのは建長の始め、信州から覺心と云ふ異僧が出て、後支那へ渡り、普化禪師の風を聞いて非常に得る處があり、飯朝して盛んに此道を諸方に布いて居たが、時の皇帝覺心の非凡たる事を聽き給ひ、長くも勅使を遣はして覺心禪師の許に至らしめ、城東の東勝寺に住持せよとの詔で、辭する事もならねば一應れ受けを

致し、五六年間矢張笛を吹いて其寺に居たれど、元より白雲中の往來が茶飯なので、屢々彼方此方行脚して潜匿したから、其都度皇帝よりもれ咎めがあつたさうぢや、それより程經て遂に紀伊の由良と云ふ所に遁世して再び京へ上らず、晩年の老を其處に養ふとて興國寺を創立し、所謂來る者には山色清淨身を語るべしと、飽迄も世に出ぬ遁世家と化した、遷化間際に師の德風を追慕せられ、法燈國師と諡あつて信を表し賜うたとの事である、誠に目出たい事と喜ばねばならぬ、普化宗の由來と吾朝へ渡來は以上談した通りであるが、爰に悲むべき一事は同宗の消滅である、多小勢力のあつた支那でも、今は殆んど空無に等しい有様、本邦では覺心國師遷化の後第四代計り經て地を拂ひ、今で普化宗の寺院を見んとすれば、予の見聞に觸れて居るのが僅か七ヶ寺である、それも満足に伽藍の全備して在る寺はない、少し聞き苦い話ぢやが、土方百姓の借家と化して居るのだ、是でも予の如く細心注意してさへ七ヶ寺しか分らぬのに、況んや普化宗の有るかなきか知らぬ人々になつたら、何の思ひが其處に至らうぞへ、予の此の如く普化宗を思ふのは、禪宗の一派として兎に角



黄蘗宗位寺數があつたら、覺心禪師の人物及び其苦心を世に知らせる事が出来やうにと思ふ一念から、斯く心配して普化宗の事を談すのぢやが、若し前方の中で道心を堅固に持つて、社會から笑はれやうと罵られやうと、覺心禪師の理想を今の世に於て繼承し、貴族的驕侈の生活を營んで、而して高枕安臥を貪りつゝある今の世の僧侶及び其信徒に、反對の方面から普化一流の禪を唱導したら、多少は世の猛省を促すに近からうと思ふが、在坐の諸君如何ぢやない、夫れから普化宗は臨濟に從屬すると云ふ事も永く記憶してもらひたい、後世の學者や佛教の史家が、同宗の歴史を編まぬのも畢竟源が臨濟ぢやから、其臨濟に葬つて出さぬものと見える、強ち無理でもなさうな感じがする

日本に於ける禪宗の歴史は、略述へ盡したが古人の教訓に、『字を知るは患ひの始め』とやらで、達磨大師より歴代相承して今予等の如き者にまで傳つたが、サテ歴史を見る程涙の種になる者はなからうと思ふ、だが、吾禪宗計りは他宗旨に例の無い歴史がある、それは何であるか坐つて賣ると云ふことだ、印度から達磨大師が自ら足

を運んで弘通された外、多くは外より禪宗を買ひに態々萬里の波濤を超えて支那へ行き、高價でも安價でも價格の如何を問はず、ドン／＼買つて來て本邦に弘通して、臨濟曹洞黄蘗の三派を傳播した、實に奇妙である、それから師弟の關係に於けるも亦復斯の如き現象があるやうぢや、彼の禪宗二祖の慧可大師が、始め達磨の弟子にならんとて如何なる悲劇を演じられたか、最初達磨を少林寺に訪うた時、達磨は壁觀坐禪してチツとも慧可を省みなんだ、再三請ふけれど尙々返事をせぬ、ソチコチする中に積雪數尺に及んだ、ケレと求法の一念少しも外へ轉せず、遂に左臂を斷斬して道心の堅固を表したので、達磨も其道念の厚さに服して法を傳へられた、是れは只標本として慧可一人を示すのぢやが、禪門の僧侶と成る者は其師を求めんに、斯様に嚴重で又鏡石心ある事を承知して貰ひば可い、是れ師自ら弟子を求めず、弟子たらんと欲する者が、斯くして師弟の關係を現はしたのぢや、其他無數の師匠は此風で弟子を得たのである、故に英邁傑倫の人が多かつた、夫れが今日では其反對に師匠から弟子を探して貰ふ状態ぢやから、到底満足の弟子は得られやう筈がない



のだ、扱て其談はまづ此位了つて、之れより印度支那日本三ヶ國の間に於ける禪宗歴史偉大の居士を紹介しやうと思ふ、勿論無數の事だから一々は到底擧げ切れぬけれど、是に依つて多少諸君の反省を促す事が出来れば、亦以て正法宣傳の一助にならうから、怠屈でもあらうが、もう少し餘談を聞いて貰はねばならぬ

### 禪宗歴史上に於ける偉大の居士（總説）

史を緋いて見ても、印度には左程名高い居士も禪宗にはなかつたらしいが、支那には仲々澤山にある、支那俗士の禪學を紹介するに當り、禪宗も佛教史と關聯するものとせば、爰に一名の大志菩薩を紹介するの義務がある、冀くは僧と俗とに論なく佛陀の福音中に在る者は、之れを永遠に記憶して忘れぬ様に願ひたい、支那では陳が亡びて隋の興つた後數年、何とか云ふ帝王が起つて天下を治め、大業五年天下に詔して、凡そ佛教徒たる者にして身に徳業なく學識なき者は、皆還俗して外に活路を求めよとの議が發布になり、勅令であるから馬鹿の僧徒は悉く毎日々々還俗し

て、四百餘州の寺院は殆んど七部迄空屋となつた、乃で僧大志は此苛酷なる状態を見るに忍びぬ所から、佛前に三日間食を絶つて泣哭し、僧徒墮落せばとて正法豈罪あらんや、若し僧徒の墮落が今日にのみ有りとすれば、勿論云ふ所は毫もないけれど、釋尊在世の時にすら戒法に戻つた俗僧が出たから、止むを得ず二百五十戒を制し玉へたのである、然るに凡僧置くに足らず愚物語るに足らずと云はゞ、誰か能く佛教の命脈を支へ得るものぞ、之れを思はずして猥りに還俗を命するのは、帝が政治を布くに決して穩當でない、イヤ自身を殺しても還俗する者を救はねばならぬと、佛教の將來を案じ煩ふものから、遂に意を決して京へ上り、身を捨て、も法を濟はんで置くものか、あゝ誠に憤慨でならぬとて、時の皇帝へ上表して曰く、『願くは陛下三寶を興隆せよ、貧道當に身を燃して、以て國恩に報ゆべし』云々あつたので、陛下も大志が正法護持の堅念を諒じ給ひ、『汝が請ふ如くすべし』と乃ち大志が請ひを容れられた、大志大に喜び兼て誓約した通り、身に布蠟を掩ひ大柵の上に昇つて平然端坐し、燃え上る火餅と共に、トウ／＼火中に焚死されたと有るが、何とまあ



勿躰なき菩薩だらう、身を立て道を弘むるは容易の事だが、身を捨て、法を濟ふは難中の難である、故に陛下も又約の如く其還俗勅令を取消して、大志が堅き道心を示されたさうぢや、是れが即ち佛教で云ふ處の菩薩である、壇上高く金箔で塗り光る観音や地藏を安置してあるのは、佛陀が菩薩大悲の願力語を換へて云はゞ理想である、支那佛教歴史中に菩薩としての適稱ある價を示すのは、此大志を措いて外にないかと思はれる、其勅令が支那四百餘州の津々浦々にまで施行されたなら、或へは支那の佛教は滅亡に歸したかも知れぬ、幸にして此大志菩薩が三億万人の、佛教徒及び其信者の總名代と爲つて、當時の僧俗を救はれたから、夫れより又死火再燃の勢で佛教が興隆したのである、故に歴史上の關係より大志和尚を今紹介するのぢや、ドウか長へに記憶して其恩に報へん事を思念して貰ひたい、尤も吾國維新の當時も夫れに彷彿したる廢佛毀釋の論が朝野の一部に起つて、荻野獨園、新居日薩、福田行誠、諸嶽奕堂、赤松光映、今北洪川、島地猷雷、釋雲照、大内青巒等の諸師が殆んど決死の覺悟を以て救はれたから、今日の佛教徒が横着に構へても、佛教の

命脈が活々と繼續して居るのぢや、が、幸には勅令と云ふ所まで其議が進まなかつたから、まづ日本佛教徒の爲めには萬歲可祝である、予が史を見るは涙の種と云つたのも此處なんだ

### 印度に於ける禪宗の居士

印度歴史程亂脈至極の者は、世界各國に其例がアンマリ無からう、故に今日學問がやゝ進歩したと云はれる印度にも、歴史の一事に至つては整然たる秩序がないから随つて亦確實の歴史組織が出来ぬと、近頃渡來したダンマバラ氏は口説いて居た、故に印度に於ける禪宗の歴史を見んとせらるゝ方は、曹洞宗の血脈に就き迦葉尊者より達磨大師迄の間を討究して戴きたい、斯の如き状態であるから、禪に入つた居士を探さんとすれば、茫乎として鞅鞅三千里の感がある、迦葉達磨の間は二十八代であるから、年數も七八百年は必らず隔つて居る事は、又贅言を要せざる所だが、惜い哉其間に於ての居士は史に傳へては無い、予の考へから論ずれば、其時分は佛



教普通信條に依る、所謂戒定慧三學の中に禪を攝取して居て、専門的に禪を行はぬものらしい、若し其時代に禪が専門的に唱道されたとすれば、禪に造詣した居士が必らず後世に傳はるべき筈なんだ、ケレ共一人として之れが禪宗の居士だと歴史に示した者が無い所をみれば、まづ予の唱ふる所がや、實説に近からうと思はれる乃で其居士と稱するのは身は俗人であつても、能く佛教を信じ又佛教徒の宣教に隨喜して、正法護持に勤むる者を云ふのである、故に在家の出家と云ふ稱あるのぢやで、居士は僧侶と同じく佛陀の福音を鳴らして、到處で布教する権利が與へられて有るのぢや、然るに後人之れを誤解し、死して棺桶に入る時菩提寺の和尚に三圓とか五圓とかの包み金で、居士號を貰ひ受けるのは途方もない間違である、サリ乍ら是には深い原因があるのだから、強ち夫れが悪いとも斷言は出来ぬけれど、餘り賞めた話ぢや無い、若し居士號が得たかつたら在世の中に、厚く三寶に皈順し其寺々々の和尚に、與へられる限り布教の便利を與へ、盡される限りの信念を盡して、而して後正法相續者たる居士となるが、如來のね思召に契つた眞の居士である、サナ

以上談した如く禪宗の居士としては、紹介すべき人が無いから、爰に佛教再中興を以て有名なる彼のアシヨカ王を紹介しやう、釋尊滅後一百有餘年を経て、釋尊の豫言に依り現はれたといふ其アシヨカ王が出られた、王は摩迦陀國王頻婆沙羅（世尊在世中）の曾孫で、當時の印度では最も強猛の勢力を有して居た人である、王が即位の始めは非常の凶逆無道な政治を布き、佛教にも反對すれば國民も虐待して、罪惡鬼王と迄評された人である、就中佛教弘通に大なる迫害を加へて、罪なき僧徒を無意義に打殺した、其數萬を超えた有様であつたさうぢや、此點から眺めたら世界に類のない惡王である、然しこれは若い時で、云はゞまづ分別のない廿歳前後の事だと云ふが何しても善人ぢや無かつたのだ、中年の頃に至り適ま僧爲海と云ふ人に逢ひ、爲海が身を殺しての諫言忠告に、驕然志を改めて従來の無道を懺悔し、其罪亡しにと今度は前と大反對で、深く佛教を奉ずるは愚か、是より王の爲す所善ならざるは無く、所謂佛事に非ざるよりは行はず、佛作に非ざるよりは爲さすと云ふ様になり、遂に爲海に誓つて佛教の興隆を約し、右手には政權を握り左手には教權を



把持して、若し吾版圖内の人民にして佛教を信せぬものがあつたら、片つ端より斬殺すべし、敢て命を奉せず反旗を掲げる者があらば、兵力を以て朕が陣を搆へんとの勅令だから、國民一般總て佛教に皈し、印度の佛日再び輝きを放つて興隆したのである、又外には傳道使と云ふ者を派して、佛教を海外に傳播せしむるなど、實に王の力は佛教に至れり盡せりである、此王が即ち海外布教の嚆矢となられたのちや日本に佛教あるも其原く所は王に皈すると云はねばならぬ、今の錫崙やカシユミルは悉く王の弘通に爲ると云ふ談ぢや、夫れから又王の弟が佛教に盡した事も、仲々非常なもので、王よりも力を佛教に寄與されたとある、其他數多の浮屠を起したり巨大の伽藍を立てたりした事は、枚舉に遑あらざる程澤山にある、今日本に於ても古蹟とか名蹟とか稱して殘つて居て、此處は傳教弘法の開闢した所とか、彼處は僧行基の偉業になつたとか云ふ、彼の橋梁や道標や道路の開通などは、概ねアシヨカ王に倣つてした事である、近年に及んで、印度及びアフガニスタン等の諸所に、岩壁の中腹に聖釋尊の傳記が現はれ、或ひは五百羅漢の削つて在るものが、陸續とし

て歐人に發見され、其起原を考へて見れば多くは王の一世に成つたものぢやさうである、惡逆より心機一轉して佛教を興隆せられた、王が偉大なる鴻業は實に此の如くである、人も斯く改心が出来れば聖賢の教訓は畢竟無用なのだ、ケレ共王の如きは衆星の一月として、之を其例外に置かねばなるまいて、前には佛教に迫害を加へて教徒を無暗に斬殺したから、人道に照らして見れば其罪決して軽くはなけれど、後改悛して數億の性靈を導くの先驅者と爲つたから、賞罰まつ償うたと云はねばならぬ、故に王は永く佛教史に其光を輝かして居るのである、予常に思へらく、若し人あつて居士中の居士を紹介せよと云つたら、人は兎も角自分は必らずアシヨカ一名阿育王を以てするに憚らぬ、眞の居士とは此の如き人を稱するのであります、今日の様に巧みに佛教の事を説いたり、或は書いたりして、窮地に立ちて居る佛教各宗寺院の齋血を絞り廻はる輩に、何々居士を以てするのは恰も罪人に善人の名を興へると同様に、佛教弘通上に何等の利益のある居士ではない、極く有躰に酷評すれば、各宗を辯や筆で誑す偽善者である、甚だ不都合千萬の至りなんぢや、若しも此



種の類が居士と云ふを得べくんばさ、今のアボダラ經を唱へて狂ひ歩く、乞食や非人も正法護持の居士とせぬければならぬ、まづ夫れはさうと是より支那禪宗の居士談を出さうか。

### 支那に於ける禪宗の居士

前にも述べた如く印度には禪宗の居士が有るか無いか、歴史に徴すべき確證がないから、豈か偽造して禪宗の居士を紹介は出来ぬが、支那には幾數百万人あるか一々は到底擧げられぬ程ある、で、先づ其中でも特に名の聞ゆる居る人々のみを、ザツと捕へて談し申す事としやう、乃で誰も曾て記憶せらるゝ如く、達磨大師が専門的に禪を唱へられたが、支那及び世界に禪學の在る始めて、禪を産み出したのは釋尊だけれど、産み出した禪を能く育て、出られたは、迦葉尊者より歴代相承して般若多羅までの廿七代で、其育てられた禪を能く成長さして働かしたのは、實に達磨大師其人である、それから最初支那で俗人が禪に參じて居士の嚆矢となつたのは、ま

づ梁の武帝を推して居士の始めとせねばなるまい、夫れは前に達磨との問答で明らかであらう、次には有名なる文士白樂天とする、白樂天が禪宗の居士となつたのは杭州の烏窠禪師に會見したが始めて、元はと云へば誠に放屁した位の所からである或時白樂天が禪師烏窠に問うた事がある、佛法の大意とはそも如何なる者ですとやつた、處が、諸惡莫衆善奉行であると答へたさうぢや、ハ一左様か夫れが佛法の大意なら三歳の童子も能く合點の事ぢや、何ぞ道を禪師に質す要がありませんぞ、其言の未だ終らざるに禪師カラ〜と笑つて曰く、然り三歳の兒童も能く承知して居る、だが百歳の老翁も夫れを行ふものは少ないが如何ぢやないと、單刀直入一本白樂天も參つた次第、乃で居易の白樂天も大に願ふ所があり、遂に禪師の教を仰いで禪宗の居士となられた次第である、第三には相國斐休で、此人の問答は後に談すが居士中の雄物として指を折るの價あるは此斐休であらうか、斐休の居士と爲つたのは黃檗禪師に道を問うたが始めて、其獨を慎んで餘所を顧視せず、政治家として名を博さん野心もなければ、亦顯官に昇進して飽迄も爵祿を銜ふと云ふ望みもなく、



云は、平凡なる樂天主義を取つて、時々皇室へ奉伺して居た計りである、飽迄好嗜な  
肉酒を一切廢して、晝は禪房に多くの僧侶と同じく坐禪し、夜は禪那窟に心立を工  
夫するの外、別に誇揚すべき榮達を計らず、深く禪旨に詣して後、勸發菩提心と云  
ふ一論文を草して是を世に公にし、又圓覺經、法界觀、禪源など云ふ佛書の序文を  
作つて、當時の學者を顔色なからしめたる位である、其他諸學者を自邸に寄せて、  
禪旨を拈提した事は數八百會であるさうぢや、イヤ仲々の護法家では御坐らぬか、  
第四には漢主劉氏、この人も見逃し難い扶宗の一居士である、劉氏が居士と爲つた  
始めは雲門の文偃禪師に道を問はれたが因ださうぢや、帝適ま使を遣はして文偃を  
召されたけれど、病氣と稱して其召に應せず、此の如く三四回に及んだが禪師は頑  
として更らに應じなかつた、乃で帝も大に感じ給ひ、朕が召しに應せぬ位の僧は必  
ず見る處あらんとて、自ら風輦を進め給ひて禪師を訪はれた、一山の衆僧陛下御參  
臨と聞いて一方ならず狼狽し、其旨を禪師に告げたが案外動く氣色はない、帝益々  
其高風を悦ばれ自ら禪師の室に到られた處が、禪師庭前の障子を開いて虱狩の最中

である、帝又其意外に驚き給ひ、自ら和尚々と連呼されたので、禪師法衣を纏ふ  
の暇もないものぢやから、赤裸々のまゝ巨物をブラ／＼振つて、莞爾と計り打笑つ  
て立禮し、揚句の果てには着服をさへ忘れて了ひ、其儘で茶を汲まんとして侍者の  
注意を受け、始めて氣がついたから俄に其無禮を謝したなど實に滑稽である、爾來  
帝も禪師が灑々落々の境界を非常に感じたまひ、内道場に召し入れて法要を聽かれ  
たさうぢや、今世の僧學なく徳なく又道心なくて、禪師が徳風を摸倣せんとしたら、  
夫れこそ天子所の騒ぎぢや無い、門前の爺婆までに怒鳴られるも知れんでの一呵々  
……………後、帝は數萬金を投じて諸所に叢林を立て、朝儀に臨御の餘暇は必ず  
禪林で半世を送られたとの事ぢやが、以上の談は歴史として傳はちやないが、予は無  
名の一英僧故大安・泰道と云ふ和尚から聞いた事である、泰道は越後の人で、今門人  
とも云ふべき人が三人ある、一を森田悟由と云ひ、二を樺田雷斧と云ひ、三を畔上  
模仙と云ふ、三名とも管長に爲つたが内一名遷化した、四十代に中風症に罹つた爲  
め其名の現はれぬのは遺憾である、第五には司馬温公を推す、公が其人物たる世既



に定論があるから、別に煩はしく云はなくも能く諸君の知る所だらう、公が禪宗の居士となつたのは、實に單純なる事からである、史には何處の誰れに參じて悟道を得たともないが、予の考では公の時代は彼の雪竇重顯と稱する雲門宗の中興が居たのだから、或ひは公も重顯禪師に逢つた事もあらうと思はれる、公會て文中子を讀み大に感じたとして、禪偈六首を作つて公にした事がある。

其一

忿怒如烈火、利欲如銛鋒、終朝常戚々、是名阿鼻獄。

其二

顏回安陋巷、孟軻養活然、富貴如浮雲、是名極樂國。

其三

孝道通神命、忠言行蠻貊、積善來百祥、是名作因果。

其四

言爲百世師、行爲天下法、久々不可掩、是名不壞身。

其五

仁人之安宅、義人之正路、行之誠且久、是名光明藏。

其六

道意修一身、功德被萬物、爲賢爲大聖、是名佛菩薩。

味ふべく掬すべきは此六首の偈である、司馬溫公の悟道如何を見んとする者は、先づ此の六首の禪偈を覽るべきである、公或日散步がてら洛陽の寺々（勿論禪宗なり）を遊び廻つて居た、時に黄昏撞き出した鐘聲が耳に入つたから、老樹蒼々廊廡寂然たる間を過ぎて齋堂に入つた處が、一山雲水の僧嚴然端坐し黙々裡に匕箸を公に進めた、公も禪旨に入り居る事として欣然之を受け、而して其默坐せる左右の僧に謂つて曰く、『謂はざりき三代の禮樂、緇衣の中に在らんとは』と、斯の如くにして當時の學者間へ、禪を鼓吹された事は仲々非常な者であることさ、第六には參政歐陽修を以て最も居士としての特風を見るのである、歐陽修が禪に入つたのも前の司馬溫公に相似て矢張書からである、夫れは其時代に有名の明教大師契嵩と云ふ禪僧があ



つた、契嵩は今の曾洞宗の流れを汲み、洞山悟本大師良价の第八孫ぢやさうだ、孝論、輔教編、定祖圖、正宗記、等を著はしたのは多く俗に云へば大便所の中であると聞く、予の慈師予が幼稚の頃、便所の掃除を頗る八釜敷いつて困つた、其何故たるかは今日に至る迄了解に苦んで居たが、漸く古書を繙くに至り始めて氷解した、予は其師を失つて茲に殆んど十數年になるが、此事を思つては涙襟を濕すのである、今の青年多くは師匠の無情や無學を難するけれど、开は未だ師恩を知らざる愚者である、自暴自棄する墮落者の云ふ事だ、『嗚呼吾れ誤り師よ許せ』の思ひが湧起せぬければ、到底世に事を爲す器物とはなれぬ、今や幽冥所を異にして予は不幸の淵に沈んで居るけれども、明け暮れ教へ給ひし師の慈訓は、常住不斷予の胸間を往來して居る、誠にたうとき事なんだ、知らず識らず先師を思ふの一念から、談が横道へ轉じたが明教大師は、右の四著書を天覽に供した、處で其文章及び論旨を讀み給ひて感歎し、勅して其書を大藏に入れ玉ひたさうぢや、後歐陽修大師が其著書を覽て非常に感激し、あゝ實に得難い書で僧侶の中にも此人あるかと讚歎したさうぢや、

夫より禪宗の居士となり深く禪理に達したとさあ、臨終の際には華嚴經を近傍の寺から借り、息の絶えた時已に入卷を讀んで居たとか、何にしても禪史に一異彩ある人ぢや、自ら六一居士と稱して盛んに禪の唱導に勤められたは益感服すべきである、第七には亟相張商英無盡居士を推します、此處には仲々面白味がタップリ有るから、少し長々と談す胸算故意屈でもあらうが、靜に聞いて貰ひたい、張商英は最初儒教を奉じた人で、佛教徒とか佛經とかと云つたら、吾國の平田翁の如き人で容赦なく貶したのぢやさうだ、或時自分の極嫌ひな佛教の寺院に遊んだ事がある、處が輪藏に一大藏經の有るを見て怫然として云ふには、『吾が孔聖の教寧ろ胡人の書に如かさらんや』と、乃で家に飯り晚餐が了ると書室へ入り筆を執つて何か一生懸命で書いて居る、最早今で云へば十二時を過ぎるけれど、就寝する様子が見えぬもんぢやから、妻君がソロソロ怪み出しよう三更であるのに、何故睡らぬで書室に居らるゝのかと尋ねた、所で先生の言ふに吾は正に無佛論を著さうと書いて居る、妻、是は可笑い既に無佛と言つたら、別に筆を呵して書く必要は無いでせう、流石の張商英も



之れには息づまつたと見え、成程當然の理であるといふ所から直に筆を止めたさうぢや、要するに張が禪門に入つたのも、夫人の力與つて多いのである、若し此際夫人の奇言が無かつたら、或ひは無佛論を著して後世に笑ひを残したに相違ない、併し此に注意すべきは其妻向氏である、彼は一種の化物として其心意を窺はねばならぬのだ、後、張同僚の人が維摩詰經を談するのを聞き、借りて家に飯り手に信せて讀み行く中、『此病非<sub>二</sub>地大<sub>一</sub>亦不<sub>レ</sub>離<sub>二</sub>地大<sub>一</sub>』と云ふ所で倏然として會得した、妻、再び口を開いて君既に其經を讀まれたで、今こそ前にね留め申した無佛論を著す時ですから、早速筆を執つて無佛論を書き給へと冷評されたので、張愈愚の音も出ず夫人が言に大に悟る所あつて、遂に心を禪の一方に傾け、東林の總禪師に就き、深く妙道に達して禪法宣傳に盡力されたとあるが、さも之れ有る好消息ぢや、夫れから後護法論一卷を著はして、八十一歳で逝去されたさうぢや、實に得易からぬ大居士である、が、夫人も實に只では喰へぬ神光があるよ、夫に向つて『既に無佛と言ふ何ぞ論を著すを須んや』と云つたのは、佛教信するに足らぬ佛經讀むに足らぬとの事

では無い、其理由は未だ佛經の片すだも見た事が無くて、無佛論など書き玉ふは片腹痛い、其様な論を著はされると君は兎も角妻の私迄が迷惑する、故に夫れは斷念あれと遠廻しに佛教の研究を促したのである、乃で張が維摩に依つて多少否大に佛法の妙理を感得し、其感得した結果を一々妻に話したから、今度は又反對に口調を狂げ、『君既に經を讀む宜く無佛論を著はすべし』と夫に揶揄したのぢや、其理由は今始めて佛教の難有さが分明しましたか、妻の私も其事あらんを朝暮之れ祈つて居りました、願くは信仰を世に表白して自信を明かにし玉へと、暗に又機の成熟したを喜んだ言葉である、此人にして此妻ある、毫も怪むに足らぬけれど妻も凡人ぢや無いな、今日の學者が佛教を難じ又虱の子の様な小學校の教員盡が、知りも見もせぬ佛教を評するは、恰も張が妻の奇戒を受けた際のやうである、其様な輩には妨げず與へん三十棒

梁の武帝と云ひ、亦裴休一司馬溫公、歐陽修、などは支那でも鏘々たる大立物である、其能く禪理に達したと云ふも、一個の俗人でしかない、一個の俗人として禪理に造



詣する如上である、檀徒とか信徒とか云ふのは、其等の人に與へる稱であるのぢや、夫れが今日では、權も三も無信仰者も不道德者も、何々寺の過去帳に祖先の戒名があるから、乃で僧侶も彼家は我が寺の檀信であると云へば、俗人も亦私は彼寺の檀信であるなど語るは、聞けば聽く程癩癩に障る、此種の類を例して見れば恰も動物中の人間と猿との話のやうぢや、人間も動物である猿も動物である、故に猿も人間も同様の位があると云つたら、誰か又其愚を笑はぬ者やある、夫れと同様で、司馬温公も佛教寺院の過去帳にある、權兵衛喜駄八も佛教寺院の過去帳にある、故に司馬温公も權兵衛喜駄八も同じ位であると云は、誰か又ハ一左様かと許す者があらうぞ、夫れも誰が悪いのかと終局の所へ行けば、布教をせぬ吾等が罪と懺悔せねばなるまい、乃で今度は日本に於ける禪宗の居士を紹介しやう、

### 日本に於ける禪宗の居士

之を紹介するに當つて、爰に聊か述ぶ可きとは、日本佛教中興の聞え高き、彼の有

名なる聖德皇太子即ち厩戸皇子である、太子は禪門の居士を以て目すべき人ではなけれど、佛教上に於ける居士として日本佛教徒の一日も忘れてはならぬ事である、若し太子を知らぬなど云ふ教徒が有つたら、容赦なく頭上一打撃を演ずべしぢや、太子の事は小學校の生徒も知つて居れど、其力を佛教に致された事を明知して居る者まづ乏しいかと思ふで、餘談ぢやあるが聞いて貰はう、厩戸皇子が佛教の悲境を救はれたのは、佛教が公然日本に傳はつてから五十年以上を経ての事である、其原因を語れば諸君も能く承知の通り、物部守屋、中臣勝海とが佛教を弘通すべきや否やの御下問に對し奉り、甲は國神の怒りに觸れるから弘通を非認すると云ひ、乙は聖意の在る所に従つて弘通すべしと云つて、双方とも遂に議纏らずして佛體は蘇我に賜はつたのである、後益間隙を逞うして兵力沙汰を守屋が持ち出したので、餘儀なく此に血腥い歴史を佛教に残した、由來佛教は耶蘇教に比すれば、血を流した歴史は多くないけれど、併し少ないと云つたからとて餘り讚めた話でもない、乃で迹見赤禰イイチが勝海を殺したものをぢやから、双方愈隙を狙うて居たが、馬子の諸皇子に謀



つた所で、止なく守屋を圍んで斬殺したのである、其時には厩戸皇子は髪を束ねて軍後に従はせられたさうぢや、今も肖像を拜せば其時の鮮血淋漓たる光景が、何となく眼裡にウツとり現はれる、太子軍に従はれた時四天王の像を造つて其頂に置かれたとき、今日名利とか大寺とかの山門に、ともすると四天王が安置してあるが、夫れは太子が正法を護持されたと云ふ所から、佛法の守護神として有るのだ、四天王とは、東方持國天、西方廣目天、南方增長天、北方多聞天の四王である、其時太子誓つて言はるゝには、『我れ若し勝を得ば必らず寺塔を建て四天王を奉せん』とのたまひて、後、今の大阪に四天王寺を建てられたさうぢや、爾來太子の佛教に致された事業と云つたら、日本佛教史の花ならざるは無いのである、悲田院、敬田院、施藥院、療病院の四院を設立されて貧民の救助に盡瘁せられた事は、實に何とも申上様が有りません、又俗服の上に袈裟を掛け給ひ自ら群臣に勝鬘禮經を講せられたなどは、日本佛教史に特筆大書すべきであります、其臨終間際になつて勝鬘、法華、維摩の義疏を製し給ひて、佛教信者に頒布せられたのが本邦に經疏の有る始めぢや

さうだ、憲法十七條を製し給ひた事も、諸君は能く記憶に印されてあるぢやらう、佛教寺院の全國に漸次増設を見るに至つたのは、太子が弘教の御配慮と聖武天皇の御詔とに原因するのである、故に吾等佛教を奉ずる者は、僧俗共に忘れては濟まぬのです、簡單なれど、以上紹介した理由である、若し其の詳細を知らんと思ふ方は、友人清原公潭が著はした、憲法衍義に依つて見て貰ひたい、サア此れから禪宗の居士を談さうか、禪宗渡來早々居士の名を以て推せば、前に臨濟宗を述べた所に在るが如く、源頼家を以て禪宗居士の始めとせねばなるまい、弘教上に盡力した事も尠なからぬが、概して公は禪宗の寺院を建てる事に傾いて居たは、予の喋々を要せず皆人の知る處なんだ、が、勿論禪宗歴史上偉大の居士とは、決して許すべき資格はない、只公が禪宗の居士たるは榮西禪師に参じたのと、建仁寺を建てたのみに依り、予が今禪の居士を公に與へて、其第一に推した次第である、諸君多くは異議ありませんまい、第二には上杉輝虎を推す、此人はズット時代を隔て、現はれた人ぢやけれど、吾が禪門中に居士として奇光を放ち居るは、實に公を以て最も其悟道家中



の豪物とせなければならぬ。故に上杉輝虎を第二位に置いたのである、公は長尾爲景の庶子で幼名を高千代といった、性質機敏で禪旨には至極契合して居るのぢや、七歳の時始めて越後國中頸城郡春日村林泉禪寺に入り、開山から七代目の益之宗謙和尚に就き、まづ寺小屋的の教育を受けたのである、宗謙も高千代の神童だと云ふ事を看破して、可成的禪旨の注入に勤めたさうぢや、十九歳の春始めて戦陣を構へ、自ら數万の軍を率ひて關東追討使となり、適ま建長寺に立寄つた處が庫裡に左の如き句か打版に書せられてあつたのを見て大に悟つたさうである

生死事大、

無常迅速、

各宜醒覺、

慎莫放逸、

上杉が禪に入つたのは此四句が與つて力がある、因縁會遇とか時機到來とかは、斯の如き場合の事を云ふので、寐て運を待つなんて云ふ其様な横着の事を指したのぢや無い、小田原の戦争も首尾能く大勝利を得たので、越後の春日城へ皈つて専ら宗謙和尚に參禪して居たさうぢや、後將軍義輝公上杉の戦功を賞し、義輝の輝を一字取つて謙信に與へたので、上杉輝虎と稱したのである、或時宗禪師が梁の武帝と達

磨大師會見の話を拈提した處が、輝虎も其列に加はつて翻然大悟し、宗謙和尚に問うて曰く、『如何なる是聖諦第一義』謙曰く、『不識』と、此處に到つて證得の印可を受け、自ら不識庵と稱して川中島の戦争に出陣したとか、何にしても居士中の悟道家である、夫れから後に將軍より越後謙信と名のらしたさうぢやが、一説に依ると宗謙和尚の謙の字を取つて謙信と云つたとあるが、夫れは餘り奥深く鑿穿する迄でもない、謙信の一世には逸話奇事が澤山にあるけれど、今一々云はなくも諸君は豫め承知であらう、其臨終に際して自書に自贊を書して曰く、

分明紙上、張公子、

盡力高聲喚、不應、

收因結果、竭始竭終、

對面無私亦云、咄、

後諸所に寺院を興起して開基となつた事は、其數百を超へて在るは事實なんだが、謙信の菩提寺としては林泉寺の外はない、其法名は、不識院殿神光謙信大庵主と云つて舊墳墓は春日山にある、悟道家の居士としてはまづ謙信を第一位に置かねばならぬ、上杉に亞いでは武田信玄である、同時代の人であるから謙信と相拮抗の人と



見れば宜しからう、第三には、後醍醐天皇を推し奉る、帝は元より神聖でまします故、位から云へば臣に降つて師弟の禮を取らせ給ふ事は出来ぬけれど、其御胸中を察し奉れば明らかに禪宗の一居士たるには相違なからうと思ふ、何故かと申上げれば曹洞宗の第四祖瑩山に、十ヶ條の疑議を御下問あらせられたるとき、又天龍寺の夢想國師を御皈依あらせ玉うて、親ら詔して開山第一祖と爲し玉うたのも、禪に造詣し給ひての御事なんだ、故に予は、陛下を第三位に紹介し奉るのである、第四には北條時頼、是も非も利も害も其様な事に一向無頓着で、無茶苦茶に禪宗の最負を以て茶飯としたのは、有名なる此北條時頼である、是を非に曲げ利を害に運ぶは、如何に禪門の居士であればとて、餘り珍重敬崇すべき難有味が薄い、日蓮が弘教に迫害を加へたのも此北條氏である、建長元年鎌倉の建長寺を立て、自ら大檀家となつて宋の蘭溪道隆禪師を請し、開基となつて禪風の宣揚に盡力した事は、亦捨て難き禪宗の一居士である、禪師示寂の後大覺禪師と諡を受けたのが、本邦に禪師號の在る始めて、之れも時頼の宣奏に原くさうぢや、第五には、人皇九十代龜山天皇を紹介し奉

る、天皇が禪旨に造詣せられたのは掩ふべからざる事實で、龍山の離宮を更めて寺となし給ひ、臨濟の無關禪師を召して其寺に住持とせられたと承るが、其理由は頗る面白い所からなんである、或時人の流言に其離宮から怪物が出て、種々の變化を呈はすので誰も其處に居人がない、時に南都の叡尊と云ふ名僧があつたから皇室よりは使を遣はして、怪物退治の祈禱を命じ玉ひたから、叡尊律師も早速僧一百名程伴れて来て、晝夜密呪を誦したけれ共怪事益多くなる計りで何等祈禱の効能がない、乃で帝再び群臣に謀つて今度は無關禪師を召されたのである、處で無關も又早速召に應じてやつて来た、帝の云はるゝには怪物が離宮に出没して祈禱其効が現はれぬが、尊師は其怪物退治を兼ね其處に能く居らるゝかとの御下問であつたで、無關カラ〜と答へ奉つて曰く、『妖は徳に勝たず、釋氏之れに居る何の怪かあらん』とて多くの衆僧を引率して其處へ遷られた以來は、怪物の流言はカ、ラ、リ止んで光風霽月明皓々たる光景を呈したので、帝大に禪師の徳を稱して群臣と共に禪學の研究に意を留めたまひ、永仁元年堂宇を新に建築し、瑞龍山大平興國南禪寺と御命名遊ばし



たのが、今京都に在る臨濟宗の南禪寺である、帝が禪師に深く皈依せられ、無關和尚を呼ぶに師の一字を以てせられたのを見ても、帝が如何に禪旨に留意されて居たまうたかは、大概分るであらう、サテ其の怪物ぢやて、諸君は果して此の話を聞いて、眞に怪物であると思ふと大誤解に陥るぞ、佛法は無罣礙の正法であるから、決して些の不思議とか妖怪とかの之れ在る筈がないのである、帝の神光只ならぬ輝きを當時の名僧間に放ち給ひたのである、で、其怪物出沒云々を帝が口から、然も出たのである故、群臣とて餘りは知らなんだ、要するに帝は當時の名僧が如何なる智慧と、如何なる悟道を有しつゝあつたかを、試験せらん爲め、親ら右様の問題を提出しましたのである、乃で先づ手遠い律師から始め試験せられたけれど、律師はただ、及第しさうの氣はいも無いので、遂に落第を宣告された次第である、何故然るか云ふに陛下は律師より一段上に禪を鍊られてましますから、律師が怪物あり祈禱すると云ふも、之れ明らかに眞實の正法を領會した人ぢや無いのだ、故に落第を命じ給ひた事も至當であらう、夫れから無關を召し給うて其を語り玉ふた

時に、『妖は徳に勝たず』と云つた無關の語に、最早帝も千計の廻らしやうがない、で、其離宮に入る、必要は其一言で消滅したが、併し乍ら約束上一應は其處へ入れ玉うた、無關もさるもの帝が試験なる事は夙に知つて居たから、釋氏の之れに居る何の怪かあらんと、暗に帝が悟道上の拙計を難じた口調らしい、何れの方面より見るも、天皇は儘かに禪宗の一居士でましくたのである、たふとき次第と紹介し奉る、第六には北條貞時を推す、入禪せぬ前は非常の猜疑で、他國の人と見れば必ず疑うたもんぢや、彼れが人を疑うの深かつた事は、正安元年の寧一山が渡來したのを見て、此は必らず元國の間諜ならんと猜を廻し、一山禪師を捕へて直に伊豆へ流した、けれ共後圓覺寺の住持に參じ大に覺めた所から前非を悔悟し、自ら足を伊豆へ運んで一山禪師を引き連て建長寺へ來り、禪師に就て深く禪宗の蘊奥を得たので、御恩報謝の爲めか知らぬぞ、後建長寺の虚席を一山禪師に繼がしめたさうぢや、第七には藤原藤房である、藤房は建武二年に遁世して剃髪した人だが、果して禪宗の居士たりしか否かは、餘り知る人無からうと思ふから、爰に聊か自分記憶の



まゝを紹介しやう、藤房は遁世して出家せられたのぢやで、まづ純然たる僧侶ではあるが、僧侶と云つても居士の範圍外へは出ぬ、公は臨濟の關山國師に參じて、臨濟一流の禪理に達し國師から衣鉢を傳はつて妙心寺の第二祖となつた、後神光寂照禪師と諡せられ又明治十二年圓鑑國師と加賜された、天爵中に天真を弄する藤房は、當にそれ名達榮利を叱咤したであらう、第八には徳川家光、公を禪宗の居士としたら或ひは居士諸君の叱責を蒙るか知らねど、此人も見逸し難き一居士である、其三十万人の基督教信者を四條畷に於て殺戮し、遂に宗判制度を南禪寺の東禪とか云ふ和尚に命じて之れを發布し、明治維新の際までも繼續したなどは、日本佛教史に大書すべきである、家光の一世は佛教徒に取りて慶すべきか將吊すべきか、予は家光の無殘なる其類稀であると思ふ、彼れが佛教の宣傳を一生涯勤めたのは、眞に動かぬ信念からでなくて、極ザツクバランに評すれば、巧に佛教徒を利用して自己が攝政に資せしめたのである、基督教信者を殺害したは、信仰上の衝突からでなくて自己の地位が危ぶない處より、餘儀なく三十餘万の同胞を殺したのである、今も當時の

光景を描いた油繪が、佛國巴里の耶蘇會堂にあつて、日本から學者や政治家や又は留學生が行くと、必らず其暴虐無法の殘害畫を見せられるので、各困つて返答も出來ないと或學士は予に談した事がある、此點から外國人に佛教徒を思はずれば、勿論佛教程恐しい宗教は無いと見られやう、之れ誰が罪であるかと云ふに、皆家光の罪ぢや、而して今日佛教の甚だ外面に振はぬのも、原因はと云へば矢張家光の宗判制度からである、憎んでも餘り有るは實に將軍家光ではあるまいか、斯の如く述べ來れば家光は取り處の無い悪人と聞くより外致方がない、然れ共其後有名なる禪庵禪師濟度下の善男子と化して能く禪理の極致に達し、三十萬人の爲めに諸所の寺々で施餓鬼を行ひ、造つた罪の重荷を卸したから、毒藥變じて靈藥となり無數の精神病患者を癒したで、まづ業障消滅した人と今度は崇めねばなるまいよ、第八には太田道灌を推す、道灌は三位頼政の後裔で、文學に長じ和歌を能くし又絶倫博識の人として、小學校の兒童と雖も知らぬ者はない程の人である、其城中に靜勝軒と云ふを構へて、自適悠々常に集九居士を友とし、禪學の研究より外餘念の無い人であつた、



當時は少なからぬ高僧が臨曹二宗の間に居られて、道灌も勤めて其等の諸師を訪はれたさうぢやが、特に曹洞宗の泰叟和尚を重んじて大に悟道されたさうぢや、乃で居士或時越生と云ふ處へ遊んで適ま一巡禮に逢ひ、太田が問ふには巡禮の前は何處の人ぢや、巡禮、ハイ私は京都の者で御座ります、士、京都の山川景色と此靈場の山水景色とドチラが勝つて居るか、巡禮、イヤハヤ途方もないれ尋ねに與り、何とも御返事は出来兼ねますが、問はれて見れば答へぬでも居られぬから、定り切つた事なれど答へ申上げませうと云はん計りの風情で、京都の山水だとして此地の山水だとして、山水に何處も異つた所は無いが、只山水に加ふるに時々鐘聲が聞えるから、まづ其邊が京都と幾分異りませう、と、暗に太田の馬鹿な問ひに答へたらしかつたので、流石の太田も返す言葉が出ず、倏然脚下を返照すれば、足既に下駄を脱して居たとさ、下駄を脱したとは早巡禮の看破に小さいく爲つたのを云ふのだ、ソレから雲岡（東京芝青松寺）に謁して、實際巡禮の看破に逢つた所より、退いて自分の感得した所解を述べた、所が雲岡和尚の云ふには、ね前が其山川を見た主人公は

今何處に在ると問はれた、士曰く、お問ひに與からなくも拙者の主人公を見やうとれ思召すなら、觀音靈場の鐘樓室に聞いて下さい、さらば鐘樓堂は貴問に答ふる所がありますでせうと應じたので、雲岡も其言の頗る奇であると云ふ所で、遂に悟道の印可を與へたさうぢや、居士でも法を求むるの一念は此の如くである、今人豈勤めざるを得んやと、

其外楠公あり秀吉あり兼盛もあれど、其一々を談さば五日や十日で盡きるものぢやない、故に居士紹介談は此位で御免を蒙らう、佛經を坊主計りが讀むもので、禪を坊主計りが修めるもの、様に考へて居るが今日の人々である、必らず俗人も經や禪を修めねばならぬ、和尚又味噌を云ふかと思ふが、夫れは左様ぢやない何よりの證據が、前に述べた通りの三國の間に於ける居士ぢやないか、耶蘇教を信する人々を見て、お前さん方は如何なる感を起します、彼等信者の中で偽信か眞信か、开は予も分らぬが、兎も角男でも女でも、馬太傳福音書やヨハネ傳福音書位知らぬものは一人もない、夫れが我が佛教を奉ずる所謂信徒なる者を御覽、眞日蓮兩宗の信徒を



除く外は、一人として否其七都迄は概して自分が奉せる宗旨や安心さへ知らぬ者の多きは、誠に慨嘆の至りぢやないか、斯様の事に談が移ると予が思ふには、彼の支那人が、孔子々々孔子以前に孔子なく孔子以後に孔子なし、嗚呼孔子々々と云つて、昔の人は法を聞き道を求める念が厚かつたけれど、今の人は傲慢で道を求め、法を聞くの信念がないと、遺憾乍らも支那人が孔子をしたふ如く、自分も矢張昔の人が戀しく懐つかしく且つしたはしく思ふのである、古訓にも『佳肴ありと雖も食はざれば其味を知らず、明教ありと雖も學ばざれば其理を得ず』とやらで、佛教が如何程有り難くも、禪學が如何程深玄幽邃なものでも、師を定め、就いて聞き就て思ひ就て修めなければ、何百年経た所が到底佛教の旨意が得られた者では御座らぬぞ、幸哉、君等は文筆を以て世に立ち、雑誌記者とか新聞記者とか聞けば、何卒正法相續の一端に時々は佛教の理解や、或ひは禪の興起の爲めに與へられる限りは、其紙上で擁護援助を望みたいものぢや、昔の人々即ち俗士は如何なる方法を以て佛教を信じ、或ひは如何なる方法で禪定を修めたか、皆悉く師を遠近に探かし歩いて、而し

て種々の皮肉を聞き、罵倒に逢ひ、尙且つ倦怠する色なくして正法を相續し、佛道極地の安坐に移られた事は、以上述べ來つた居士で明らかでありませう、然るに今日の人は坊主が馬鹿だ無識だ、故に談のしやうが無いなど云ふは、自らの無信仰を表白する者として、片腹痛い次第ぢや、頃日も何處かの小生意氣な八卦置きが來て、大きな駄法螺を吹いて人生終局の目的は斯様だとか、又は佛教は靈魂不滅を唱へるのぢやとかと、口から出任せの馬鹿を饒舌つたので、平素冷腦の予も、非常に癩癩に障つたから、れ前はまた靈魂不滅説を固執したり、或ひは神が存在すると云ふ愚にもつかぬ囁言を云ふ様では、正直の所、お前は未だ佛教の一片も研究した事の無い俗人だ、其様な事をいふから見ぢや、着實な研究を佛教に凝らせば可いと、無遠慮な禪宗流で一喝した處が、非常に立腹して予に喰つてかゝつた、故に予は若し眞實の法が多少でも研究する心があらば、予の室へ來い、聊か話す事もあるからと一片の婆心を與へたけれど、遂に應じ無いで退去したが、今の半熟半可通者は比々皆然りとの、夫れから後で、其者を聞いた所が、イヤハヤ眞赤なキ印で在つたさうぢ



や、何は兎も角、佛教徒が墮落したと云ふもの、正法には決して増減變異はないから、相當識見を有せる和尚方と聞いたら見逃さず、眞實心を込めて佛教の教理や、又は禪學の如何を研究して而して信徒とか檀徒とか云ふ其名に背かぬ様願ひたい、如何に佛教が國家監督の下に在ればとて、漫りに法律や規定など編み出し、之れに依つて寺檀の關係を保たせる様では、國民心を綜合統一する上にも、蓋し少なからぬ影響を及ぼすは無論の事、又夫れに依つて發する弊害も尠なからねば、冀くは自ら信する感念を胸中に殘して居て貰ひたい、殊に檀徒と教徒とは恰も國家と國民との間のやうで、苟も吾帝國の臣民と生れ來た以上は、國家は其臣民に對して先天に國民の幸福と安寧とを與へぬければならぬ如く、國民も又國家に對しては先天に盡し働くべき義務があるから、陛下に對し奉りては是非とも忠實に忠義奉公を致さねばならぬ、夫れと同様に佛教を奉ずる者も、教徒が先天的布教の義務があれば、又隨つて信徒にも先天的奉教の義務があるのだ、故に兩者が相一致せぬと佛教は遂に自滅する、實に遺憾極まる事ぢや無いか現にそれ、何程繰り返しても同じ事だが、諸

君は壯氣人に勝れて堅忍不拔ぢや、其堅忍不拔の一念を正法相續の上にも齎らし、而して前述せる居士方の美風を標本として、此哀れなる極窮に陥つて居る禪宗を、墨華再現重開覺苑之春と云ふ様な偉勳を奏されん事を希望して止まぬ次第である

### 新聞紙と禪學

今の新聞紙を讀んでも、禪の勢力は明らかに其文士諸君が心底に潜んで居るかの様思はれる、夫れは如何なる理由であるかと云へば、其新聞に掲載して在る、短評とか一口評とか云ふのは、皆佛書より流れ出た題目である、尤も今の新聞記者連中には、何がなんだか其理由を知らずに書いて居る者も有らうが、其等短評に類似した總ての者は、假令記者が自案自作にもせよ、支那時代の佛書を指月と云ふ禪僧が有つて、夫れに一口評を加へたのが今の新聞紙に利用される事に爲つたのぢや、『日々新聞』に朝比奈知泉と云ふ天台宗の還俗僧が記者たる際、始めて一口評と題し何事でも評したのが今日の諸新聞紙に現はれる事となつた、知泉氏が記者にならぬ以前



は、其様な事は毫も無かつたのだ、又其用語でも、喝とか咄々怪事とか心機一轉とか、或ひは三十棒とか殺人劔とか活人刀とか云ふのは、皆悉く禪學よりの賜物である、殊に記者と成つて筆を取る際にも、禪學の素養否研究の無き人は、文章に活氣が現はれぬから死論も同様になると、有識の新聞記者が談した事があるが、或ひは左様かも知れぬ、わしが我田引水説を鳴らすのではない、新聞記者は或る點に取つては、國家の利害得失を可否すべき論客となり、又或る場合は國民を指導する先生とならねば成らぬ故、其際に當つて處分を恐れ新聞條例の抵觸を………餘程敏捷の働きが無ければ不可ぬから、爰に始めて精神を不動に置くの必要が起つて來る、其良師たるは禪に如くものは外に決して無い、

### 禪とは何ぞ

是輒く解し得られぬ問題で、多くの學者を始めとして其他一般の世人が、等しく此問題の爲めに懊惱して居る所である、從來禪門の高僧諸師に至る迄も、之れに對し

ては何等の解し易き定義を興へて無い爲め、禪と云へば俗家の人々は、皆悉く痛い膝を折つて眞つ闇な所に坐つて居る代名詞と計り思つて居るのは、信徒が僧侶に語る事を聞いても明かな事實である、而して此語解は獨り俗人に留らずして、善知識とか師家とか西堂とか、立派な肩書を有せる和尚さん方さへ、平素衆僧に語るに何でも坐禪しなければ不可ぬ、坐禪しない人は心が撞着する、坐禪すれば天邊の月といふ様に心が物に動じない、故に坐禪は是非ともしなければならぬ、其坐禪をするには何でも僧堂に限る、女も酒も避け身心共に潔白にしなければ、眞に悟られぬなと禪を窮屈げに談ずれ共、禪は決して膝の痛さを忍ぶ代名詞ではない、僧堂とか坐室とかで牢屋的窮屈な時間を送り、而して枯木寒巖の様にならなくとも、容易に修し得られるが禪である、請ふ少しく演べさせて戴かうか、まづ禪とは何ぞの問題に就て、予は予の見解で語る、語つて而して其苦みつゝある人々に答へやう、勿論禪といふ事に定義を下さうとすれば、用語としてはたくさん有るが、予の見解で云へば、禪とは一の理想といふ事になるので、何にもさう六か敷講義は要らぬのである、



禪を理想と定義したは随分異例でも或ひはあらう、耳慣れぬ極めて平凡な定義らしくも聞いもしやうさ、然れ共佛骨髄とか佛法の總府とか云ふよりは、俗人は確かに早分かりで、亦此定義の爲めに決して禪其もの、意旨を傷くる事は断じて無いのだ、と、斯く申せば反對の論者は言ひもしやう、然らば禪の光明が薄らいで世の理想論者と毫も擇ぶ所がないぢやないかと、之れ最も頑迷姑息の僻論である、何故かといふに世間で唱へる所の理想なる者は、時に憎愛とか親疎とかの岐道を異にして、各其具體的の罪惡を抑制せんとする迄で、いまだ必らずしも先天内容の安心問題に足を入れ口を出さぬのであるから、予の今禪を理想と定義せる立論とは、實に天地の懸隔があるのだ、予の理想(禪)と唱へるのは内容に輝く光りを指したので、語を換へて申せば、所謂論量を超越した靈光を平素に働く事をいふのである、それ故に禪の意義を假りに換言して理想といふたとて、敢て甚しき失當の事にもなるまい、乃で禪なるもの、定義を下したから、これより禪は何を目的として佛教界に生存し、而して禪の作用は如何なる結果を吾人に與へるかを少しく論述しやうか、

禪は吾人に最上最大の満足と與へん事を目的として世間及出世間に現存して居るもので、思議界以上不可思議界以上の最高級に位し、理性と心靈との調和者として、吾人の平素に慰安を與へるのが目的であるから、其目的に伴ふ禪の作用も従つて高尚の地位に在ることは、今更喋々する必要もなからう、然れ共さう言つた計りでは、分かり憎からうから禪の作用を如何なる方法に依つて擧ぐべきかを述べねばなるまい、如上所述の意味からいへば、禪は高尚の所に計り位して居て、下層には無要の如く聞き取らるゝか知らぬが、決して禪は其様な一方にのみ偏するものではなく、高上高下を通貫して毫も増減はないのであるから、如來に在つても増さず凡夫に在つても減らぬのである、が、只唯如來と凡夫との間に墻壁を築いて甚しく懸隔して見えるのは、修證が一如ならず行説が一致せぬからで、本來即ち元より具有して居る佛性は是三無差別なのぢや、故に佛教に『奇なる哉、一切衆生は皆悉く智慧徳相を具足す』とあつて、ギャツと母の胎内から産聲を發して、此娑婆へ出た其時に既に業に本具の佛性を有して來たのであるから、本來本法性天然自性身である、要す



るに禪の作用は修と證とが相待ち、智と徳とが相一致せぬければ、斷じて其作用を自分共の境介に移し及ぼすことは出来ぬのである、畢竟悟りといふも此事を明めるといふも、智と徳、修と證との併進を呼稱したのに過ぎぬのである、譬へて申せば、まづ天下の人物だが、彼の人は人物である君子であると云はるゝものゝ平素を見るに、口で國家を論ずれば、其一舉一動が寸時も國家を離れぬで、能く國家の安危に連れて往く、又口で仁義とか人道とかを鳴らせば、其行爲が常に仁義や人道に附隨して、或は貧民を救助し或ひは公益を企て、或ひは窮難事變を救ふ等は皆禪に近い行説一致である、今佛道に入りて禪を學ばん者も亦復此の如して、身既に佛作を爲し佛行を爲し居る當体が、取りも直さず悟道である、故に修行を離れて證得(乃ち悟道)はない、然らば修行といふものは、看經や讀經や坐禪を言ふのであるかと申せば、決して左様なものゝみ計りを指したのでなく、寢ても起きても將働いて居る時も、早く煩惱の火宅裡を出で、光風霽月の境に到りたいと、金剛不動の念にドツッリ大安坐し

て、外から刺戟する六根(眼耳鼻舌身意)や六根の爲めに搖かされて起きる六識(色聲香味觸法)などに浸される事のない様に三百六十五日を送り續けて、日々是好日で倦怠せぬのが即ち修行事であるから、其修行事が直にもう悟道なので、前にも述べた通り政治家とか君子とかいふ名證は、元より定つて有つたものぢやなければ、口で良政を説くと同時に其行ひを形の上に現はすから、此處で始めて政治家と名づけられ、同時に其人の本領も知れる事になるのだ、で、高祖大師も『人々分上豊に備れり〇〇〇と雖も、修せざるには現はれず、證せざるには得ること無し』とあつて、修行と證得とが相依り相待ち、言行一致が如何に大切であるかは大概わからう、されば禪の作用なる者は、別に入ケましい議論も討究も要せず、平常其儘が直に菩提地で、修行即悟道なりと觀念して、寸時も怠たらぬ様勤めて出さいすれば、それが禪の作用で其外一法の彼此議すものはないのぢや、

### 未證已證の時代は如何



世の多くは悟らぬ前と悟つた後とを非常に誤解して、豁然大悟した時などは、丸で重荷を卸したかの様に全身が軽くなるなど、奇々妙々の事をほのめかして居れど、开は決して信せられぬ談で、其様な愚にもつかぬことをいふから、禪の活機用を殺して了ふのぢや、平素能くいふ事だが、悟りと申すのは煩惱即菩提生死即涅槃とさへ心得れば間違はない、乃ち迷つて居る其反面が即悟りて、亦生住異滅の四相に遷されて居る其反面が即涅槃（ニルバナ）で、迷を遙に離れて而して後悟りを遠く外に求むべきものではない、生滅の相を離れて別に涅槃はないので、畢竟迷つて居る其儘が直に悟りて、生死の當体が即涅槃であるから、煩惱を弊履の如く擲げ捨て、菩提をマホメットが洞中に神命を受けたやうに得らるゝものぢやないといふ事を心得て置かねばならぬ

迷と悟りを物に譬へて申せば、恰も衣服の如きものであらう、元より着物といふものは絹にせよ木綿にもせよ、一反なら一反を仕立上げて、單物とか袷とかにするものだが、假りに一反の織物を單とするに、其一枚の着物が縫方によつて、表の作

用を爲し裏の作用を示すぢやないか、然れども表は表の働きより裏の権限を犯さず、裏は裏の働きより表の権限を犯さず、兩々各其作用を異にして居れど、所謂一枚の着物といふ範圍を脱せぬと同じ道理で、煩惱と菩提、生死と涅槃も迷執と悟道も、皆其着物の如くであるから、煩惱妄想で迷つて居た時代を經過して、現前明星即心成佛と云ふお悟りの境界に至つたからとて、閻室から俄然日光照り輝く處へすつ飛んで出るやうの者でもなければ、亦虚空にブラさがつて白雲の間に自由自在の翱翔が出来るといふ様な神秘的現象が生ずるのでもなく、平生身其當處が直に超凡越聖の高想となるのを、大悟底の境介とか、直指人心見性成佛とかいふのである、如何に萬徳圓滿の釋迦牟尼如來様だからとて、具態的に八十種好とか六十瑞好とかを有せられたのではなく、畢竟理想の高い眞善美の徳を形容して讚歎したので、亦雪山からお降りになる時でも、人的動作を離れて白雲に跨がられて降られたのぢや決してない、矢張我等と同じく飯も食され湯も飲まれ、衣服も寒暑に伴ふて厚薄して着けられたのである、後世の畫家が世尊出山の御像を描いて、皮と骨計りの憔悴し



た所を書くが、彼れは大に考へて見ぬとトンダ間違を惹起すぞ、出山當時のれ釋迦様は、決して畫家の描くやうなヒヨロ々々然たるものではなかつた、仲々常人を超越しての大の肥滿家にてれはしましたのである、所謂康健なる精神は健康なる體軀に宿ると云ふ俚諺の如く、釋尊の御健康は實に大したもので、蓋世の雄、拔山の力所の段ではない、宇宙間を眼下に睥睨されて、多くの群生を掌上に弄ぶ如き御見識であつたから、有情非情同時成道の金句も出たのである、然れ共其心中を推察し奉れば、運薪搬水の御艱難は勿論の事、六年不動の端坐中には、數論派や勝論派等を始めとし、其他九十餘種の學派の爲めに、如何程憔悴されるやうな迫害を受けられたかは、思ひを遠く其當時に走らせて見れば、涙滂沱として覺えず襟を濕す計りであるから、つまり内容の御艱難とみれば間違はないのである、此の如く陳べ來れば、上釋尊を始め奉り、下歷代の祖師方に至る迄、總て悟道された結果だとして、必らず我々の平素と毫も異つては居らぬ、五郎兵衛が出家して悟道しても、恰も蟬の脱けがらの様に其五郎兵衛姿が無くなつて、而してれ悟り姿が別に具はると云ふものではなく、矢張五

郎兵衛は五郎兵衛のまゝにして大悟底の人ぢやから國王子の悉達さんが出家されで、お悟りを開かるれば矢張悉達太子時代の餘は依然として變らぬものである、故に奥州松島瑞巖寺の開山法心國師が偈にかういはれた、

一登金山弄風光

還來圓福坐道場

法身覺了無一物

元是真壁平四郎

流石は大悟底の人丈あつて、千金の價直あることを唸られた、實に是禪林一枝を折られた感がする、法心國師とは諡で、一名平四郎和尚として禪門の流れを汲んで居る者は誰知らぬ人もないが、國師の一世には逸事奇話頗る多くあるけれど、今一々紹介する暇がないから、國師の傳記は語らぬとしても、其偈丈は是非紹介せねばならぬ、國師在家の時曾て伊達政宗の臣となられて居られた時、或日政宗が外出に際し足駄の整へ方が悪しかつたとかで、短氣の政宗くわつと計りに怒り出し、其揃へた足駄を持つて玄關前で國師の頭上をしたゝか打撃したのである、所が如何なる機會か其足駄の齒一枚缺けて飛んだ、すると平四郎ハツと地上に俯して自分の無禮を只管



に謝び、政宗の眼を偷みて其欲齒を白紙に包みて懷中し、其夜窃に城を逃がれ出て直に佛門に身を投じ、それより六十餘洲の善智識方を歴訪され、世累の攀縁社會の煩雜を避け、専ら生死(人生)問奥の工夫を凝らされ、心靈の修養は非常に進められたが、所謂日本免許の悟道家たるに満足なされず、遠く支那の金山に遊ばれて、十有餘歲の間修道せられ、佛陀の眞骨髓を明らめたから、まづ皈朝して多くの苦しみつゝ有る者を救はんとの大願心を起し、皈朝されても亦諸方の坐禪家を訪問されて御自身の研究の結果を公にせられ、到處で宗風宣揚に勤められたから、道俗の集つて法を聞く者が引きも切らぬ有様とはなつた、斯かる次第であるから全國津々浦々に至る迄、轟然として其名が傳はり、其當時の學者達や諸大小名までが、競ふて平四郎和尚に皈依したのである、すると伊達政宗は豊公の智謀や軍略で、多年抱懐して居た野心も希望も碎かれて了ひ、高く降旗を翻して蓋枯れ返つて其非謀の成らないのを嘆息したり悔悟したりして居た時だから、サテ法心國師なる人が眞壁の平四郎であると聞いて益々前非を悔い、兎も角もと法心國師の草庵を尋ねて行き、前過

の始終を打開けて其罪を謝したのだ、すると國師は徐ろに口を開かれて、なほに其様な事は何んでもない、ね前さんは以前に異なつた政宗かは知らぬが、拙僧は相變らずの平四郎で、ね前さんの家臣で居た時も禪を修めて開悟したと世間からもてなされる、今日も決して異つては居りませんが、然るにね前はトボけた其んな馬鹿をいふのか、拙僧にはサツパリ合點の參らぬ事だわい、成程一度は金山へ登つて修道はして來たけれど、斯うして又日本へ還つて見れば、日は朝な々々東方が出るし、月は夜な々々西に沈むし、鴉のガア〜と鳴くのがチウ々々とも變らぬし、雀のチウ〜と囀るのが鴉のがア〜にも異ならぬし、山は舊に依つて屹々として高く、川流昔のまゝで低きに下る、人は矢張眼横鼻直で、男は男、女は女、春夏秋冬自然に循環して所謂大用現前毫も規則を損じて居りませぬぞ、迷つて居た時悟りは斯様か彼様かと思ひを苦めて、なんでも早く佛に爲つて衆生濟度がして見たいと望んだのも、一念、佛法と申すものはかうぢやと悟つた曉は、本來無一物でいまだ悟らぬ前と同じ事で、身は假令當然受くべき社會から階級を與へられたからとて、姿形は



矢張悟らぬ前の平四郎ですよ、れ前さん下手に間違ふとトンだ踏み筋を誤るぞ、咄、何等の大見識ぢや、釋迦も摩祖も皆此句でブン投げられて居るのである、一方も奥州の大名で當時驍將の名が噴々傳へられた人丈あつて、國師の言下に豁然省みる處があり、其場で直に前非を悔い改め、遂ひに國師に參じて禪學を研究し、今の瑞巖寺を建立して國師に皈依して信を表はした、が、國師は其處に永住せず、先づ足を漸次東北に進められ、洞内ホラナイといふ處で遷化されたと言ひ傳はつて居る、

編者曰く予曾て松島に遊び、瑞巖寺(臨濟宗)住職釋薩水師に面し、親しく國師に關する傳記を問ひたる事ありき、實際師の語る所によれば、國師性潭水の如くにして、一處に住する事を非常の苦とし、常に身を清風明月の間に弄びて又餘念あるなし、されば道俗訪ひ來りて請聘するあれば、快然是を諾し往きて化を四方に敷く、或日陸奥八戸の城主某來り化を其地に布かれん事を請ふ、國師即ち往きて單身柴庵を結び住す、居る事數旬、城主之れを聞き驚き到りて其無禮を謝し、尋て一字を建立し水田三町を寄す、國師大に悦び隨徒二十餘名を指揮し、自ら祖肩

となり耕して之れを食せるとかや、後人はれを客僧田と稱して今にあり、其傍らに古松あり丈甚だ高からず、コハ袈裟懸松と唱へて現に生ひ繁れりとか、晩年遂に此處に在りて逝く、時に年七十有又一、若し同地へ遊ばん者は、沼崎停車場より七戸町へ出で、それより道程一里三十丁人力車も通せり、處は青森縣三戸郡洞内村法蓮等、當時は臨濟宗なりしも今は曹洞宗に屬す

實に法心國師の作られた偈の眞味は、禪に志の厚い人にして始めて此間の消息を解すべしぢや、それ故に悟道と云ふも暫らく分別妄想の時代を経過する迄の代名詞で、愈々悟つたとなれば未悟の時と毫も變らぬのである、此事さへ平素忘れぬ様にして居れば、前にいつた如き誤解には陥らぬのである、で、高祖大師も「毫釐も差あれば天地懸隔」と示めされた、後人の參禪者深く注意すべきことであらう





## 附 録

### 三百則拔萃提唱

以上述ぶる所でね前方も多分了解し得たと思ふで、今度は三百則といふ書物の事を談すとしやう、だが、單に書物であると聞かれては甚だ迷惑することだから、何んでも三百則は人生といふ怪しき曲奴を捕らへて、直に其曲奴の性質を分拆する方法であると思ふて貰ひたい、さあ此時に當つて不立文字が必要で、文字のまゝを見ちや如何に苦しんでも其意味や骨子が領得されぬぞ、古語にも『經を看るには須らく經を看るの眼を具すべし』とあつてまづ此經は何を基礎として説き出されたのかを、深く注意せぬと書物の立脚地が見られぬで、揚句の果には何を讀んでも何を聞いたのか左ツ張判らなくなるぞ、故に佛教の經論を繙く人は、成るべく文字に拘泥せずして、文字以外に其眞理を認得せねばならぬ、古來から能く僧侶間で申す事だが、文字は指月の具なりとあつて、譬へは自分の頭上に皓々として月が照らして居るのを認める事が出来なくて、月は何處に有りますかと問ふ人ありと假定するか、然ら



ば問を受けた人はそれに對して必らず月は彼處に照らして居りますと應答指示する  
には定まつて居る、で、其彼處にありと示した指は、月を示す迄は大切な道具であ  
るけれど、既に月を示して了へば必要はないから、文字も畢竟佛教唯一の眞理を了  
得する迄は必要欲くべからざる者だけれど、元より具有して來た人間の本旨が分明  
すれば、結果は不要文字となるのだから、可成文字其者に使はれまいと用心して貰  
ひたい、殊に禪書は外の經論や典籍を講ずるやうな鹽梅の者とは頗る其趣を異にし  
て居るから、説く者も聞く者も仲々骨の折れるものである、例へば如何なるかこれ  
祖師西來意と問へば、麻三斤と答へるの類、それから如何なるか是れ佛法の大意と  
問へば庭前の柏樹子、其他皆此の如き句調筆法だから、初めて禪學に着眼する人に  
取りては、何んの事やらチンプンカンである、斯かる次第故文字に成るべく重きを  
置かないで、まづ其眞理を反面から認め出す見識でかからねばならぬ、さらば着眼  
點の如何によりては、容易に眞趣味を嘗むる事もないとも謂はれぬ、故に近年死な  
れた天龍寺の峩山和尚は、平常禪書を聞く時に限り、兩眼を閉ぢて傾聽されたとい

る、或ひはそれも可からうが、初門者には困難といはねばならぬ

### 萬法不侶因縁の話

襄州の龐蘊居士、初め石頭に問ふ、萬法と侶爲らざる者、是  
什麼人ぞ、頭手を以て居士が口を掩ふ、士此に於て豁然とし  
て省あり、又馬祖に問ふ、祖曰く爾一口に西江水を吸盡し來  
らば、即ち爾に向つて道はん、言下に領悟す

居士は當時の支那では鏘々の聞え高かつた儒者で、始めの中は非常に佛教を貶され  
たけれど、遂に憂然昨夢の醒めたが如き心地から、儒を捨て、禪門に入り、佛法と  
は何ぞ、悟道とは何ぞの研究に従事されたのである、適々石頭の無際大師に邂逅し  
て、サテ和尚様萬法と侶ならざる者は是れ如何いふ人でせうと、單刀直入一本衝き  
込んで來た、すると六頭無際大師は早くも居士の法器（人物）である事を見て取つ



たものか、ね、つとね前さん何をいふのだ、萬法と侶ならぬ人が何處にある者か、知れ切つて居る事を問はなくも可いでは御座らぬか、夫れを強ひて殊更に聞くだけが野暮の極頂だわいと云はん計りに、まづ默然せよ默然靜慮して而して自己を省顧なさいと切つて出られたから、流石の居士も問ひは問うて見たもの、今度は手持ち無沙汰となつたが、靜かに考へれば石頭大師の答への如く、萬法と云つた所が何も自分銘々を離れて外に有るものぢやなし、從晝至夜悉く萬法と侶なりである、それが悟れぬで大師に問話したは自分の誤りであると氣づいたから、所謂了すれば業障本來空で、何も不思議はないと大師が答への言下で了得した、サテ其場は居士も聊か安堵した體であつたが、元より學者といふ自信心が胸裡滿々なので、なんだか亦再び疑團が結ばれ、更らに一層の惑ひが生じたから、今度は又馬祖に逢つて、石頭和尚に問うた其儘を繰返して出た、所が馬祖の應答も前の和尚と大同小異で、爾一口に西江水を吸盡し來るを待つて即爾に向つて道んと鉄棒を頂戴した、何んたる空恐しい形容詞だらう、オイ居士ね前は何國語を問ひ掛けるのだ、萬法不侶なんて餘

り馬鹿を云つちや不可ぬせ若し強ひて其様な事を問ふなら、拙僧がね前さんに一つの注文がある、其注文はかうだね前は萬法不侶と拙僧に問ふた其大きな口で、まづ西江の水を只一口に吸ひ盡くして御ざれ、さらば又ね前に道ふ事もあらうからと、無遠慮に最も突然に美事やつけたので、ははあ一分明しまして御座る、此様な小さいな口でどうして彼の大江水を吸盡されやうぞ、サテ音に傳はつて居る馬祖丈で、仲々並大抵な和尚ぢやないと見える、西江水とは萬法を指したので、吸盡の二字は疑ひもなく直指といふ事だから、其萬法を直に此事である指した時に、變體妙用は吾人を指揮して去來自由の境介に遊ばしむるのだ、と、省みると同時に、亦吾人が喜怒哀樂等の爲めに、或は悲痛し或は厭苦し、激しては狂瀾怒濤を捲き、靜まりては海水湛然の如くになり、冷えては瓊琳の玉露となり、熱しては炎火となり、毎日々々心のまゝ望む所に隨つて云爲行動して居る、其有様が取りも直さず萬法と侶なつて居るのであるから、豈獨り高僧計りが萬法伴侶の那般（悟道家との意味ならん）ならんやだ、親も子も夫も婦も男子も女子も、賢者も愚者も聖人も學者も、



醫士も軍人も官吏も商人も、財産家も貧民も、下男も下婢も皆悉く萬物萬法の大道を往來し、能く萬法と侶なつて萬法の作用を現はして居るのだから、居士も此處で始めて疑團が氷解し、馬祖が言下に大悟されて、遂に馬祖の法脈を繼承する事となつた、乃で指月和尙は左の批評を兩者の問答に加へられたが、是亦頗る咀嚼すべき真味がある、

師曰く、省みる處、大悟、兩口一舌無し、且らく道へ西江水深きこと多少ぞ、汝亦吸盡すや未だしや、正使悟を得るも、依然として炙脂帽子しほしほを脱せず

師曰くは指月和尙が斯く申されたとの事で即ち批評されたのである、此評の意義を概括すれば、龐蘊居士が初め石頭に後馬祖に、同問題を提起して其應答に満足し、遂に馬祖の一喝で豁然迷雲を一掃されたから、其當處を指し省處大悟を云はれたので、兩口一舌無しとは、問うた人も答へた人も相拮抗しての相撲だから、何んとも

言つてみやうが無いとの義理で、語を換ひて談せば、主客好一對の取組みなりといふ程の事である、且道、それはさうと西江水深きこと何の位であるやら、居士は果して西江水（萬法中に在りて能く萬法の活作用を認め得る底の力量）を吸盡したかどうであらうか、たとひ悟を開いたとて矢張萬法の往來は變らぬぞと、得意も得意大得意で評された

### 南泉磨靨打車の話

洪州江西馬祖大寂禪師、南嶽に參侍し密に心印を受く、蓋し同參を抜き傳法院に住し、常日坐禪す、南嶽是法器なるを知り、師の所に往き問うて曰く、大德坐禪して箇の什麼をか圖る、師云ふ作佛を圖る、南嶽乃ち一擲を取り、師が庵前の石上に磨す、師問ふ（大寂禪師）、師什麼をか作す、南嶽云ふ磨し



て鏡と作す、師云はく磨塲豈鏡と成る事を得んや、南嶽云はく、坐禪豈作佛を得んや、師云はく如何せば即ち是ならん、南嶽云はく人の車を駕するが如きか、車若し行かざれば、車を打つが即ち是か牛を打つが即ち是か、師(太寂禪師)對ふること無し、南嶽又示して云はく、汝坐禪を學ばんとするか、作佛を學ばんとするか、若し坐禪を學せば禪は坐臥に非ず、若し作佛を學せば佛は定相に非ず、無住の法に於て取捨すべからず、汝若し、坐、佛、せば即是殺佛なり、若し坐相を執せば其理に達する非らず、師示誨を聞く醍醐を飲むが如し

馬祖大寂禪師諱は道一、是れは本文の通りで餘り六ヶ敷ことはないけれど、其問答の爲し方といひ、且つ双方の着眼點が、頗る面白く殊に南嶽の活劇と來たら、數百年後の今日に於て龍蛇出没虎豹變現の感じがする、で、聊か其わけを述べるから、

餘蘊霧深き所は、諸君が實參實究して其真趣味を汲まれん事を慫慂して置く、だが、此處に退いて警告さねばならぬ事は、禪は説き得らるべしと予が前に斷案を下したのを曲解して、恰も經論の詮議をするやうな考へで、理屈から理屈に涉つて了ふと、三世諸佛や歷代祖師の仇敵となるに留らずして、結果は天魔や波旬の玩ぶ野狐禪に陥るかも知れぬで、餘程熟慮してもらはぬと第一予が大罪人となるから、もはや説き得られぬ最高の眞理といふ處に至れば、起信論にも馬鳴菩薩が諭された如く、『一切の諸法は唯妄念に依て差別あり(差別とは迷執)苦心念を離れば一切境界の相無し、是故に一切の法本より已來、言説の相を離れ、心縁の相を離れて畢竟平等にして變異有ることなし、破壊すべからず唯是一心なり故に眞如と名く』と、蓋し禪學と説いて悟道の名詮とする、これが、もう、大躰に於て誤つて居るのだ、證得に是非すべき相が何處に存するか、若し悟道の相や名があるものとしたら、それは決して眞の悟道ぢやなくて、佛道の修禪者ぢやあるまい、何故なれば禪と云ふも暫らく名のみで、其實躰實物は遠く言論談議の區劃を超越して居るのだから、



禪其もの、立ち場は正しく馬鳴大士のいはれた、總ての假相を離れて所謂平等にして變異もなければ破壊もされないと云ふ絶言絶慮の所に在る事は明白である、されどコハ其内容の心靈をいふのだから、その心靈上の活動を具態的に働かねば禪に参する必要もないで、まづ禪は平素に於て自分が一進一動するに際し、心靈の作用を今度は形の上で實踐躬行するのが肝要である、故に修禪の人は起信論の「一切の言説假名にして實無く、但妄念に随つて不可得なるを以ての故に、眞如と云ふも亦相有る事無し」と云ふ塩梅に餘り假相の言句に執着して、無相にして而も活動有る悟道の面目を誤るなくんば好き、サテ話が異岐に迂つたが是より本文に立ち還つて話をしまうさうか、

「南嶽に参侍し密に心印を受く、蓋し同參を抜き傳法院に住し常日坐禪す」此處は大寂禪師が南嶽に逢はれた後を、尾文に附せずして前提としたのだが、最初はまづ式の如く吾等の初入禪門時代に於けると同じく、痛い足を無理に折つて端坐工夫を傳法院といふ寺で修められて居たのである、併し乍ら常日坐禪すといふ意味を深く探

ぐれば、強ち痛い足を我慢して折られたのではない、最早大悟底の人として一方に法幢を翻して居られたこと、見える、故に「南嶽其法器なるを知り」の語があるのだ、サテ南嶽禪師は馬祖の法器で有ることは能く知つて居るし、殊に聞けば近頃は随分能く勤めて居るさうぢやが、どんな事を行つて居るか一ツ訪問させうと、フラクマ祖の所へ出掛けて往つたのである、はい御免なさい和尚さんは御在院ですか、是れ油断のならぬ大賊である（禪書に老賊とか又は端的是賊とか云へるは大に稱讚の敬語なり）下手な返事をする、腰間の秋水は容赦なく切り込んで来る、此處實に危険至極の難關である、や何人だと思ふたら南嶽様ですかさあ何卒此方へと案内した、乃で南嶽が鋭鋒忽ち大寂に衝き入つて、イヤ此程承れば貴僧には毎日々々能く坐禪をなさるゝさうぢやが、全躰坐禪して何を圖らうと思召すのか、拙僧にはサツパリ合點の参らぬ事だからどうか御教示を仰ぎたいと存じて訪問致したのだ、左様であるか、勿論坐禪せば佛に成らるゝから、斯くの如くして居るのである、然るに貴僧は何無用のことを言ふのかと、南嶽の鋭鋒を押へた、すると亦南嶽は果して然ら



ば自分にも又一策がある、其様な未熟の受け答へに左様かと満足はせぬぞと云はん計りに、勃然と起ち上がり一搏を拾うて、大寂の坐禪して居る面前へ持ち來り、礎の上でゴリ／＼磨き始めた、こいつ奇牒の事をするわいと暫らく眼を欷て居たけれど、遂に堪へ兼ねて、ね前さん何悪戯するのか、失禮も程があると大寂の胸中憤波動き出して不穩の状あり／＼だ、イヤ悪戯でも芝居でも何でも御座らぬ、此搏を磨いて鏡とする考へさ、随分面白い談ぢやが門外漢は一工夫を要する所である、乃で大寂から／＼と大笑し、此和尚さんお前何寐恍けるのです、搏を千年磨いたとて如何で鏡とならうぞ、大抵の事にして悪戯をお止なせいと注意を促した、所が南嶽もさるもの、今度は美事竹篋返しに大寂の襟首を取つて蒐り、お前が左様いふなら拙僧にも意見がある、「坐禪豈佛と作るを得んや」拙僧が此搏を鏡と爲さんとするが如く、お前の坐禪して佛とならうと思ふも、畢竟不可能の大誤解である、既に佛にならうといふ一念が有所得心で換言せば大妄想の甚しきものである、坐禪の根本義は決して其様な野心を充す代名詞ぢや御座らぬぞ、無念無想の境界に大安坐して、無所得

心の往來でなければ到底娑婆即寂光淨土の快樂は求められぬぞ、其様な形式的木石のやうな眞似をして作佛を圖るなんて、それがもう殆んど出身の活路を虧闕して居るのだ、平素を離れて禪を外に求めんとするか、然らば汝は是れ眞の發心求法ぢやなくて、古代印度人が奇々妙々の仙人行を爲したるれを學ばんとする蒙者である、悟道豈習禪にあらんや實に是れ心身安樂の法門であるから、何も其様な窮屈の坐禪なぞせなくも可いぢやありませんかと、思ふ存分に大寂禪師を打撃した、流石の大寂黙つても居られぬから徐ろに口を開いて、成程承ればそれに相違は御座らぬが、然らば如何にしたら宜しかるべきか、其方法を御教示くださいと、や、眞面目になつたらしい、乃で南嶽今度は譬喩を擧げ親しく語り出した、何方法と申した所が別條は御座らぬが、「人の車を駕するが如く」車若し止まつて動かなかつたら、車を打つたら動かか亦牛を打つたら動かか（當時支那にては多く牛に車を挽かしたためか）サア此處一段の妙用を如何にせば即ち是なる、これはしたり仲々小六ヶ敷攻め方ではないか、禪を人に授くるに其様な理屈然たる事を並べなくも可い筈であるけ



れど、其處は一文不通輩を相手にすると事變つて、最早悟道に近い大寂に説く事だから、人相應の挨拶柄至極であるのだ、大寂其答への意外に辟易して、一言半口衝き入る事が出来なく、背汗止まず黒然對ふる術なかつたので、南嶽再び示さるゝには、汝坐禪を學ぶのか又坐佛を學ぶのか、若し果して坐禪を學ばんとならば、禪は決して坐臥に在るものぢやない、若し佛と作らんを學ぶのか、甚だれ前の爲し方が判明しませんぞ、元來禪と申すものは痛い膝を曲げて居るのが、坐禪では無く、智定相寄り、言行相待ち、表裏（内容と行動）相契合して、展轉滑脱妙用自在に爲し得らるゝが坐禪で、女にも避け、酒にも避け、肉にも避け、一切世間の煩累をも避けなければ、禪の作用が顯はれぬものなりや、それは野狐禪である、僞禪である、眞の靜慮端的ではない、禪は其様な形式的の飾物ではないぞ、誰か口を開いて禪を學べと言つた、平素の境遇を離れて禪の學ぶべき物が何處にある、故に承陽大師も「何ぞ自家の坐牀を抛却して、漫りに他國の塵郷に去來せん、若一步を誤らば當面に蹉過す」と仰せられて、自分銘々の脚踏下を照顧する事を懲懲された、又佛に作

らんが爲めに佛道を學ぶなど馬鹿げ切つた事が何處にある、佛は定相にあらず、是が佛でありますと指定される相が何處を探がせば出るか、

佛とは障子の引手峰の松火石袋に鶯の聲

其歌の通り、佛の相といつて別に定まつて居るものはなければ、退一步して仔細に其道を靜坐工夫して來れば、障子の引手にも峰の松にも將火石袋にも鶯の聲にも、佛の作用は及ぶものである。

佛身は法界に充滿して、普く一切群生の前に現す、縁に隨ひ感に赴いて周ねか  
らずといふ事無く、而も常にこの菩提坐に處し玉ふ

で、法界中には山川草木人畜蟲魚皆悉包有して居るのだ、故に無相にして而も銘々  
を離れぬぞ、小乘經には「三世實有法躰恒有」などあれど、此れはまだ小始終頓圓  
五教の穿鑿に齷齪して居る蟬噪哇鳴輩の言ふ事であるから、餘り重きを置かぬ方が  
可いであらう、乃ち佛と申すものは無住の法に於て取捨すべからずとあつて、盡十  
方界に充滿して常に無住のものだ、之れが煩惱であるから捨てぬければならぬ、之



れが菩提であるから取らなければならぬといふやうの者ぢやない、さるを汝は妙な考へから坐禪して居るが、若し坐佛せば即ち殺佛なりで、佛に作らうなど思惟すると、却て佛道の本領を失ふ罪人である、若し坐禪の相を別に求めて悟道の本懐を遂げやうなど思うたら、それこゝろ生を替え身を換えても、佛道の真理には達せられぬぞ如何だ和尚、拙僧の申した事が領會されましたか、と、懇々慈爺が子孫を諭す如くにして、其哀れなる窮屈の修禪者を、僅か一二時間の談話中に豁然大悟せしめたのである、大寂一層快味を得て其示誨を拜聴し、坐る醍醐と云つて甘水を飲んだか様の喜んだとさ、其評又例の如く

盡大地の人、請ふ所の一片磨瓢を看よ、牛と車に及ぶの喩を容れず、南嶽馬祖、鼻孔本正し、古之今之、徒らに父子の問酬を聞く、未だ父子密々の處を見ず、瓢を磨して鏡と作す、又何の辜負する所あらん、車を打て行かず、何の辜負する所

あらん、牛を打て行く何の辜負する所あらん、南嶽之を説示し馬祖之れを得悟す、亦復何の辜負する所あらん、正使南嶽一句を説かず、馬祖脱體不悟なることも終に辜負すること無し矣、是れ何の道理ぞ未だ胡亂せず、時猶鹽醬を欠かず、

此評は別に講述する迄もなく、指月和尚が南馬兩者に大の同情を寄せて、馬祖の坐禪も一念悟道を離れぬから辜負する處なく、辜負とは悟道の本旨に違はぬとの義理である、南嶽の馬祖を説示して開悟せしめたも、決して禪の本旨に戻らないので、所謂意氣投合證契即通ぢや、たとひ南嶽一句を馬祖に説かなくも、馬祖脱體不悟なるも、共に辜負抵觸する處はない、脱體とは其儘との事で、乃ち馬祖は南嶽に與つて悟らなくも、其儘にして佛道の極妙を知り得る底の人であるのだ、然れども幸にして馬祖は南嶽の訪問を得て、錦上に錦を添へ美に加ふるに裝粧を以てしたから、此處で始めて眞善美の三者を圓滿に具有されたので、指月和尚が最も熱き多恨の情



と、流れ瀧なす多涙の思ひとを、御自身が證得の境界に比較せられ、て、あゝ其際其時の先祖は、恰も吾人が健康の身にして、何とも形容する事の出来ぬ、電氣にでも觸れた様に、喜び溢れて、甘露水を飲まるゝ如く愉快であつたらうと遙に想を當時に及ばされて、獨其理想を發展されたのである。

### 休相國應諾の話

黄檗和尚初め黄檗より衆を捨て、大安精舎に入る、迹を勞侶に混して殿堂を掃洒す、時に裴休相國寺に入りて焼香す、主事祇接す、因に壁畫を觀て乃ち問ふ、是何の圖像ぞ、主事對へて曰く高僧の眞儀、公云はく眞儀觀つべし高僧何處にかある、僧皆對ふること無し、相國曰く此間に禪人有りや否や、僧云はく近ごろ一僧有り寺に投じて役を執り、頗る禪者に似たり、公曰く

請じ來つて詢問し得べきや否や、是に於て遽に蓮師を尋ぬ、相國公之れを觀て欣然として曰く、休、適に一問あり諸徳(皆人)辭を吝む、今請ふ上人代て一轉語を酬いよ、師云く、請ふ相國問を垂れよ、公即ち前問を擧ぐ、師、朗聲に相國と云ふ、公應諾す師云はく什麼の處に在る、公當下に省有り、髻珠を得るが如し云はく吾師眞の善知識なり、再請して開堂せしむ」

此段は亦前話に勝れて妙味がある、しかし高僧で初門の人や俗人にはどうか、聊か氣遣はるゝ様な感じもするが、意義を餘り遠くに逐はずして、少し研究したら、亦大に近きに此問題の發端を見出す事が出来るであらうから、左様心得てもらひたいのである、黄檗禪師は當時名聲噴々の高僧で、支那四百餘州の學者を皆一喝三十棒の下に濟度された人である、多年黄檗山に住して參禪の門下生を養はれて居られたから、其山號を名として、黄檗和尚といつたのだ、和尚或る時其養成して居た門下



生と離れて、大安精舎と云ふ寺に入り、多くの小僧と同生同死して大に空とぼけて居られた精舎とは寺院と云ふ異名で、僧侶が修行する處をいふのである、乃で其多くの僧侶と打ち混じて本堂の掃洒をして、居られた(當時は土間なりし)時に裴休の相國が參詣にやつて来て、本尊様に焼香禮拜をされ、亞いで主事の應接もあつて、そろ／＼茶話が始まつて来たのである、(相國とは今の國務大臣、主事とは寺の副住職)、所で談話が益々佳興に入つて非常の愉快を相國は感じて居た、すると其坐席の壁に畫が描いてあるから、見るともなしに眼に留つたは高僧の肖像である、乃で公、是は何の圖像であるかと問うた、傍に居た僧、それは高僧の眞儀であります、さうか、然し乍ら此處に一の疑問がある、餘の儀でもないがかうやつて高僧の肖像は現に觀らる可きも、觀られぬものは高僧の心靈ぢやが、其高僧の心靈は今何處にあるやら望らくは説けと迫つたけれど、多くの僧侶は是れに對して満足の答辨が出来ぬと見えて、誰も黙して云ひ得られなんだ、此處一段の商量はまづ側面觀が願ひたい、相國は正しく靈魂滅不滅の分際に彷徨されて居たのである、之れを例して申せ

ば或る親孝心深き子供が、父母の墓に詣でたる因み、扱て自分は斯く香華燈水を具へて、父母の墓に捧げるのであるけれど、全体心靈其物は此墓にまします者か、將又十萬億土にまします者か、思へばねもふ程雲煙濛々寸前辨する事が出来ぬ」

今は只名のみ残てなき人のあけくれ染めし水くきの跡

あ、怪しきものは人生である、生住異滅の四相畢竟何の作用ぞ、眞に是れ裂帛の慨斷腸の情、感窮まり理盡きた時、誰か又生死問題の解決に蹉跎せぬ者やある、經に曰く、

生れ往き生れ往きて六趣に輪轉し、死に去り死に去りて三途に沈淪す、生を受けし我が身も、生の由て来るを知らず、我れを生みし父母も死の所去を悟らず、過去を顧みれば漠々其始めを知らず、未來を望めば濛々終りを見ず

と、何たる厭世悲觀の言の葉ぞ、此處に至つて諸君如何に之れを解決して安心するか、葬祭的佛教を奉ずるものだから、其語る處までか悲哀であると誤想する勿れ、亡き父母に對して報本反始の情浮んだ時、誰しも起るべき當然の疑問である、で、相



國公も當時此様な苦悶が、人知れぬ胸裡に蟠屈して居られたに相違ないと見える、されど塵勞や黨侶（醉生夢死の僧）のみで、満足どころか丸つ切り談の相手になる者が無かつた爲め、閑話休題、相國曰く此寺に誰ぞ悟道上の談をして呉れる様の人是有るまいか、と、百尺竿頭一步を進め問うた、すると傍僧の答ふるには、イヤ無いでも御坐らぬ、近頃何處の和尚だか來て當寺の事務を取つて居りますが、あの人なら多分れ前さんの話相手にもならうし、且つ平素の一舉一動を窺ひますに、頗る禪者に似て居りますと云うたので、公も心竊に喜びつゝ、然らば面會を請うて教を受ける事が出來やうかと尋ねたので、早速其趣きを黄檗の運和尚に通じた、處が、和尚も異議なく承諾して面接した、斐氏欣然是に禮しや、時經て言はるには、扱て和尚様れ前さんに問う事がある、先刻も外の和尚方に質したけれど、遂に應答して下されなんだで、今上人代つて其返答が願ひたい、と、暗に其主事等を愚物なりと云はん計りにはのめかした、はあ左様か如何なる事が存せねど、御質問とあらば御遠慮なく話なさいとあつたので、公即ち前に語つた高僧の眞儀圖像を持ち出したのである

黄檗其語の未だ終らざるに、大聲朗に相國と怒鳴つた、公亦應じてハイと返事をした、黄檗更らに聲を勵まして高僧眞儀と其心靈とはれ前さんの返事された其處にありますどうだ相國分明了也かね、流石の斐氏成程と合點はしたが、徹底大悟は還に遠しの様である、されど公は和尚の言下に多少得る所があつた事は、辨明を要せずして明かである、故に髻珠の寶冠を得たかの如く喜ばれ、吾師こそは眞の善智識である再び請ひて法を聞かんと禮謝された、實に之れ看破了也である、

黄檗喚び、休應ず、當面に省發する尙ほ只入門の小徑なり、若し堂中事に至ては、更に參すること三十年にして始めて其眞を知らん、何ぞや人の渠を識得する無く、當時彼れが眞儀觀つべし高僧何れにか在ると道ふを見ば、指て云はん眞儀觀つべしと斐氏若し其人ならば竟に指上に向て小計を作さず

此段は斐氏が頗る幼稚であつた丈、其れ丈亦指月の御批評も案外冷淡である、假令



黄檗の爲めに裴氏幾分か得る處あつたとしても、まだ悟道の方では小徑に入つた丈である、況んや證得契合の處に至つては三十年も修めぬれば駄目だ、裴氏若し其人であつたならば像を指して心靈何處にあるなど決して問はれぬ筈ぢや、と、之れに依つて是を觀れば、裴氏は未だ非常に坊ぢやんで、黄檗運和尚の談と不釣合であつた事は明々白々である、要するに前にも述べた如く此問答の出逢を肉躰と靈魂としたは聊か異例の配置でもあらうけれど、眞儀即ち肉躰(圖像)なりと見、高僧即ち心靈なりと見て、是れを縦横に活用する敢て不可なきは勿論のこと、亦此異例なる配置の故を以て、此處の眞趣旨を傷くる事は毫頭ない、舊式提唱の模型に固執する頑迷連は、時に或ひは其異例を笑ふか知らぬが、其様な事に頓着などせぬでも可い、

### 青原答西來意の話

青原和尚因に僧問ふ、如何なるか是れ祖師西來意、師云はく恁

麼にし去れり、僧又問ふ近日何の言句かある、師に一兩則を乞ふ、師云はく近前來、僧近前す、師云はく分明に記取せよ

青原和尚は達磨大師より七代目の人で、即ち慧能の法を相續して曹洞宗の源泉と爲つた人である、或時一僧あつて和尚に問ふに、如何なるか是れ祖師西來意と問うた乃で青原小面倒臭く爲つたから、其様な祖師西來意なんて何處へか飛んで了つたわい、と、理由もなく逐つ拂ひ策を取られたのである、で、其僧二の口が開かぬで今度は何か珍らしい談でもあつたら、ニツ三ツ聽かせて戴きたいと請うた、處で青原聲を勵まして云はるゝには、まづ近くな寄りなさいさらば何か話さんと答へられたから、無遠慮に其僧も和尚の身近く進んだ、まあ拙僧の申す事を能く聽きなさい、全躰れ前さんは脚下の眞暗な人と見えるな、其證據には法や佛を遠方に計り求めて即身即佛の明がない氣の毒の事なりと、聊か衝き入られたものと思へば可い、想ふに此段は不釣合の商量で、青原和尚も眞面目にならない、恰も帝國大學の教師に尋常小學校の一年生が哲學談を試みたと同様なのであらう、



青原亦是の如く道ふ、此僧祇た他を求むることを知つて、未だ實に近前せず、分明に記取せよ牛頭を按して草を喫せしむ、當面の語何ぞ太だ險なる  
指月の評、予の見解とは聊か趣意は異つて居るけれど、大體に於ては些の誤解はない、牛頭を按して草を喫せしむとは經文の譬諭を擧げて、報應<sup>◎</sup>二身の作用を引かれたまでの事である

### 香嚴擊竹大悟の話

鄧州香嚴寺襲燈大師、其性聰敏、瀉山の會下に在つて多聞博記す、瀉山一日云はく、汝が尋常の所説盡く是章疏之中より記持し得來る、吾今汝に問はん汝生下して嬰兒爲りし時、未だ東西を辨せず此時に當つて吾れを説て看ん、師下語し竝に道理を説いて併せて相契はず、又平生集る所の文字に於て尋究す

るに總て此箇の相契の時節無し、乃ち嘆じて悲泣し、諸の文字を將て火を以て熱却して乃ち云ふ、我れ此生敢て禪を會する事を望まず、且く山に入つて修行せん、便ち武當山に入る、忠國師が舊庵の基に庵を卓す、一日道路を併淨し礫を棄て竹を撃つて響く、時に忽然として大悟す、乃ち頌有り云はく

一擊忘<sup>ス</sup>所知<sup>ヲ</sup> 更不<sup>ニ</sup>自修治<sup>ニ</sup> 動搖揚<sup>ニ</sup>古路<sup>ヲ</sup> 不墮<sup>ニ</sup>悄然機<sup>ニ</sup> 處々無<sup>ニ</sup>蹤跡<sup>ニ</sup>  
聲色外威儀 諸方達道者 咸言上々機

瀉山聞いて曰く此子徹也

と、香嚴寺は大明一統志に鄧州の西北白崖山といふに在つて、山中常に香風吹き止まず、靜寂機に適して道者皆此處へ集ひ來る、乃て香嚴の寺號ある所以ださうちや襲燈大師は其寺の住職で、當時の禪僧中でも名聲鏘々の人と聞こえた、終には大瀉禪師の弟子となられて、正法宣傳の一方に盡瘁されたのである、大師其性聰敏とあるを



以ても、爲人を知るに足らう、師會て瀉山の處にあつて、聰敏の性に搗て、加へて非常の勉學をされ、夜を日に繼で孜々怠らざる年多かつた、瀉山も師の非凡なるを一方ならず喜ばれ、或る時師に語らるゝに、お前が常に自分と話す事を聞くと一から十まで總て文章や經疏からのみ持ち出して來て誠に五月蠅い、何とか外に目覺しい所得は無いかの、其様な文字の穿鑿に計り營々役々として居ると遂に心靈の慰安を得ぬで往生するぞ、人生字を知るは憂患の始めで、人生を悲觀するも將樂觀するも、要するに文字が主動力となるは、實に争ふべからざるものであるのだ、學者といひ賢者といひ、知者と稱せられて居る中は、未だ眞個の安心決定でない、汝は將に教界の柱石、禪門の鎖鑰と爲るべき器量と責任がある、水の流れと人の行末何時無常迅速の使命が來ないとも限らぬぞ、あゝ人生は塵のみ、萬人塵よ、出で、塵に歸る、汝も亦是塵の一芥である、早く東西周流の旅行を止めて、本來固有の佛性裡に還來すべきである、と、將に之れ老爺の心情轉た切迫せんとするの時、襲燈亦答ふる術なきである、瀉山再び師を詰りて問はるゝには、汝此世に生れて嬰兒た

りし時、東西の方向も辨せず黑白是非の判断も出來ない其當時に返つて、暫らく拙僧が爲めに語る所あれ、さらば謹んで拜聴しませうと云うた、是れ仲々な安い事ではなからう、荒誕無稽の昔譚に憧憬して居る愚者ならば、或ひは靈夢で託されたと附會も出來やうが、生理作用で形造られた人間は、其様な馬鹿な事が如何して出來やうぞ、サハさり乍ら出來なくも不味くも、我慢でも一ツやらかして見たいと、無徹方の妄念は誰れにもあるから、襲燈大師だとして矢張人間ぢや、劈頭第一に降參するも、何となく口惜くもあるから瀉山の垂れた針に釣られつゝ、今日ならばまづ原素とか云ふ根本より固體液體空氣などまで分拆し、夫れより進んで煩惱妄想の根本、即ち起信論に謂ふ、忽然念起、無明、三細、六塵、五位、六染等に説き至つて、更らに吾人の論議しつゝある様な、安心とか決定とか心靈とか救主とかに及んだに相違はなからうけれど、之れが即ち文字上の淺薄な論量商議で、思議界の生理作用を煎じ詰めれば、五蘊皆空といつて我等が眼に物を見る、耳に聲を聞く、鼻で好惡の香を嗅ぎ、舌で甘鹽苦辛の判断を爲し、身に觸るゝ硬軟冷暖を知り、意に醜美の感念



を分たんとするが如き、之れは外から刺戟して内容を動すから六根と唱へて、煩惱妄想を構成する媒介となる、それに喚起されて呼應するのが、六識と稱して色聲香味觸法である、眼に映じて醜美の感を起すは色あるが爲めで、耳に響いて歡悲の感を起すは聲あるが爲めである、鼻に入つて惡善の感を起すは香あるが爲め、舌に甘苦の感を起すは味あるが爲めである、身に硬軟を感じるは觸あるが爲め、其等五者の性質を明知して、看んと欲する者を觀、聞かんと欲するものを聞き、嗅がんと欲する者を嗅ぎ、取らんと欲するものを取るは、皆是意識の作用からである、故に佛教には六根六識と稱して、眼耳鼻舌身意は其原素として有るのだ、亦外に四大と申し地水火風の話もあるけれど今は其證議に及ぶまい。只吾等の相があり、法體恒有と世を觀じつゝ、在る間は、未だ大悟徹底の人とは云はれぬ、斯く云はゞ人或ひは疑ひもするであらう、現に我等は日々行動云爲して、伸縮進退自由自在である、眼あつて萬象を映し耳あつて能く萬聲を聞く、何處に無相である皆空であるか、と、之れ最も迷執の甚しきものである、何故かと云へば我等の相は四大假和合と唱へて、地

水火風の四つが假りに相寄り相和して、一の物體を爲して居るけれど、云ふ迄も無く永遠に不朽のものではない、既に永遠不朽の者でないとしたら早晚滅しなければなるまい、

引きよせて結へは柴の庵なり解くれは元の野原なりけり

で、一朝若し此相が滅して、骨は土に化し血液は水に飯り、温熱は火に飯り呼吸の息は風に戻つた時に、是れが私の姿であるといふ相が何處に存してあるか、之れ無相であると云ふより外に講じ様もないぢや無いか、それを何時迄も持續されるものとして不義の愉快や人倫の破壊者となつて、而かも猶覺醒が出来ぬのを救はれざるの凡夫と云ふのである、無相なりと觀じて真空の理を明知し、真空なりと觀じて妙有の神光を悟るのが、實相無相微妙の法門である、此理を極卑低に言ひ顯はせば、鐘が鳴るかや撞木が鳴るかで、如何に能く鳴る鐘でも鐘計りぢや響きは出ぬ、如阿に鳴らしたくおもうても撞木計りぢや音は出さぬ、鐘と撞木とが相合してゴホンと鳴り出すのぢや、是れ亦響きは常住のものでは無い、時に鳴るけれど音は何處にある



故に音の無くなつた時が即ち真空で、無いかと云へば衝きついたり鳴る、之れ即ち妙有である、四大五蘊の事とは聊か異なる様だが、無相有相畢竟空なりと悟つた時、亦この真理の作用を發見せなければ、一道の神光は百年千年万々歳を経ても映じ来るまい乎、何だか談がトンチンカンに爲つたが、魏燈大師も慥に有相の研究に日も又足らざる人であつたと見える、乃で瀉山の請に餘儀なく饒舌り出して、種々の道理や理屈を以て説き立てたけれど、毫も佛敎の本旨には契合して居らぬ、本文に併せて相契はずとあるは、證契即通の了得がまだ出来ぬとの事である、愈々躍起になつて悟道の見識を働かせやうと思つても、益々自失茫然とするのみで眞實の活作計は爲されぬ、で、今度は平生集むる所の文字より、種々に研究もし工夫もしたけれど、總て證契即通の時節が近く来ぬ様である、古來から云ふ如く門より入る者は家珍にあらずで、此箇の相契の時節無しとは、徹底大悟の境界に達せられぬとの意味である、乃で大師も非常に悲嘆涕泣されて思はるゝには、あゝ文や知や將經論等は悉く自己本具の理想を縛する繩である、多年窓下に孤燈と伴つて來たは、全く世法

兩執の陋見からなんだ、此様なものに何時迄拘泥して居た處が、生死煩悶の繫累を寸断する事は出来ない、と、宿年鍊磨した般若の智劍で快、哉心事固着の迷雲は一掃されたから、忽然起つて從來好箇の伴侶と爲したる章疏經論や文典書籍等を悉く火に投じて燬して了つた、あゝ是れで胸間光風露月の往來するが如く、誠に明皓々白皚々の感ありだ、と、云ふ處あら大師潜然嬉れし泣きに泣いていはるゝには、自分は今世に於て敢て悟道するなどは毫も望まぬ、只山へ入つて佛道を修行しやうと、便ち武當山の忠國師が庵の舊蹟に草庵を特立して、無上乘の快事とせられた、山に入るは山を出でんか爲めである、蛟龍淵に潜んで風雲を待つも同じ、大師空とほめて酔生夢死の諸人に混するも、應て其酔生夢死者を覺醒せしめんが爲めである、大に伸びんと欲するものは、大に亦屈するを要す、捍然席旗の翻靡する當に近きにあらう、大師も仲々甘酢では喰へぬ人である、法欲の野心は飽迄も旺盛で、絶學無爲の閑道人たらしとする處、亦頗る興味あり氣である、斯くて大師の悟道は非常の速力で猛進したものと見える、文字や知解や經論に汲々乎としたは、此時機あらん



を豫期するのであらう、後世末學の吾等も又大師に倣ふべき當然の順序であるのだ  
大師一日庵前の道路を箒で掃除して居られた因み、種々の礫石が道端にゴロ／＼し  
て在るから、掃除するに大變の邪魔になるので、其礫を一々竹箒へ投じられた處が  
其礫石が竹に的つてパツチと響きを出しました時、端無くも大師は云ふに言はれぬ  
感に擊たれて、豁然大悟されましたとあるが、實にさもある可き筈であらう、讀者  
よ、大師の此舉が一種發狂じみて居ると思ひ玉ふな、亦予が此舉を稱讚するから前  
述の旨意に背反したと早計したまふな、誰しも同様の疑問にして解決されなば、必  
らずや大師と同一の感あるべきは當然である、大師も非常の苦心と辛酸とにて、大  
悟發明の時節を待ちつゝある際、此機に遭遇して多年の宿題、コロリ現成したのは蓋  
し其門に遊ばぬ人達は判るまいが、大師は非常の愉快を感じられたに相違はない、  
乃で談の序に申すが、和尚は和尚で平素の要求があらうし、小僧は小僧、旦那は旦那  
無いと思ふが、其要求を終局の目的地まで到らせんと希望したら、まづ放心する事

を慎まねばならぬ、放心とは換言せば油斷である、諺にも油斷大敵と稱して、油斷  
程恐ろしい者は無い、之れが害毒の及ぶ範圍は仲々廣い者で、人心の腐敗するもの  
道義の衰頹するもの、一家の財産を蕩盡して悲鳴を擧げるもの、愚より愚に陥り蒙り  
り蒙に沈むもの、皆其原因は放心の二字にあるのだ、例へば放心するから馬鹿も伶俐  
になれば、鈍者も賢者と爲れぬのだけれど、若しこれに反して下婢が或る富豪の奥さ  
んに成りたいと、斯様の念が平常例も斷絶せず、始終其念を相續して所謂奥さんとし  
て耻かしからぬ品性さへ造らん事に注意して居たら、必らず其時節は廻り來るので  
ある、總てものゝ効が擧がるのは、皆平素の心掛けが専一で、愈々事業成效と云ふ曉  
になつたら、夫れこそ飛び立つ程嬉しからう、今製燈大師が磔竹響中に豁然とし  
て大悟せられ、裕欄迷窟を一時に脱出して、明皓々地に遊ばれたほどの様に愉快で  
あつたかは、蓋し門外漢の餘人はまづ／＼沈黙すべしであるのだ、故に大師は其當  
時直ちに筆を取られ、前記の奥秘を歌はれた、コは別に煩はしく述べんども、多少  
文字の素養ある人は能く解し得られやう、乃で瀉山禪師は大師が其事有りしと、及



ひ其頌偈とを聞かれて、あ、彼はもう悟了徹底と見えるな、感心々々と非常に賞讃されたとき、指月の御批評例によつて

人生れて小長、識不識あり瀉山の問ふ處此に在らず、但た彼れが自ら證入せん事を要す、有語無語を以てせざれ、當陽に未辨の時を指出す、後時擊竹の聲を聞きて悟り、乃ち偈を述べて今問ふ嬰兒未辨の時と、是の時に幾箇の香嚴有りや、若悟道と道は、郷關萬里、香嚴を見んと要すや、擊竹一聲

本文に、吾れ此生敢て禪を會することを望まずとあるは指月が、若悟道と道は、郷關萬里と云はれたに相照應して、大師の契合點が明かである、何となれば禪を會すと云ふも將作佛を圖ると云ふも、皆禪旨に契つた修行ぢや無い、修證二ならずと云うて、平素の修行が即ち其儘證得で、證得とはお悟りの義である、其悟りは平素の修行と少しも相乖離して別に存する者ぢや無い、故に無所得の往來である、無所得と

は欲せざるの義で、即ち法執と云つて眞理を外に求めんとするから、愈々お悟りと遠ざかる事となる、吾人が手の舞ひ足の蹈む處悉く眞理の命する範圍内を云爲動作して居るのぢや、只れ悟りの境遇と迷執の境遇とが、甚しく懸隔して見ゆるのは例せば此世を樂天的に送る者もあれば、亦厭世的に送る者もある、で、此に始めて境界の相が出来て、悟相とか迷相とか聖人相とか、凡夫相とか、其他種々無量の別社會を、自分銘々其の胸中に描き出すと云ふものぢや、さらば其胸中に描き出す總ての社會は、皆悉く顛倒妄想等の相で、所詮は何の効力もなからう、是明らかに有所得心の然らしむる所だから、一の迷執たるに相違ないのである、空中樓閣を描けばとて何の得るものがあらう、水上文字を書いたとて何の効用が現はれやうぞ、今佛道を修行して開悟を願ふ者も其れと同様で、佛にならうと思ふて修行して居たからとて、佛の相と云つて外にあるものぢやなし、是れが佛に作つたと云ふ時節がどうして來らうぞ、迷執を脱して大悟せんと工夫研究を凝らせばとて、悟相なんかと云ふ相が別に立てられて居るものぢやなし、如何して我れ此の如き悟相を得て安心



決定したと云ふ時節があらうぞ、之れ禪を修する者の用心肝要な所である、右様の迷途を求めるから郷關萬里と自分が自分で、自分の心を異邦異域へ持ち出すのぢや豈悲しき妄想の修養者に非ずやだ、然れ共大師は幸にして瀉山が説示した時に、早くも修證は一如である、心佛及衆生是三無差別と頓首し得たから、禪を會するを望まない、只山中に此道を修行して其時機あるを待たれて、遂に擊竹聲中に無限の福音を聞かれたのは、實に活禪道者の本面目をし示し得て餘り有る好箇の樂天家である尊し々々

### 南泉平常是道の話

趙州和尚南泉に問ふ、如何なるか是れ道、泉云はく平常心是道師云はく還て趣向すべきや否や、泉云はく向はんこ擬すれば即ち乖く、師云はく擬せずんば又争でか是れ道なる事を知らん、泉云はく道は知と不知とに屬せず、知は是れ妄覺、不知は

是れ無記、若し眞に不擬の道に達せば猶大虚廓然蕩豁たるが如し、豈強ひて是非すべけんや、師言下頓に立旨を悟る

趙州和尚と云へば禪門の巨邁にして、此門に身を投じたらん程の人は、皆悉く熟知せる筈である、達磨大師以來禪宗の歴史に一異彩を放ちたる人は趙州禪師である、其一生間に於ける逸事奇話と云つたら、仲々數へ切れぬ程澤山にある、若し此禪師を今日の人に還して濟度の泰斗としたら、各宗の僧侶は等しく顔色なからう、然れ共此人幽冥にあつて不飯の客たられたから、吾人の爲めには寧ろ幸福の最上とも云はうか、南泉禪師も其當時は釋迦達磨も一喝した位の人で、まづ禪宗では有數の高僧であつた、故に趙州も其高風を欣慕して道を尋ねられたのである、然れ共老孔二子の如く、始めは孔子も老子に就いて道を問はれたから、老子の人物たるは知れ切つて居るけれど、惜哉、老子聖公其人の理想は、孔子程の旺盛なる歡迎をされぬのは、明らかに處世方針を取るに下手であつたと見ゆる、南泉趙州の兩師に於ける、亦老孔二子と同様の感あるまいか、趙州は南泉に依つて大に得る所あつたから、ま



づ師匠さんとして南泉を敬はねばならぬ、然るに趙州獨り好評を恣にして、南泉の禪甚だ振はざるは聊か不思議である、然れどもコハ其人の機用が時の人心に適合すると否とに依つて自然の結果を現はすものなれば、誠に餘儀なき次第であらう、それは左様であるが南趙好一對の人物だから、此間の問答は大に咀嚼すべき妙味がある、此段の南泉が趙州に教へたる趣きさへ領會されたなら、予が前々より述べ去り述べ來つた、所謂平素を離れて禪の學ぶべきものが何處にあらうかと云ひし事が分明しませう、聞かれん人はまづ沈思默想を望みます、或日趙州が南泉禪師の許へ參じて、サテ禪師悟道と云ふものはドンな者でせうねと問はれたのである、處が南泉靜に答へて平常心是道であると軽く受け流した、趙州更らに言ふには然らば趣向すべき道がありませう、南泉曰く、向はんと擬すれば即ち乖くで、否々平常心是道と云ふのに趣向すべき道や、亦是擬議と云つて、悟りの學びを計るものが何處にあらうぞ、夫れを飽く迄擬らんとすれば、れ前は悟道の本旨に乖くよ、れ前も大層豪物だと思つたが、案外馬鹿を吐くな、困つたものぢや、是れ聊か冷笑の口調だけれど其

口調の中には、將に悟りの許を與へやうとの眞實も胚胎して居る、乃で趙州此和尙仲々人を瞰下して居るな、好し々々急所の一針グツと一本刺し込んでやらうと云はん計りの身構へ、成程禪師の仰せらるゝ事も一應御尤かは知らぬけれど、若し道を得やうと云ふ擬議がなかつた日にや、ドウして是れが道であると知る事が出來ませうぞ、是れ自分丈では大に南泉を衝き倒して了つたかの様思ひもしたけれど、ドッコイ南泉禪師は其様な虻の如き理屈には、虱が毛の上へ這ふ程も痛さは感じられぬだが、幾分の受け答へはあつたに相違ない、コノ奴仲々理屈で吾れに飛びかゝる、稍々見處の有る者とは思ひつゝも、俄かにウンとは許されぬで、待て々々言ふ事を待てよ、れ前は慥に「不擬又爭知是道」と云つたな、何故に其様な迂遠な事を云ふのか、道といふものは知とか不知とかに屬するものぢやない、知は元來妄覺であつて、迷ひの一つである、其迷ひの知に伴つて道を求めなば、迷より迷を重ねるも同様で畢竟得る所は無い、不知は是れ無記だから名づけべき相がない、故に摸索不着ちや御座らぬか、既に摸索不着であるから擬議されぬ事分明了也である、之れに



反しし若し眞に擬議の及ばぬ道に達して御覽なされ、それこそ大虚空の廓然として蕩然たる如き社會を胸中に形造る事が出来る、之れを是れ思はずして強ひて玄旨を遠方に求めたら、誰も指導して呉れてのない、異途多岐の原野に彷徨する迷者となるぞ、故にそれ計りは是非すべき性質ぢやない、これ道、趙州さんまだ合點されぬか如何か、聞き終る言下に趙州は道本圓通の玄旨を捕へたとのことであるが、さも有るべき筈であらう

上天の載、嗟夫高し矣、後に墻外の道茲に通ず趙州寐て寤れば、此人生たり禪宗の玄旨を味はんと思はるゝ人は、まづ此一段の風光を平素に工夫して、南趙兩師が如何なる見解を有しつゝ、當時の佛教界に異彩を放ちしかを研究し見よ、さらば大に又有志の修道上に便益あらう、指月の評箭鋒相柱ふの思ひがある、上天の載とは詩大雅の文王篇に、「上天の載聲なく臭なし」とあるを引かれたので、寐て寤ればとは煩惱妄想等の迷執を一掃したとの事である

### 長沙莫妄想緣の話

長沙和尚、因に竺尚書問ふ、蚯蚓斬て兩段と爲す兩頭俱に動く、未審佛性阿那箇頭に在るや、師云はく妄想する莫れ、書云はく動くこと奈何が争はん、師云はく即風火未だ散せざるを會せよ、書對ふる事なし、師卻て尚書と喚ぶ、書應諾す、師云はく是尚書の本命ならずや、書曰く即今の祇對を離卻して第二箇の主人公有るべからず、師云はく尚書と喚ぶ、今上と作るべからず、書云はく與塵ならば總に和尚に祇對せざる、是弟子が主人公なること莫からんや、師云はく但だ祇對のみに非ず老僧に祇對せざるも、無始劫來より是生死の根本、乃ち頌を示して曰く、學道の人眞を識らざることは、従前識神を認むるが爲



めならん、無始劫來、生死の本、痴人喚んで本來身と作す、

此處は仲々面倒な所で、古往今來禪門幾多の善知識方が、何れも皆其解決に苦んで居るのだから、平凡なる觀察や研究では、至難の上の至難で幾度聞いて見ても、概して大同小異の提唱のみちや、況んや予の如き淺見薄識な者の、どうして此難問題を満足に話されやうぞ、深きは諸君の研究に一任し、まづ其概略を言説に彰はさんか、サレド前にも詳述した如く、凡う佛敎中で何が一番研究し難いかと云へば、禪旨の提唱程困難な者はない、天台眞言淨土日蓮等の各宗は、依經分宗と稱して各々依り處があつて、其宗旨々の教義を指導する事が出来るけれども、禪宗は依經分宗や依宗分經など云ふ所依がないから、玄旨を捕へてお談が出来ぬ、故に佛心宗とか佛祖皮肉の骨髓とか其他佛法の總府であるとか云ふ様な名稱があるのぢや、で、今、即ち諸子に向つて聊か禪の旨義を陳述するも、早既に第二第三の俗諦門に下つて居るのだから、勤めて文章の句義や用語に涉らず、専ら其本旨のみを概括して談す考へなのぢやから、其邊は豫め承知をして戴きたい、或る時長沙和尚の處へ竺の

尙書が訪うて來で、漸く談が進んで心の有りかを叩ひた、竺は姓で尙書は官役、吾國の文課主頭或ひは秘書官に相當するのだ、乃で尙書サテ和尚さん、貴僧は近代の禪定家として誰知らぬ人もない位のね方だが、まづ此處で例して見ると今一正の蚯蚓を切つたとしませうか、然らば斷じて兩段に爲る事は必定である、さうして其兩頭共に動きますが誠に奇妙です、と、云ひ掛けて更らに未審しきは佛性即ち吾々の魂魄ですが、斯かる際には其佛性と云ふ者は何處に在るでせう、左の頭にあるか右の頭にあるか、大に疑はるゝ次第でありますから、何卒御教示を願いますと問ふたものであらう、然し乍ら此に蚯蚓とあるから、全く其蚯蚓を兩斷したのであると思へば天地懸隔の間違ひが出来るぞ、悟り了れば本來無一物と云ふ宗旨に、何の蚯蚓があり何の兩頭がある、想ふに蚯蚓とは二つ無き心靈を指したので、兩頭とは煩惱と菩提とを兩分したのと見れば大差あるまい、既に禪旨は無一物であるから、之れが菩提ぢやの是が煩惱だのと云つて、事更ら煩はしく論議商量すべき必要は毫もないのだ、夫れを強ひて佛性が有るは無いはと、燕雀の鳴噪する様に狂ひ廻はるは、



或る發狂者が自分の家を飛び出して、遂に其飯路を失つて何處とも無く、迷ひ歩くと同様で歩けば歩く程愈々困難と飢渴とを感ずるのぢや、今禪門に身を投じて悟道を得んとする者も、或ひは思ふ其發狂者と同一の歩調を取る者多かるべきかと、何故なれば吾等が眞如の佛性は、處として明暗なきもので、一月萬水に映じ萬水一月を映すか如く、澄み渡れば盡天盡地皆皓且明である、高きは芙蓉の峰頭より低きは田野谷底まで、從高至低上一貫、白雲万里一眸五大洲、皆悉く照り添ふ者が譬へて見れば吾等が有せる佛性即ち靈性である、誰か月に明暗照不照あると云ふ、水や空々や水ともみえ分かすかよひて澄める秋の夜の月

で、元よりの靈性は實に斯の如きものである、靜かに吾人が所謂虚心平氣と云ふ態度を取つて深く深く考へた時にや、トテモ々々々言象に現はす事の出來ぬ程善い心地がするは、予の云ふ迄も無く其感あつた人は分明であらう、

雲晴れて後の光りと思ふなよ、もとより空に有明の月

此れは悟道の歌だが、眞に然うである、我々は元より果滿圓成の釋迦文佛と、寸分

も異らぬ智慧の月と徳相の光りとを有して居るのだけれど、誰も然りと思つて居る者は一人もないかの様に見受けられる、夫れが證據には吾れこそ慥かに佛性がある、昭々として味ますべからざる智慧徳相があると、斯の様に感じつゝ、有る人はなくて、何れも皆極樂を十億万里の異域に求め、解脱了得を神秘的變路に欣へつゝ、有るぢやないか、斯く爲つて見ると如何しても一種の疑團が結ばれやう、何であるか、照り渡る其月光を、異方極樂國欣求を、サテは不思議である合點がならぬ、如何せば是ならんか、釋迦に相談せうか、阿彌陀に縋らうか但しは地藏薬師に訴へやうか、さらば極樂も見られむ、迷相とは何ぞ悟道とは何ぞ、往生とは何ぞ、成佛とは何ぞ、非常な疑ひが無量無邊に湧出して来る、成佛がしてみたい、悟つてみたい、佛陀となつて相好を求めたい、菩薩になつて救世の旗を翻したい、煩惱の炎火裡を逃れて無上乘の彼岸に達したい、山へ遁れて安心の種を植付けたい、世欲を斷絶して白雲に跨つてみたい、神通力を現はして衆人の膽を抜いてみたい、如來になつて自から光明でも輝かしてみたい、此の如きは畢竟迂愚の甚しき者で、れ先き眞暗な大なる妄



想である、故に尙書に答へて莫妄想と一喝されたのぢや、何にね前は馬鹿を云ふのぢやい、蚯蚓とか佛性とかの相が何所にあるか、無相にして而も實相なるが佛性の佛性たる所以である、故に相對的の境を築かば、益、眞如佛性の郷里を遠ざかる、遠ざかるから佛と凡夫との懸隔が生じ、煩惱と菩提との等差が生ずるのである、元より曇りなき眞如法性の月が、何故朦朧として照らさぬのか、开は誰しも云ふ如く煩惱とか妄想とかの迷雲が遮るからである、然るに尙書また和尙の一喝が了解し得ぬで、愈々迷悟凡聖の相を逐はんとするは、恰も猿猴月を捉ふるも同様ぢや、貴僧は左様頭上から怒鳴られるけれど、如何しても其迷とか佛性とか妄想との兩頭がビク／＼動くぢやありませんか、私は妄想で問ふのでは無い、現に争はれぬ歌々の事實が、我々其の平素にあるから據御座りません、眞如佛性の蚯蚓は原是れ只一筋、因を断ち末を逐うて忽然として悟迷の相途に現はれる、當に之れ兩頭共に動き歩くの時、誰か又否定する人がありませうぞ、尙書も斯く迄理屈が進んだのだから、稍々悟道に近いのぢや、されど本來無一物の禪旨を奉ずる人で有り乍ら、自ら口に現は

して蚯蚓と云ふ相をまづ第一に拵らへ、而して兩頭共に描き出すのは、蓋しまた徹底大悟の境界ではない、で、即風火未だ散せざるを會せよと云つて、兩頭が果して動くとしたら、まだ六根の風、「即ち眼耳鼻舌身意」、六識の火、「即ち色聲香味觸法」、其他無明と申して愚痴等の風や、煩惱即ち喜怒哀樂等の火が、燦として輝き爛として光り、其輝き其光りが森羅万象事々物々に映じ、既に其無限なる万象の境に映するから、恰も反射作用で万々の境を心、意、識、に傳達送遞して來るので、美は美なりと觀じ醜は醜なりと觀じ、正邪曲直善惡是非などの相が、千万無量に動き出して來て、『野原にむすぶ柴庵り、名もなき物に名を附けて、はてし知られぬわたつみに、漂ふものぞあはれなる、醒めよ醉生夢死の客、のりてふ月は曇りなく、盡きぬ諸世をてらすなり、つきぬ諸世を照すなり、』遂には八萬四千の多きを増すのは、所謂無明の風、煩惱の風が消えぬ證據であると領會したら、それで別に卑理屈を云はぬでも可からうと、先生一本ビシヤリ參つたものと見える、故に暫らく應戰に窮して默然平坐するより外無かつた。乃で和尙其苦狀をデット眺めて居たが、忽ち作計



を廻らしてヤ、尙書さんと、理由もなく茫乎と喚びとめた、處が吾等の人に接する時の如く、ハイと返事をした其語の未だ終らぬ中、早くも第二計の奥秘を現はし、まづく待ちよ尙書、今日我等が衣食して喰うて居れて、美なる花艶なる相を見つゝ、或ひは談笑し或ひは行動し、鼻は直立して其作用に戻らず、眼は横に具りて其天職を怠らず、呼べば答へ喜に笑ひ悲に泣く、其有様が即ち佛性の妙用です、お前さんは先頃から佛性の蚯蚓を兩斷して、兩頭俱に動く、乃で其佛性は、左右何れの頭に存するがとのれ尋なれど、其れ尋ねは誠に幼稚である、私は尙書さんと喚んだら貴公はハイと云つたぢやないか、ハイと應答されたが即ち佛性であつて、何も疑はしきものは御座らぬぞ、文字の上から見れば和尚の答へはや、平凡なるかの如く思はるれど、意味を靜かに考へて來たら捨て難い曲奴である、されど尙書はまだ了解し得ぬで、更らに亦理論に赴いて即今の祇對を離卻して、第二の主人公有るべからずとや、得意顔、夫れは何であるが、今即ち和尚と對してお談をして居る、其祇對を離れて第二箇の主人公、換言せば佛性は有りますまい、飽く迄も尙書は理性

の人である、理論の人である、進んで菩提を遠方に求むるの外、退ひて本來本具の佛性を自分銘々の脚下に捕へる丈の修行が恐らくは皆無なものはあるまいか、和尚、尙書を喚ぶ今上と作すべからず、と、お前さんは尙書であるのだから、陛下と爲すことは到底出來ぬ、それと同様、總ての相は假相である、から元より二つなき佛性とする事は出來ぬ、然れ共陛下萬政を一人にて總裁が出來ないからして、爰に始めて諸官吏を置いて補佐せしむる故、陛下を離れて官吏なく官吏なければ國政行はれず、で、暫らく陛下と臣民との區別が出來るけれども、其本源はと云へば政の一に歸するのぢや、佛性と煩惱も亦復斯の如きものと假定せば、遂には眞如佛性の一に歸するのである、蚯蚓の相を認めるから、斬るとか斷つとかの妄想が起り、其妄想に伴ふ動不動が生ずる、尙益領悟に苦む處亦炳焉たり矣さ、果して和尚の云はるゝ如くならば、總て貴僧に祇對せぬが是れ弟子の主人公でありませうか否か、此段は相對と絶對能觀の識と所境の相、言を換えて申せば、不可知的の靈光と、可知的萬象の大相撲を戦はすのぢやから、右様心得て貰らう、乃で和尚も少しく憤色を呈し



て、コレサレ前さんまだく其様な愚にも附かぬ馬鹿をお言ひか、但だ祇對する計りぢや無い、例し拙僧に祇對せなくも、無始劫來と云つて、増劫とか減劫とかの分れぬ以前から、生死の根本を探ぐり來れば、佛性一如の作用即ち悟迷兩通して、一途なのが呼べば應ずる主人公だ。根本と云ふは俗に原理とあつて、其原理から諸作用を出すのが即ち原則である、故に學道の人が眞實の佛道を識る事の出來ぬのは、祇だ、從前の識神を認めて、固執する爲めで、無始劫來、生死の本痴人、解し難い言葉で専門の和尚達も困る處だが、此處はまづ一切妄想の分別の相を離れた眞心を目指したのでと思ふたら、從來の善知識が一齊に口を揃へて、少し六ヶ敷い段になれば、ウンともピンともカンともグツとも云はれぬ、絶大の大で言外の言で、妙中の妙で、絶言絶慮の所で、有無得失超凡越聖で、父母未生以前天地開闢前の好消息だなど、自分も人も解らない様の事をならべるよりは、聊か眞を繼ぐに足るものあらう、喚んで本來身と作すとは、覺了すれば無一物、此身このまゝに大寂定中の佛であると云ふのだ、解釋は異なれど時代思想の人々に布かかんは斯様な事で宜しからう、指月の評

この話、千古の龜鏡能く邪正を甄す、若し此語無くんば、吾徒永ま先尼が黨と爲ん、西南の下多くは是れ一呼一諾を認めて主人公と爲す、又祖意教意と謂つて分別の影事を以て、虚妄に前塵を執して憶想す、皆賊を認めて子と爲すの偏計なり矣、便ち是自ら瞞じ人を瞞ずるの大過患、豈法王法の實を得んや、須らく知るべし鳥道に行き竿頭に坐するすら、猶是功にして途路化城なり、若其姓名なく國土無きに至らば、吾此に於て切なり、更らに如何と道はゞ、未だ劈口に打たる、事を免れず、又云、汝若し實に先尼を見は六十六種應に自知すべし、自知の時若何ん、汝は是最下の人

指月の評を見ても尙書が如何に幼稚であつたかは燎々乎たりである、然し乍ら絶學



の如き人でさへも、この話は千古の龜鏡であると云はれたのぢやから、禪旨を欲して其思想を鍛鍊する方は、是非とも充分の研鑽講究がして欲しい、龜鏡とは正邪を鑑みるの照寶臺を指したので、西南の下とは當時の清國地名を指したので、多くの禪旨が岐れて居て、佛祖の眞意に背反した禪定家も澤山に居り、奇々妙々の處に悟道といふ名稱を附會し、而して自ら我はお悟りを開いたなど、随分變手胡の唱導をして、拍手して響きが奇異であつたから此事を得た、鼠がチヨロ／＼飛びあつたのを見て、一種云ふべからざる感に打たれたから當に大悟して了つた、喚んで返事をさせ答へれば言ふ者は何處に存するか、若し答へざれば汝は無佛性かなど、誠に俗人から見ると禪僧程意地悪るべき者は無いかの様に思はれる、其流弊を自然々々に造り出したのは、皆西南の徒が一呼一諾を認めて、是れが佛性だの主人公だのと、恰も啞者に手擬をする様な事をして居たからなのである、故に左様いふ輩を戒飭するには此談が最も適當であらう、若しこの語が無ければ吾等禪門の徒は、永く先尼が黨と化するより外ないのである、先尼とは印度で西爾伽と云ひ、此には有軍とあ

つて眞理を遠ざけ、一種云ふべからざる怪事を學ぶ外道なんだ、斯の如き輩は所謂其啞者の如き手擬てまを空想して、是が千佛万祖の眞意であるとか、動かす事の出来ぬ教意だとか云つて、妄想分別の影事を捉へたり、又は虚妄に前塵を執して憶想誤謬を逞うする、誠にナサケ無き事である、夫れ等の類は皆自ら惑ひ狂うて、眞性と離隔するは皆是賊（煩惱の賊）を認めて子（眞實）とするが如き偏計である、前塵認賊等の義理は大佛頂經に、阿難曰く如來現今心の所在を徴す、我今心を以て推究尋逐す、即ち能推者我れ將て心と爲す、佛曰く、咄阿難此れ汝が心に非ず、阿難嬰然として坐を避け合掌起立佛に白す、此れ我が心に非ず當に何等と名づくべきか、佛阿難に告げ玉ふ、此れ前塵虚妄想、汝が眞性を惑はす、汝無始より今日に至る迄賊を認めて子と爲す、汝元常を失ふに由る故に輪轉を受く云々とあるを引かれて一切見聞の覺知を滅せねばならぬ事を懇誘されたのである、又偏計とは推求の義とあつて分別の異名を形容したのぢや、故にそれ等の虚妄偏計に安んじて、眞實の正法否佛性を得んとするは、是れ自らを瞞じ人を瞞するの甚しき大過で、患ひざらんと欲するも



思ひざるを得ぬ次第である、其邊に徘徊して居る輩は百万年を経ても、法王法の實在を領得する事は出来ない、天台大師が偏計の頌に曰く

妄計因作執

迷繩是爲蛇

心疑生暗鬼

病眼見空華

一境雖無異

三人乃見差

了茲名不實

長取白牛車

と、試みに吾人が平素手の舞ひ足の踏む所を静かに觀じ來ると、大師が頌の一々胸を裂かるゝかの様覺える、病眼に空華を描く如き分別妄想を起すから、八万四千の塵勞忽如として生ずるのだ、三人相寄つて各其見解を異にするは、實にこの虛妄妄想を構成するからの事ぢや、靜慮万象に犯されぬ禪旨を種々に説き立て、或ひは如來禪である、或ひは祖師禪である、或ひは最上乘禪であるなど騒ぎ出すは何たる偏計ぞ、無禪の禪に何の立名する所がある、故に法王法の妙境を感受する事が出來ぬのぢや、須らく知るべし鳥道に行き竿頭に坐するすら猶是れ功とあつて、鳥道と云ふも竿頭と云ふも共に吾人平生茶飯の往來を指したので、輕業的芝居の事ではないのだ、若し夫れ言象を捕捉し來つて、洞山大師が示衆の鳥道、長沙の語の坐竿頭な

ど、小六ヶ敷講義をすれば其處には、妙な變な俗人には解し難い理屈もあるが、俗人一般の解し難い高尚の問題を拈提したからとて、濟度下の善男善女にして其理に感應し造詣する事が出來なけりや、一切衆生に皆化を被らしむると云ふ、佛陀の眞意を全行するは難いから、人は如何なる理屈ありとするも自分はまづ此位な處で容赦を希うて置く、此れも彼れも、併しなから、若し實に前陳の先尼が黨に入つて、眞に其先尼を見下し得る底の處まで進んだら、九十六派の外道見が其根底に蠢爾として、ウヨク動いて居る事なども自知する事があらう、

## 結 言

一千七百則の公案、臨濟曹洞黃檗の三派に亘つて各其拈提を異にして居れど、悟道の本尊を發見し終れば、畢竟無一物の沒風流たるに皈するのぢや、誰か禪宗を指して派あると云ふか、然らば其人はまだ禪の禪たる所以を解し得ぬ門外漢である、數量に墮せざる禪宗が、何故五家七宗となり、一千七百の公案など拈へたのか、コハ



聊か疑ひなき能はざれど、十人論すれば十人とも其見解が異なる如く、各諸高僧の悟道の見地が、種々の方法と種々の修道とで、大悟發明された其働きを稱して、古則とか公案とか云ふのだから、如何程談しても説く所と修める所は皆同一であれば、餘りよなき事を話して後人に笑ひを貽さんよりは、此邊で三百則の雑談は御免蒙らう。幸にして自今以後禪に依つて安心を求め、禪定の力で總ての不安を慰め、良心と理性との調和が得られ、所謂、煩惱の八風吹き荒むとも、眞如法性の主人公は、其煩惱の風に吹き倒さるゝ事なく、高く半空を衝いて泰山の動せざるが如き境界を、自分銘々の理想として形ち造る事が出来れば、賢者も愚鈍も男子も女子も、官吏も醫士も農夫も馬丁も、其儘にして佛道の極地に安坐し、法王法の樂天歌を奏しつゝ、「人よ汝は塵なるを記せ」と云ふ不完全極まつた人心の腐敗を除く事が出来て、釋迦をも汚れなき理想では顔色なからしめ、三世の諸佛や歴代の祖師をも、不動の念に住して打殺する事が出来る、禪門で多く唱へる事だが、佛來れば佛を呵し、菩薩來れば菩薩を呵し、羅漢來るも祖師來るも呵し皆盡して近寄らせぬとは、汚れなき

曇りなき理想の發展を指したので、何も外に不思議の意味はないのである、然れ共釋尊の流れを汲んで居る者は、修證一如が大切であつて、如何なる時と如何なる境遇とに論なく、苟も佛教に依つて諸の苦惱を脱し、心靈上に大満足を得んとする者の、寸時も此事を忘れぬ様心掛けが専一である、如何に本來本法性天然自性身と云へばとて、誰も生れ乍らにして學者たりし者も無ければ、又王公將相たりし者も無きが如く、夫れ迄に昇登する徑路に於ては、必らずや幾多の苦辛と無量の艱難とを経て、始めて碩學鴻儒となり、王公となり將相となり而して國家樞要の顯職に立つと同様であるから、今佛道を奉ずる者も亦復斯の如くで、如何程博學多才の人であるからとて、人倫の破壊者となり没道義の甚しき者では、到底衆人の尊崇を得る事が出来ないのみならず、又人心収攬は想ひもよらぬ結果を呈するのであるから、佛教の指導したる理想によつて安心決定する事が出来たなら、其理想に戻らざる活動を具體的に示さぬばならぬ、昨年だか、萬朝の黒岩周六氏が、理想園と云ふ者を組織して、大に社會主義の鼓吹に勤めて居るが、誠に結構の事である、團員名簿を一



覽すれば、種々の人物も加入して居て、中には惡るい人も居るが、概して皆多くの模範と爲る丈の資格を有せる人が多からうと思はれる、其團約に『吾等は眞實を以て私に處し正義を以て公に對するを理想とし、至誠以て之を躬行し、弘く人に及さん事を勉む、慈愛、勤勉、忍耐、剛勇、英邁等の美德は最も修養せんと欲する所なり』と、是れ稍々禪に近い行動である、余は敢て黒岩其者に阿諛するではないけれども、彼等一團の徒が現に爲しつゝ、在る行動を見たら、禪にや、近きものだと云ふ事が判明しやう、彼等は團約に眞實を以て私に處し、正義を以て社會及び公に對すると云つた、其言に違はざるの行動を社會に示して居るぢや無いか、此點に於ては儘に佛教の禪旨ある一部分を認めねばならぬ、何故と云ふに、禪定の力を以て惡魔を降伏すると云ふのは、内外玲瓏として輝き光る理想の劍で、不義不正好策中傷、姦盜邪曲無慈悲無節操等致へ來れば限り無き罪惡の主因に成る者を逐つ拂ふの意味だから、公私に處して僞はる所が毫も無い、是れ其禪旨の幾部分を含み居るものにあらずして何ぞ、自分味噌を言ふと思ふなよ、名こそ種々異なれ、其實が禪旨に契つて

居たら、禪の幾部分に編入したからとて、何の不都合があらうぞ、禪の本旨は靜坐、疑念、心源を窮明する一種の教たるは、前陳に徴して略了解が出来るかと思ふが、も一つ述べぬければならぬのは、心源窮明の時代と、初門修禪の時代と、發展活用の時代と、この三つの梗概を述ぶる必要がある、で、最も深き注意がして欲しいのだ、心源窮明の時代とは、總ての妄念や煩惱や苦悶等に冒されず、吾人は何故に靈性を有せるか、有せる靈性が如何なる作用で、或ひは動して狂瀾怒濤となり、或ひは靜して油鍋廓然風なく動なく、恰も湛然波なき海水の如くなるかを研究して、一念を所有万境に走らせず、無念無想、靜かに心を不動の境に坐せしめて、凝然三昧に入つて工夫するのを云ふのである、往古迦葉尊者が鷄足山中の寒窟に、靜坐疑念の王三昧に住した如き、皆是之れである、要するに心源窮明して菩提坐に到達せん事を期するは、時間の僅少や修養の未熟で其目的を達せられる者ではないから、一生涯を其研究に犠牲とする決心が無くては、斯かる妙旨を味ふ事は出來ぬ、一生涯の犠牲、あゝ何たる窮屈の事ぞ、醫士とか軍人とか官吏とか、各



特殊の職務に服して居る者は、其様な永い事では禪學も修められぬと、斯様な言も出やうが、何一生涯の犠牲と云つた所で、其服せる職務を打捨て、別乾坤に身を投せよとの旨意ではなく、煩雜なる多忙なる其職務の中にも、吾等心源、本來如何なものぢやと、疑念工夫して怠らぬ様勤めて出たならば、取りも直さずそれが心源窮明に一生涯自身を犠牲とするので、迦葉尊者が鷄足山中の寥寂に禪膽を鍊られたから、自分も爾かせぬければ破顔微笑する事が出来まいと思ふと、直に天地の離隔が生じて白雲万里となるのである、白雲万里、十万億土、是れ皆教者が言下に齷齪して漫りに疑團を結ぶからの事で、原因は一步踏み外したに過ぎぬ、試みに其心源の窮明法を申さうか、古來より今日に至る迄如何なる人と雖も、普通以上の學理に飽きた人は、概ね參禪の必要を唱へて心源の究明に、日も亦足らず餘念なき事は掩ふべからざる事實であるが、然らば如何にして靜坐疑念すべきか、又如何にして其心源が明らかめられるか、之れ當然起る疑問故、其疑問に對して予の見解を聊か談せば、大略先づ此の如くである、心源の究明など云へば誠に難き事の様に思はれやう

が、自分の考へでは心源の究明と云ふも、畢竟亂麻の如くなる思想を、己れを知る處で夫れを抑制し、而して心を平坦の途上に置くのが心源の究明かと思ふのである、平坦とか平氣とか云へば、如何にも爲し得らるゝ易行の如くに聞えるけれど、どうして〜其様な軽い事では、心を泰山の不動の境に置く事は出来ぬ、恰も前に談した鳥窠禪師が白樂天に教へた如く、三歳の童兒も語は能く解し能く記憶して居るけれど、其教へられた通りに行ふ者が如何程あらうぞ、實に晨星を仰ぐの嘆がある、故に禪旨は全く形の上に行ふのであるから、阿彌陀が行も願もれ引き受けくださると云ふ、眞宗即ち他方易行門の様なトテもた安い横着仕事では、難行聖道門の禪學は修められぬ、で、心源の究明とは其行ひ難き所を能く行ふを言ふのであると予は憚らず斷言するのだ、行ひ難き所とは何を云ふのであるか、人を罵詈するのを慎み、人を心の中で憎み且つ斥けるのを云ふのである、心の中で人を罵詈し誹謗し排斥し輕重する者程恐しいものはなくて、又大なる罪になる事は無い、一心が万境に移つて好惡美醜の感を起す如く、心さへ靜境不動と安坐して居たなら、如何なる物